
謝罪

藤原

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

謝罪

【Nコード】

N0771S

【作者名】

藤原

【あらすじ】

放蕩者の亭主に悩まされながらも、親子三人、堅実に暮らして行くことと決めた主人公おせんの波乱の物語。

夫の浮気

外に雨の音がしてきた。おせんは、青菜を刻む手を止め、ふと顔を上げた。台所の格子窓に、亭主の長吉が、肩を窄めるようにして雨から逃げてくるのが映った。

板戸は途中まで開いている。建て付けが悪く、おせんでは思うように開閉ができないので、いつもこうして中途半端な状態で開いているのだ。

「ちきしょう」

長吉は舌打ちをすると、戸を一度持ち上げ、下の方を軽く蹴った。すると戸は軽くなり、するすると行き来した。

「お前はだらしなくていけねえ」

首を曲げ、戸枠の天辺を見るようにして敷居を跨いだ長吉は、不機嫌な口調でそう言った。言いながら、単衣についた水滴を払い落としている。黒地に細い縞柄の紬は、長吉の最も気に入っている小袖だ。

「お前さん、小梅を見なかつたかい？」

長吉がきちんとした恰好でいることを、まるで珍しそうに、おせんは、上から下まで眺めた。

「小梅なら井戸の廻りで遊んでたぜ」

「そう」

そっけない相槌を打つと、おせんは土間に下りて、解いた前垂れで長吉の背を拭いた。

「雨が降ってきたんだから、呼び戻してくれればいいのにな」

「小雨だろ、すぐにやむさ」

「風邪でもひいたらどうするの」

「聞いている間にお前が迎えに行けばいいだろう」

「もっつ」おせんは長吉の胸に前垂れを押しつけると、下駄を鳴らして外へ飛び出して行った。

夏が近づいているのを知らせるように、日足は伸びてはきていたが、西の空から茜に染まる時刻になると、日中の滲んだ汗が、ひやりとするほど冷たく感じる。小梅は母親のおせんのように頑健な方ではない。普通の三歳児に比べて小さい躰は、風邪や熱に侵されやすい。そんな小梅を、おせんは懐の中に入れるようにして育ててきた。

「小梅、いつまで遊んでるんだい。日も落ちて暗くなってきたし、雨も降ってるんだから言われなくても帰って来なくちゃだめじゃないか」

長吉の言った通り、小梅は路地の井戸端にいた。他にも数人、子供がいたが皆、夢中になって竹筒でできた水弾みずたまで遊んでいる。数日前、長吉が裏店の子供達に拵えてあげたものだ。子供達が大はしゃぎで、器用な長吉を絶賛する様子を、小梅が満足気に見る姿が、可愛らしかった。

「あらあら、みんなびしょ濡れじゃないか」

三軒先に住む女の子の髪の毛を、手で払いながらおせんは言った。女の子は大丈夫と言ったが、垂れた涙を、下唇を上げて器用に舐めている。裏店の子供達の中で、小梅は年少の方だ。それでみんな遠慮しているのか、他の子が、水の飛ばし合いでずぶ濡れなのに比べ、小梅だけは、降り出してきた霧状の小雨に吹かれただけのように見えた。

「小梅、さあ家へ帰ろう」

「ん……」

二度、声を掛けて漸く小梅は振り向いた。しゃがんだままで、首だけ捻っておせんを見上げている。不服そうに眉を寄せ、口を尖らせ、精一杯、反発しているつもりだろう。

「帰るよ小梅、また明日、遊んで貰いな」

おせんもしゃがんで、小梅の前髪を振り分けながらそう言った。

「ん……」小さくうねり、頭が飛んでいってしまいそうな勢いで小梅は首を振った。おせんは構わず、小さな掌を握って立たせると、

「遊んでくれてありがとう。あんたたちも早く帰んなね」と言つて、抵抗する小梅を、半ば、引き摺るようにして家に連れ戻つた。

薄暗い茶の間で、肘枕をして寛ぐ夫を見てみると、おせんは無性に腹が立つことがある。いまもそうであつた。

「お前さん、灯りぐらい点けたらどうなのさ、もう、しみつたれていやだねえ」

「うるつせえな、おかめっ」

長吉は、舌打ちをして、怠そつに起き上がり、胡座をかくと、腕組みをしておせんを見上げた。

「行燈を点けたら点けたで、油がもつたいねえ。点けなかつたら、しみつたれと文句を言いやがる。一体どつちなんだよ、はつきりしやがれ」

おせんも負けていない。ここ何年も女房を「おかめ」と呼ぶ亭主を上から見下ろすようにして仁王立ちになつた。

「晴れた夕暮れなら灯りがなくとも風情だけどね、雨降りはいやなんだよ。言つたでしょう、雨の日は嫌いだつて」

「勝手なことばかり言いやがって馬鹿が」

「馬鹿とはご挨拶だね。仕事もしないで酒ばかり飲んでほつつき歩いてる身分で偉そうなことを言つんじゃないわよ」

「なんだと」

「なによ」

おせんが白い二の腕を見せて、腕まくりのふりをしたところで小梅が、「ちゃん」と父親に縋り付いた。幼いながら、こつすること、母親が叩かれずに済むとわかつているのだ。小梅の思惑通り、長吉は愛しそつに眼を細めると、娘を膝に招いた。

「小梅を味方につけようたつて、そつはいかないよ、あたしはね、今日はとことん腹が立つてるんだからね」

おせんは言つと、どすんと長吉の前に腰を下ろし、膝の上で固くなる小梅の髪を手拭いで拭いてやつた。水気の取れた小梅の毛先が、四方八方、火の子の妖怪のようになったのを満足そつに見つめ、お

せんは娘にだけ微笑むと、片手で畳を叩くようにして立った。

「おいブス！文句ばかり言ってるねえで、とつと飯の仕度にかかりやがれ」

「もう、なにさ」

ふんと鼻を鳴らし、おせんは手拭いを長吉の顔めがけ、投げつけた。

「なにしやがんだ、このあまつ」

小梅を脇において、片膝を上げた長吉に怯む様子もなく、おせんは前に進んで顔を突き出した。

「あたしの名はね、おかめじゃないんだよお前さん」

「ほほう、おかめじゃなかったかね。では、なんて名だったかなあ、思い出せねえな」

「もういいよ」

「おかめじゃなくて、なんだった？」

おせんは、女房の顎を指先で持ち上げてうそぶく長吉の胸を軽く押すと、頭に巻いていた布を剥ぎ取り、それを長吉の口にねじ込んだ。

おせんは今年二十五、長吉は二つ上の二十七だ。二人は七年前、互いに好き合つて所帯を持ち、その四年後に、念願の子供を授かった。二人は小梅が生まれる前から、ここ本所、深川回向院の裏手、すずめ長屋で暮らしている。二人が出会ったころ、長吉は唐木職人だった。黒船稻荷に近い蛤町で生まれ育った長吉が、入方町の唐木職の親方の元に弟子入りしたのは十五の年で、几帳面な性質の長吉は、それこそ真面目に修業を続け、十年でやっと一人前と言われているほど精巧な技術が要求されるな唐木職にいて、僅か五年あまりで、一端の職人扱いをされたほど、長吉は腕の上達が早かった。

しかしその長吉が、親のように慕っていた親方と大喧嘩して店を辞めたのが二年前。以後、彼は、酩酊するほど酒を呷る日も少なくなかった。

暴力を振るうわけでもなければ、賭け事に興じている風にも見え

ないので、最初の半年ほどは、おせんも文句も言わず、長吉と所帯を持ったころから始めた、髪結いの手間で、何とか生活を遣り繰りしていた。だが、おせんが長吉を甘やかしたのもそこまでである。日雇いの肉体労働に、気が向いた時だけ出掛ける長吉が、その日、手にした給金を全て酒代に使ってしまったようになると、夫婦の間に争いが増えた。大黒柱である筈の長吉が体たらくな上、いま住んでいる長屋の店賃が一分と高額なこともあり、おせんが幾ら女髪結いで稼いでも、暮らし向きは楽にならない。貧乏も喧嘩の原因のひとつだが、何よりも、おせんが気に病んだのは、酒によって蝕まれる長吉の躰である。素面の時を見つけては、折角いい腕を持つてるんだから元の職人に戻って欲しいと頼んだ。しかしいくら頼んでも、長吉は一向に聞く耳を持たない。一体、親方との間に何があったのか、店を辞めた当時、喧嘩の理由を、おせんは幾度となく問いただしてみたが、長吉は貝のように口を閉ざし、答えようとしなかった。それどころか、すぐにむっと渋面を作ると、外に出て行ってしまふのだ。

菓子折を抱えて親方に頭を下げに行った時も、ついでに喧嘩の原因を探してみたが、こちらも何も話してくれなかった。

おせんが女髪結いを生業として、今年で六年になる。馴染みの客も増えた。小梅がまだ乳離れしていない頃は、背に括り付けて得意先を廻ったものだが、二歳を迎えた頃からは、隣家のおすえに、小梅の面倒を頼んでいる。おすえは、おせんよりも見た目、一つ、二つ上の大工の女房だが子が無い。お喋りで、軽口をたたくところは気になるが、心根のやさしい人間で、人見知りの激しい小梅も良く懐いていた。

普段ぶらぶら、ごろごろしているだけの長吉は、子供を預けて出掛けるおせんのが気になるようで、予定よりもおせんの帰宅が遅くなったり、休日の筈が急に呼び出されたりすると、あからさまに不機嫌になった。そういう時、長吉は、小梅をおすえの家から引っ張り出して、日の高いうちから湯屋へ連れて行ったり、両国広小

路に散歩に出掛けたり、雨の日などは、家の中で人形遊びの相手をしたりして時間を遣り過ごした。しかし外が黄色に染まる時刻になっても、おせんが戻らない時などは、木戸の内側で小梅を抱き、首を伸ばして女房の帰りを待ち詫びるのだ。

なのに、待ちに待ったおせん顔を見た途端、長吉はにこりともしないで、遅いな、飢え死にさせる気かと、悪態をつくのである。こういう時、おせんは文句を言わない。亭主が自分を気に掛けてくれることが嬉しくて、すぐに夕飯の仕度に取り掛かる。普段は出し惜しみする酒も、気前良く付けて足してやったりする。

酔いつぶれて眠る長吉を、おせんは時折、不憫に思うことがある。真面目な職人だった長吉を、ここまで変えしまった原因は、自分にあるのではないと落ち込むのだ。思い当たる節がある。

空いた徳利を膝の上で抱え、つくねんと酔った寝顔を見つめていると、狡猾に立ち回れない亭主を哀れにさえ感じた。そうしていると、ふと自分の過去と、そこから繋がる長吉の崩壊を結びつけてしまふのだ。

昨夜から、空気がまとわりつくように蒸し暑い。「あつい……」寝苦しさで寝返りをうち、うなじの汗を掌で拭いていたら、階下に物音を聞いた。

「お前さん」

隣りの長吉を、手の先で探るが、そこに寝ているはずの身体がない。薄闇のなか目を懲らし、梯子に縋り付くようにして下りていくと、土間の上がり框に腰を下ろす長吉の輪郭が浮かび上がった。

「お前さん」

「おう、起きたか」

背中を向けたまま長吉が言った。建て付けの悪い板戸の隙間から頼りなく、蒼白い光りが漏れていた。夜が明けようとしている。

「出掛ける」

「こんな朝っぱらから、どこへ？」

「仕事を、探しに行こうかと思ってな」

「えーっお前さん」

おせんは奇声を上げて仰け反った。この半年間、全く働く素振りを見せなかった長吉が、仕事に行くと言っている。

「なんだよ、いやな女だな」

長吉はむすりとすると、膝頭に肘をついた。

「嬉しくないのか？」

「うっん嬉しいよ……でもさお前さん。なにも夜が明ける前に行くことはないだろう。こんなに早く出て、どこにどんな仕事があるの？」

「口の減らねえ女だな」

長吉はおせんをちらりとも見ないでそう言った。

「朝ごはんを食べてからでもいいんじゃないの？」

おせんは背後から長吉の肩に手を置き、顔を覗き込もうとしたが、長吉は、おせんの視線を避けるように立ち上がった。

「いや、いい」

「いいって……あとで腹が減ったらどうする。握り飯をこさえるから待っててよ、ね」

「いや、いいって」

「……」

おせんも立ち上がると、腕組みをして、長吉の後ろ姿をまじまじと見た。藍色の縞の小袖を着流した瘦身の長吉は、妻のおせんから見ても惚れ惚れとするほど^{いなせ}鯔背だ。だけど今朝は、別に長吉に見惚れているわけではない。どこか疑念のようなものが胸の奥からふつふつと湧きおこった。

「ふーん、そう、なんだか随分と急いでるようだし、これ以上は止めないけどねえ、お前さん」

「日暮れ前には戻るから」

そう言つと、長吉は心張り棒を外して戸を開けた。外は白々としている。肌心地良い外気が部屋の中に流れて込んで来た。

「そう」

おせんが低い声で言うと、じゃあと、長吉は、片手を上げ、逃げ出すように出て行った。結局、今朝、長吉がおせんと眼を合わせることは一度もなかった。

「あんな恰好で仕事なんて出来るのかね」

ぶつぶつ言いながら、もう一眠りしようと梯子を登ると、目覚めたばかりの小梅が、腕を伸ばした腹ばい姿でじつとこちらを見つめていた。

「お越ししまったかい。ごめんよ」

おせんは小梅を仰向けにすると、その横に寝て、腹の上をぽんぽんと、たたいてやった。

その夜、長吉は酒の匂いをさせて戻って来た。朝と同じく、やけにそわそわ機嫌がいいが、おせんは、長吉が酒代をどうしたのかが気になった。今朝方、ふとした衝動に駆られ、自分の財布の中を覗いてみたが、抜かれた様子はない。しかし酔えるほど飲める銭を、長吉が隠し持っているとも思えなかった。

「あんだ、働き口でも見つかった？」

おせんは、ややきつい言い方をした。長吉はいいやと、ごく自然に、恐縮するわけでもなく答えた。

「じゃあ、どうしたんだよ酒代。金なんて持ってなかっただろ？」

「宗治が払ってくれた」

長吉は、おせんの腰にしがみ付いてくると、そのまま、だらしなく畳に転がって、四肢を投げ出した。宗治そじというのは、長吉と同じ裏店で育った幼馴染みで、今も蛤町で、両親と共に青物屋を営んでいるが、夏の間だけ、両国橋西詰で水菓子売っている。肌の色が女のように白いのが気に掛かるが、だからといって見た目は悪くない。なのに未だ一人で、好きな女ができたという噂も聞こえてこない。

「宗治さんか、仕様がないな。でも、みっともないから、おごってもらうのはやめてね」

「はいはい」

大きな赤ん坊のように、長吉は手足をのびのびと伸ばして、茶の間で寝てしまった。

「お父つあん、寝ちまったよ」

とうに眠る時刻だというのに、一人では寂しいからと、小梅は茶の間でごろごろしていた。中二階の寝間から引き摺り下ろしてきた夜具に、蓑虫のようにくるまり、顔だけ出して、親のすることを見ている。

「ちゃん、寝ちやったね」

嬉しそうな声を出して、お手製蓑から這い出た小梅は、仰向けになる長吉の頭の横にちょこんと座ると、母親似の、鼻翼の小さな鼻を摘んだ。

「くちやい」

「臭いかい、ふふふっ……」

おせんは笑うと、臭いねえと、言いながら長吉の口元の匂いを嗅いだ。酒の匂いは確かにするが、それに交じり、何か甘ったるい香りがした。

「ん……なんだ？」

おせんは訝しそうに眉を寄せた。甘い香りは、シヤム沈香のようだった。髪結いという仕事柄、遊女の髪を結うことの多い、おせんは、こういった類の匂いに詳しい。口元から顔をずらし、匂いの元を辿った。どうやら匂いは懐の辺りから香る。くんくんと鼻を鳴らし顔を押しつけると、間違いない、濃いシヤムが香った。衿を広げ、下着を嗅いでみる。汗に混じり、微かだが沈香が匂った。更には下着を広げ肌に直接、顔をつけた。

「石鹸の香り……」

湯屋にも行つたらしい。頭に血が昇った。

「湯に入つて証拠を消そうとしたな、このっ」

言いながら長吉の額を張った。長吉は起きない。それを真似て小梅も父親の額を平手でペタッ。

「お父つあんは何をすんだい、こら」

おせんは今度、小梅の頭をたたいた。

「おつかあ、だめだめ」

みるみる顔を歪め、小梅は大声で泣き出した。おせんはなんだか哀れに思い、小梅を抱き寄せると、

「ごめんね、でもさ、お父つんは叩いちゃだめなんだよ、どんなお父つつあんでも、小梅の親なんだからね」

抱きかかえて赤児のようにゆすり、頬摺りをして宥めた。酔っぱらいの長吉はそのままに、行灯の火を吹き消して小梅と共に二階に上がった。夜具に横たわっても未だべそを掻いている小梅をよしよしと抱いた。漸く小梅が寝付いても、おせんの眼は冴えていた。暗闇の中に眼を懲らしていると、長吉の不身持ちの病がまた始まったのではという疑惑が次第に膨らんでくる。

長吉の女遊びは、二年前から目立つようになった。それが原因で、隣近所を巻き込む喧嘩も少なくなる。そのたびに差配を挟んで話し合い、結句、元の鞘に収まるのだが。

「今度はどんな相手なんだろう。」

蒸し暑さもありません。するとついつい余計なことばかり考えてしまう。これまでの長吉の相手といえば、料理茶屋の酌婦、矢場女、といった、遊びの延長のような女ばかりだったし、新しい女と出会い、浮き足立ても、長くて一月もすれば、次第に落ち着きを見せた。これまで、おせんと別れたいという素振りには、^{おくび}? 気も見せなかった。

「そういえば、後家さんのときは厄介だった。」

「一昨年の秋のことだったか、長吉が二町ばかり離れたところに住む、二十代も終わり頃の寡婦に入れあげたことがある。その頃、既に長吉は仕事をやめていた。これは後で知ったことだが、長吉は、その寡婦と遊ぶ金を、全ておせんの稼ぎから消費していた。とはいっても貢ぎ込んだわけではない。暮らさに困らない程度にちょこちょこ持ち出しては、料理屋で飯を食わせたりした程度である。」

そのうち長吉が、縁日の屋台で、見知らぬ女に簪かんざしを買ってやつていたという噂が聞こえてきて、おせんは激怒した。相手が艶のある後家だと聞くと、怒りは頂点に達した。こういった類の噂は、お喋り好きの長屋の女房連中から、いやでも耳に入ってくる。

まだ乳飲み子だった小梅を紐でくくつて、紅ひとつひかず、得意先を廻つて客の髪を結つていたおせんは嫉妬で気が狂いそうになった。亭主の衣服や、小物を残らず家の外へ放り投げ、心張り棒をかって閉め出した。秋といえども、夜には冬の到来を思わせる寒さの中、長吉を一晚放置したのだが、後家のところへ逃げ込むことなく、夜通し板戸の前で腕を抱き合せて蹲っていた。

「死んじまつたんじゃ？」

小鳥が起き出す時刻になって目覚めると、おせんは不安になった。おそろおそろ戸を開けると、おつかあ、すまねえなど、おせんの腰にしがみついてきた長吉を、すんなり許してしまったことを思い出し、苦笑いをしていた。

「あの人はやつぱり病気だよ。」

おせんが漸く眠りに就いたのは、町が、完全に漆黒に包まれる時刻だった。

「あんた今日も出掛けるの？」

昨夜、なかなか寝付けず寝不足だったが、物音がするとおせんはすぐに飛び起きた。酒が残っているらしい長吉は柄杓でごくごくと喉を鳴らして水を飲んでいる。前屈みになっているので、唇の端から零れた水が水桶に落ちていたが、今朝はそのことにはふれないでおこうと思った。

「随分と遅い目覚めだな。夜が明けちまつてるぜ」

手の甲で口を拭きながら長吉が言った。

「あら」

開け放った板戸から外に眼をやると、薄曇りなのだろう、白くどんよりとした朝の気配が見えた。耳を澄ますと、裏店が既に起き出

しているのが分かるが、棒手振りの現れる時刻ではないらしい。夜具を出る時ちらと見たが、小梅はまだすやすやと寝息を立てていた。「お前さん、ゆうべは聞けなかつただけさ、昨夜一体どこで飲んでたんだい？」

「いつもの煮売り茶屋だよ。門前町の……」

「あそこら辺の店は酌取りがいたかしら？」

「なにが言いたい」

長吉は、苛ついたように顔をしかめておせんを見た。

「女いた？沈香の香りがあんだから匂つただけど」

「沈香？なんのこつた……」

「いたの、給仕女？」

「さあな、いたかも知れねえし、いなかつたかも知れねえな」

「ふーん」

身繕いをしたおせんは、房楊枝に歯磨き粉をつけて歯を磨きだした。それまで土間に突つ立って、おせんの動向を見守っていた長吉が出て行くこうとするのを、おせんは、袖を掴んで止めた。

「ん、ん……」

「なんだよ」

長吉は苛立つた声を出し、掴まれた袖を振って、おせんの手を払った。

「待って」

おせんは、口の中のものがこぼれないように、顔を仰向けながらもごもごと、どこ行くのと聞くと、手拭いを首に巻いた姿で井戸へ駆けて行った。顔を洗い終わると、木戸を出て行く長吉の後ろ姿が目に入った。

「逃げられちゃった」

茫然と見送っていると、菜っ葉を箆に盛つたおすえが現れ、あら、ご亭主はお出掛けかいと、木戸の方に顎をしゃつた。おすえは良く肥えている。大工の亭主との間に子がないせいか、小梅を、我が娘のように可愛がつてくれる。知らない人の前では貝のように口を

閉ざしてしまう小梅もまた、おすえには心を開き、一言、二言だが、自分の気持ちを伝えるそうだ。

「そうみたい」

「またこれか？」

おすえが、小指を立てて顔をしかめた。

「まさか、仕事を探しに行くって……」

「あの恰好でかい」

下駄に紬の着流し姿で、日雇いの仕事もなかるうと、おせんが怪しがっていることを、おすえは遠慮もなしにずけずけ言う。おすえのそういう無神経なところと、口の軽さを、おせんは苦手としたが、そこを差し引いてもおすえは何かと助かる存在だ。いやな顔を露骨に見せるようなことはしなかった。

「みんな言ってるよ」

この言い方もおせんは嫌いだ。自分の意見を言うのに、わざわざ「みんな」を引き合いにださなくても良いのではと考えた。次に言われることは分かっているので、おせんはうんざり顔を、袂をいじるふりで誤魔化した。

「そりゃあさ、長吉さんは男ぶりもいいしね、前は腕の立つ職人だったけどさ、今はどうだい、年中飲んだくれて、働きもしない髪結いの亭主様ときた。しかも女癖が悪くて、しょっちゅう女房を泣かしてる」

「……」

「おせんちゃんまだ二十五だろ。ここらできつぱり三行半を貰って別れっちまいなよ。あんたは良く働くし、肌もちもちして綺麗だし、引く手あまただと思うけどね、なんならあたしが紹介してやってもいいんだよ……ん？それとも何かい、あんた、長吉さんと別れたくない理由があるってのかい？」

「……」

「まさか、まだ惚れてるわけじゃないだろう？惚れてるんなら仕方がないけどね」

「惚れてるのよ。」

口には出さないが、心でつぶやいた。それに、とおせんは自分を卑下する。

「あたしなんて、人に言えない過去を背負った女なんだもん。」

おせんは、長吉の去った先を見つめた。白く霞んだ路地から目線を上げると、黒い雲が垂れ下がった、いまにも泣き出しそうな空が広がっていた。

「暑い……」

茹だるような暑さだった。西から差した陽が、容赦なくおせんの横顔を灼いている。おせんは首に巻いた手拭いで幾度も額から顎へ滴り落ちる汗を拭いていたが、拭っても、拭っても、汗は際限なく流れ落ちた。

「いつまでいる気だろう。」

おせんはつま先立って、道を挟んだ板塀の中を覗いた。僅かな板の隙間から、

朝顔の蔓が見えたが、中の様子は分からない。

ここは深川西町。おせんの視線の先には一軒の家がある。先程まで三味線をつま弾く音が聞こえていたが、今はひっそり鎮まり返っている。この家に長吉が入ってから既に半刻が経っていた。三味線の音が消えてからは小半時になる。

「怒鳴り込んでやろうか。」

何度も頭をよぎったが、もし二人が裸だったらどうしようかと、臆病風に吹かれた。自分を、勝ち気な女だとばかり思っていたのに、いざ長吉のこととなると及び腰になる。長吉の浮気はしょっちゅうだが、馴れることはなかったし、毎度、毎度、新鮮に嫉妬した。浮気は浮気、黙っていたらそのうち亭主は自分の元へ帰ってくる。そう言い聞かせてみても、どうにも腹の虫が治まらないのが女心だ。しかも、今回は何かが違う……そんな予感がした。言い様のない不安に駆られたおせんは、今朝、いそいそと家を抜け出す長吉の後を

追って来た。こんなことは初めてである。小梅は、おすえのぶ厚い胸に、押しつけてきた。

「三味線ねえ。」

おせんは読み書きができないが、三味線という看板は見慣れた字だったので、絵を見るような感覚で読んだ。

「と、いうことは相手は三味線師匠かえ、幾つぐらいの人なんだろう。」

相手の年令も気になった。今までの女は、下は十七から、上は二十代後半。三味線の師匠といえば、どう考えても娘という歳ではないだろう。引退した芸者が多いと聞くが、表通りに立派な店舗兼稽古場を構えているところを見ると、人の妾ということも考えられる。「ややこしいことにならなければいいけど。」「いやだわ、ふふふ……」

恪気に胸を焦がしながらも、意外と冷静に亭主の浮気相手を品定めする自分が可笑しくなり、口元を手で隠し、くすくす笑っていたら、通りがけの老夫婦に怪しまれた。咳払いをし、ふと空を見上げてみると、雲の動きが早くなっていた。

「さつきまであんなに天気が良かったのに。」

今朝、干した洗濯物と、おすえに預けてきた小梅のことが気に掛かった。

「惨めなだけだ、帰ろう……。」

おせんが首を垂れた時、三味線師匠の家の格子戸が開いた。おせんは慌てて向かいの店の看板の陰に隠れた。

「今度いつ来てくれるの、明日？」

甘えた女の声がした。高鳴る動悸を抑えながら、ちらと声の方を盗み見た。

「あつ………！」

往来の隙間に長吉がいた。女が寄り添い、長吉の衿を直してやっている。

「ちきしょう」

思わず口にし、おせんは、唇が裂けるほど噛んだ。血の味がした。「うちのおかめが意外と嫉妬深くてよ。まあ、しばらくは様子を見ようかね」

「まあ、おかめさんのことを気にしてるのね。いいじゃない、うっちゃとけば」

女が後ろ手に長吉の尻をつねったようだ。長吉がイテテテつと尻を撫でている。にやけた口元がだらしない。

おかめと呼ばれることを、これほど悔しいと思ったことはない。見ると、長吉はにやにやとした阿呆面で女狐の肩を抱き寄せた。

「悔しい……」

女の顔をしっかりと見てやろうと決心した。眼を細め、長吉の腕の中の女に神経を集中した。

「なんだい大年増じゃないか。」

三十路と思われる女は、小柄で痩せ型、胸も尻も薄く、色だけ白い。芸者上がりだと分かる着物の着方と、髪のかき方をしていて、眼が細く、尖った印象の顔には、鮮やかな色をした紅がひかかっていた。それを見て、おせんはまた腹が立った。

半月ほど前のことである。早朝、おせんが井戸端で大根を洗っていたら、おすえが寄ってきて、

「あんたんとこの亭主、また悪い癖が出たんじゃないのかい」とささやいた。

その頃、おせんも長吉の行動を怪しんでいた。差ほど驚きはしなかったが、おすえは、おせんの股ほど太い両腕をおせんの肩に置いてグイッと自分に向かせる。顔をじろじろと眺め始めた。そしてこう言った。

「おせんちゃん肌は綺麗だけどさ、少し化粧した方がいいよ。今夜辺り、紅でもひいて亭主を驚かせてやんなよ、どうせご無沙汰なんだろう。ぎゃはっははは……」

「……」

その夜、小梅を寝かしつけたおせんは、鏡台の前に座り、行燈の

火を引きよせて、顧客の遊女から貰った紅をひいてみた。意外と気に入った。鉄漿の剥げた口を窄めて品を作ってみてから、茶の間で寝転がる長吉の背をとんとんとつついた。

「ん……？疲れてるんだけどな」

最初から、何やら拒否の姿勢でおせんに向いた長吉は眼を見開いた。上体を起こし、尻をついたまま両手を擦って後ろに下がり、とうとう箆笥に背をぶつけると、片手で胸をおさえておせんの顔を、遠目からしげしげと見つめた。

「どう、きれい？」

おせんは精一杯、可愛らしく言うと、鏡の前でしたように、小首をかしげて微笑した。もう二十五、まだ二十五。笑った顔は童女のような人という。おせんは美人ではない。しかし肌だけは褒められる。血の色が、透かして見えるような、きれいな薄い肌をしている。眉や眼、口角が下がっている訳ではないのに、憂いを含んだ泣きべそ顔は、どこか男心を揺さぶる。一重で、黒目の大きな眼は、常に涙で潤んでいるように見えた。

「ねえ、きれい？」

自信を持って聞いてみた。しかし、返ってきた言葉は、おせんの期待したものとはかけ離れていた。

「びつくりするじゃねえかおかめ。人でも喰ったのかと思つたぞ」

「……」

「なんだ、紅をひいてるのか？鯨のような口には似合わねえからやめな」

「ばかやろう」

憤慨したおせんは、小梅の眠る二階に走り、茶箆笥の、奥の奥に隠して置いた、銅銭を握って駆け下りると、どういいうわけか、戸を開けて外に放り投げた。

「ほれっ金だ」

「何しやがんだもつたいねえ」

草履も履かずに外に飛び出した長吉を見届けると、

「もう帰ってくんない」

と、心張り棒をかった。

「冗談だよ、おかめ。赦して」何度も外で詫びる長吉の声を背にして座り、しばらく耳を塞いでいたが、いい加減に可哀想になって家に入れてやると、長吉も反省したのか、その晩、夫婦は久しぶりに同じ床で寝た。

「あたしには人を喰ってるって言ったくせに……」

いやな想い出に耽り、思わずつぶやいて顔をあげると、女狐が長吉の後ろ姿を見送っていた。

「あら、いけない。」

長吉に先を越されまいと、褌を帯にねじ込んだおせんは、新高橋の方から裏道を通って、松坂町のすずめ長屋へ急いだ。途中、知り合いの棒手振りから、余った巾着茄子をたたいて買ったので、小梅を預かって貰っているおすえに裾分けした。

台所で包丁を握るおせんの手は、いつになく力が入り、まな板に骨を切るような音を響かせてた。茶の間では、小梅が、人形に話しかけて一人遊びをしている。時折、小梅に眼を配りながら、おせんは夕餉の支度を急いだ。

「早く食べて、早く寝ちまおう。」

茄子を切り終わったおせんは、七輪を抱えて外へ出た。今晚は茄子の鴨焼きを作る予定だ。鴨焼きとは、茄子の田楽のことで、焼いて皮を剥いた茄子を縦に切って串を通し、油を塗った上から、砂糖を加えた味噌を塗ってもう一度焼き、仕上げに袖の汁をかけて食べる。長吉の好物であるが、長吉の分は作らない。

路地に七輪を出して、串刺しの茄子を焼いているところに、長吉がこのこの帰ってきた。

「おっ、今晚は鴨焼きかえ？いいねえ、一杯やりたいねえ」

「……」

隣りに屈んだ長吉の襟元から石鹸の香りがただよった。

「仕事もしないのに、湯屋へ行ってきたのかい、お前さん」

茄子に味噌を塗りながら、皮肉をたつぷり込めた、ねこ撫で声で言った。

「ああ、今日は暑かったからな、体中が汗でべとべとで、堪らなくなつてよ」

「そりゃ、そうだろう。汗を掻くようなことをしてたんだからさ。」

刷毛を握り込むおせんの指に力が入り、味噌が下にぼたぼた落ちた。それを見た長吉が、おいおいと茄子を取り上げた。

「なんだよ仏頂面して、気に入らねえな」

「ふん」

「なんだ、おかめ」

長吉は茄子を持ったまま、おせんの顔を覗き込んだ。口を吸うように顔を斜めにして近づいて来たので、おせんは思わず仰け反った。

「お前……」

おせんの顎に指先を添えて上げると、おせんの唇をじつと見つめた。

「なっ……」

おせんが引きつると、長吉は眉間にしわを寄せ

「唇がぱっくり切れてるぞ」

と、心配そうな声を出した。長吉と女狐の仲睦まじい姿を見せつけられて、噛み切った傷跡だ。

「あんたのせいよっ！」

おせんは、長吉から茄子を取り上げると、全てを皿に取り、さつさと家に入ってしまった。「おいっ」と長吉の怒鳴り声が聞こえたが、無視し、皿を一旦、上がり框に置いてから、冷や飯に、湯をかけて温め直したものを茶碗に盛った。

「なんだよこれは？」

土間と茶の間とを仕切る杵木に躰を凭せ掛けた長吉が言った。

「ささ、早くお食べ。とつとと食べてとつとと寝るんだよ」

突っ立っている父親に眼を奪われ、箸の止まった小梅の頬についた飯粒を取りながら、おせんは、嗜めるような口調で言った。

「おい、おかめっ！俺の飯はどうしたんだよ」

「お前さんの分はないよ。働かざるもの、食うべからずだ」

「なんだと」

長吉は、足元に転がっていた小梅の人形を蹴り飛ばすと、茶筴筥の引き出しをばたばと開けた。小梅が、はっと、泣き顔になり、箸を落として、無残に土間に転がる人形を指さした。おせんはそれを拾い、

「金ならないよ、前から欲しかった反物を買ったからね。浴衣を縫うんだよ。あたしと小梅の。それに合う簪かんざしと櫛くし、下駄も買ったから、もう蓄たくわえはないよ。我が家はすっからかさ」

おせんは顎をしゃくって、数日前に購入し、衝立の向こうに仕舞っておいた反物類をさした。長吉は、衝立の前に並べられた真新しい品物と、おせんを交互に忙しく見ると、口をあんぐりと開けて、ずるずるとその場に腰を下ろした。

「何てことしやがんだ、お前は」

つぶやくように言って、何かを思い出したように顔を上げ、俺の浴衣はないのか？と肩を落とした。

女狐

おせんの元に、とんでもない相手から仕事の依頼が迷い込んできた。深川西町に住む三味線の師匠、お鶴の元へ行ってくれと、髪結いを始めたところからの馴染みの客、おこうに頼まれたのだ。

「お鶴？」

すぐにぴんときた。おせんは彼女の名を知らなかったが、住んでいる場所といい、三味線の師匠といい、飛び込みの客が、あの女狐だということに察した。念の為に容姿や年令を聞いてみた。何もかもびつたり一致する。

「亭主と変なことしてる女の髪を結うなんてとんでもない。」

おせんは物憂いに断った。だが、もう引き受けてしまったのだとおこうは手を摺り合わせて懇願してきた。おこうとは、相生町でつき屋を営むおかみで、十三年前に亭主が病死すると、息子を抱え、女手一つで商いを切り盛りしてきた遣り手である。歳は三十後半といったところか、なかなかの美人だが、持ち前の気の強さが災いして、ここ何年も男日照りだと、恥ずかしいことを平気で言うような男勝りな女だ。

おこうには随分と可愛がって貰ってきた。新規の客もたくさん紹介してくれた。もう、承諾してしまったという仕事を、無下に断る訳にはいかなかったし、事情も事情だった。その鶴という女は、ふだん自分で髪を結うらしいのだが、先日から肩の調子がおかしく、昨日、今日と上手く上げ下げができないらしい。「あんた引つ張りだからさ、忙しいとは思っけどさ、息子の手習いのお師匠さんなんだよ。頼まれてくれないかね、明日、一日だけでいいからさ」と頭を下げられては、仕様がな。渋々ながら、受けてしまった。

やはり間違이었다。

道具箱をみぞおちの前で抱え、思い煩っていたら格子戸が開いた。

「あら、髪結いさん？」

お鶴が突然、顔を突き出したので驚いた。その拍子に道具箱を危うく落としそうになった。空いてる方の手で、黒半襟を掛けた衿をささっと直していると、お鶴の立つ方から、強い沈香が漂ってきた。長吉の胸から香ったのと同じ匂いである。

「突然なことでごめんなさいね」

「はい」

うつむき加減で眼だけを上げた。近くで見ると、お鶴の肌は、絹のようにするつと光っていた。

「ふれたらきつとやわらかいんだろう。」

おせんは心で溜息をつくと、つき屋のおかみさんから紹介を受けたおせんですと、頭を下げた。

「おせんさん、あたしは鶴よ」

お鶴はぺろつと舌を出し、招き猫のような手招きでおせんを家中へ誘った。大年増なのに、することが娘のようできて、またそんな仕草にふしぎと違和感を感じなかった。見るからに高級そうな黒紗の小袖が、妙な色気を出していた。おせんは髪を撫でつけた。

「紅くらいひいてくれば良かった。似合ってたのに。」

お鶴の家は独立した二階造で、一階は二間に分かれており、土間を入ってすぐの間が、稽古場として使われているのだろう。三味線や、ふ譜面台が置かれている。眼にも鮮やかな小紋が掛けられた衣桁の前で、香が焚きしめられていた。他に人の気配はしなかった。

「なにか珍しいものでもありましたか？」

「あついいえ……」

「気に入った物でもあれば、三味線以外はなんでも持って帰って下さいな、うちは物が多くて仕様がなない。貰いものばかりだけだね」

「とつとんでもありません」

おせんは道具箱を下に置くと、両手で煙りでも払うように手を振った。物欲しそうに見えたのだろうかと首を竦め、恥ずかしさに頬を染めた。

お鶴はホホと笑い、襖の開け放った居間へおせんを通した。おせんは、つま先だけを見るようにして歩き、もう室内を見渡さないように努めた。物欲しそうに見られることと、長吉の足跡を眼にするのはいやだと思ったからなのだが、すぐにその考えを打ち消した。

おこうから、お鶴の檀那の話しを聞いている。お鶴は、おせんの予想通り困い者だった。旦那は柳原町にある大野屋という煙管屋で、店舗は小さいが、上級武士や商家の主、遊郭などに多く顧客を持ち、繁盛している店だ。大野屋に困われている家に、長吉の私物などある訳がないのだ。おせんはほっと胸を撫で下ろす思いで安心すると、鏡台の前に座るお鶴の後ろに膝を折った。

「無理言つて頼んでしまつて。運が悪いことに、手伝いの娘が帰郷していてね、何をするにも、腕が上がらなくて困っているのよ……」

お鶴は、その艶やかな印象の顔には似合わないしゃがれた声で話した。後ろから見ても、首の細さと、しなやかな撫で肩が女らしかった。躰だけは丈夫で骨太のおせんとは対照的であつた。

「おせんさん、聞いている？」

お鶴が鏡越しに聞いた。おせんは、はっと我に返りうなずいた。たすきの端を口に加えた顔を上げ、鏡に映るお鶴を見た。だがすぐに視線を落とす。並んでみると、器量の差は歴然だった。いじけたように下を向いて、たすきを掛けると、道具箱を広げた。心臓がばくばくと音を立てているのが分かる。お鶴は、薄い唇が、整った唇をしていた。あらぬ想像が、おせんの胸を掻き乱した。

「髪も結えないみすばらしい恰好じゃ稽古もつけれないでしょう。」

昨日は悪いけど、お弟子さんらには帰つてもらつたのよ。でも、ほら、そのあと急の来客があつてね、鬢びんが乱れちゃつて、分かるでしょ……」

「そあ……」

「こつこつ話しは苦手かしら、ごめんなさいね」

と、お鶴は振り返り、また舌を出した。お鶴が急に動いたことで手元が狂い、おせんは櫛を落としてしまった。お鶴が何を伝えよう

としているのかは、おせんも小娘ではないので分かる。お鶴の鬢を乱した相手が、大野屋の檀那でないと勘ぐり、おせんは動揺した。

昨日、長吉は昼前に家を出た。戻ったのは夕暮れ時だが、湯へ行ってきたのだと、やさしい目をして笑っていた。脱いだ縞の単衣から、シャムの香が匂っていた。

「そう乱れてませんよ」

こう言うのが精一杯だった。ふだん接客のときの活発な物言いはできず、暗く沈んだ声になっているのが自分でもわかったが、どうすることも出来なかった。

お鶴の元結いを鋏で切りながら、刃先をお鶴の細い首に突き刺す想像をした。血が噴き出し、お鶴の美貌が醜く歪んでいく妄想は心地良かった。唇を内側に隠し、心の中で小梅の名を何度も称えて冷静を保った。おせんは膝立ちから腰を落とし、悋気に殺気立つ自分の姿が鏡に映らないようにした。

「おせんさん、ご亭主は江戸の人？」

「えっええ」

いきなり長吉の話題になるとは思わなかった。指先が震えるので見えないように何度も結んだり、開いたりを繰り返しながら髪の毛を梳いた。

「何をなさってる方？」

「職人ですの……大工です」

まさか以前は唐木職人で、今は髪結いの亭主を気取り、だからだと日を過ごしていますとは言えない。気が付いたらおすえの亭主の職業を言っていた。へえ、大工ねえと、お鶴の肩が笑った。

「お子さんは？」

「一人」

「女の子、それとも男の子、ちょっと待って当ててみよう。女の子でしょう」

お鶴は、指先を鏡に投げて言った。良く動く人だと、おせんは、小さな溜息をついた。

「ええ、あたり……」

「当たった、当たった！」

と、お鶴は手を叩いて喜んだ。腰を浮かせて微かに飛んだので、おせんは手の動きを、しばし止めなければならなかった。膝の上で櫛を持った手を揃えて、お鶴が鎮まるのを待った。

「名は、なんていうの？」

「小梅といいます」

間をおかずに答えてしまったことを、おせんはすぐに後悔した。決して珍しい名ではないが、お鶴に、自分の亭主が長吉だということとを悟られやしないかと不安に思った。

「小梅ちゃん」

お鶴が振り返ったので、おせんの手から梳き櫛がぼろりと落ちた。これで二度目である。

「かわいい名ね、名付けたのはご亭主？」

「……えっ、ええ」

おせんは慌てて櫛を拾い、お鶴の髪を丁寧に梳きだした。小梅と
いうのは、長吉の死んだ祖母の名だと聞いている。長吉はばあちゃん子で三文安いと、義母はいつも笑いながら話してくれる。長吉は、
義母が十五の年に産んだ子らしく、十近くも年上の義父と並ぶと、
義母は娘にしか見えないほど若々しかった。

「いいご亭主なんでしょうね？」

「そうでしょうか……」

振り向いたとき、ちらと見たお鶴の目が頭に残っていた。切れ長
で色つばいが、どこか幼いような輝きがあつた。完敗だと思った。
器量では、このお鶴の方が数段、上をいつていた。

おせんはそうは思わないが、世間で長吉は、男ぶりのいいと言わ
れる。その長吉と、美貌のお鶴は良く似合う。これまでだって、長
吉の浮気相手はみんな美人だった。自分のような十人並みの女と、
長吉が所帯を持つ気になったこと事態が奇怪な出来事なのかも知れ
ない。

おせんはまるで、風のない日に、全速力で走って、どうにかこうにか飛ばした凧が、急降下していくように氣力を失っていた。

「いくつ?」

「三つです」

「あら、いやだ。お子さんじゃなくておせんさんよ」

お鶴は鼻で笑った。

「今までの流れだと、娘のことだと思っじゃないのさ。」

心でむっと舌打ちしながら、おせんは、二十五になりますと答え
た。

「へーっ二十五、若くていいわね。あたしはもう三十の大年増よホ
ホホ……ッ」

お鶴は、声をあげて愉快そうに笑った。口では自分を大年増と蔑
みながらも、言葉尻から漏れる高慢さを感じた。人様の亭主である、
大野屋や、長吉から愛されているという実感からくる自信なのか?
お鶴は、女の目からも輝いていた。おせんの中に、嫉妬と悔しさが
渦巻いた。

ふいにその時、もしかしたら、お鶴は、自分を長吉の女房だと知
っていて、わざわざ指名したのではないかと疑念を抱いた。だと
したら赦せる話ではない。しかし、どうやって、おこうとおせん、
長吉が結びついたのかわからない。

「どのように結び上げますか?」とおせんは聞いた。そして、お鶴
の心理を覗き見ようと、少々、試すような言を言ってみた。

「うちの亭主は、丸まげが好きなんですけどね、ほら、あたしのよ
うな」

おせんは大胆にも、比較的大きな鬘の自分の髪を鏡に映し、お鶴
に見せつけた。おせんの年令ともなると、小さな鬘を結うのが常
だが、長吉は、嫁いだばかりの娘のような、大きな鬘を好んだ。

「あら、そうご亭主は、大きな丸まげが好きなの……」

お鶴の顔に初めて嫉妬の色が出た。笑顔が引きつり、唇の端が小
さく痙攣した。おせんはこの時、お鶴が、自分を長吉の女房と知っ

て指名したのだと確信した。お鶴の表情や態度からは、先程までの自信が消え、白粉の下に隠していた無数の皺が、目尻や額に浮き上がった醜い顔をしている。いい気になったおせんは更にお鶴を追い詰めた。

「お鶴さんでしたら、银杏返しにでもしときますかね、ご亭主はいらっしゃらないようですし、年令的にもその方が、ねっ?」

「そっそうね」

三十すぎの女の結う髪型を言うと、お鶴の美貌は、怒りとも、嫉妬とも取れない険しい顔に変貌した。それからしばらく二人は口を噤んだ。陰湿な空気が、異様な緊張を醸し出している中、お鶴が口を開いた。

「おせんさん、ちょっと頼まれてくれない?」

「なんでしよう?」

「腕が痛くてね、二階への梯子を上げるのが、おつくうなんだけど、良かったら、二階に行き(こ)があるから、その中から、雪駄(せんだ)を持って下りてきて欲しいのよ、いい人を買っておいた物だね。昨日、うちに来てくれた時にあげ忘れたからさ、今夜、両国広小路で会う約束をしているんだけど、その時に渡したいのよ。まあ別に、その後、うちに来てくれると思うからね。それまで持っけていてもいいんだけど」

「よござんすよ」

おせんは返事と同時に立ち上がり、台所脇にある二階への梯子をばたばたと駆け上がった。いい人というのは、もしかしたら長吉のことかと思った。だとしたら、雪駄欲しさ(ん)長吉をこの家へ寄せたくない。それにお客様であるお鶴に対し、意地悪なことばかり言ってしまったという悔恨があったので、おせんは二つ返事でお鶴の指図に従ったのだ。

「あっ」

二階に顔を突き出したとき、おせんの視界にはまず、敷かれたままの夜具が飛び込んできた。すぐに目を伏せたが、人が出て行った形を留めた?巻と、枕がふたつ。使用して、ぐしゃぐしゃと、握り

潰した無数の懐紙が散乱している様子がしつかりと眼の裏に焼きついてしまった。

「これを見せたかったんだ、あの人は。あたしを、あの人の女房だと、端から知っていて呼んだんだから。」

疑念が確証へと変わると、悔しさで涙が溢れた。

「ここでもたもたすると負けだ。」

おせんは袂を上げて手荒に顔を拭き、畳に這い上がった。お鶴の言った行李はすぐ目の前にあった。膝でいざなうて行李の蓋を開け、雪駄を取り出した。支奈染めが粹な雪駄で、いかにも長吉好みという感じがした。

「うち人にあげるんだね。」

大野屋の檀那は六十近いはずだった。太って狸みたいな爺だ。そんな年寄りに、この雪駄が合うわけがない。下に降りる前に、笑顔を作る練習を試みたが、どうやっても卑屈に歪んでいるように思えてならなかった。

「やはりつぶし島田にしておくね」と、殆ど結び終わってから、お鶴は髪型の変更を訴えた。そのため、予定よりも余計に時間がかかってしまい。おせんがすずめ長屋へ戻ったのは、すでにお天道様が天辺に登ったころだった。裏店の隣りが回向院ということもあり、蝉の音が、人の会話を遮るほどうるさく響いていた。

「随分と遅かったじゃねえか」

小梅と並んで昼寝をしていた長吉が、顔だけあげて、ふて腐れた声を出した。蚊遣りの煙が、眼に染みるほど、もくもくと渦を巻いていた。

「うん、ごめんね。お昼食べるかい」

殆ど駆けるようにして戻ってきたので、おせんの久留米餅は、雨に打たれたように汗でべっとり濡れていた。衣が肌に張り付いて、気持ちが悪いほどである。長吉は、唇の端で不服そうにせせら笑っただけで、何も答えず天上を向いた。

「時間がかかった分、お足をたくさん貰ったからさ、途中で鯨を買ってきたんだ」

おせんは、ほれ、水菓子もあるよと、片手に鯨の折詰、片手に箆に乗せたスイカを持った手を、顔の位置まで上げて微笑んだ。

「おお、いいね、いいね。箆はどうしたんだい？」

「切ったすいかをそのまま持ってこれないだろう。店主に貸して貰ったんだ。後で返しに行かなくちゃ」

「店主って宗治か？」

長吉が上擦った声を出した。

「そつだよ……」

長吉は起き上がり、妙に張り切った声を出した。宗治は夏の間だけ、両国広小路で水菓子の屋台を出している。お鶴の雪駄が、おせんの脳裡にぴんと浮かんだ。今夜、長吉は、宗治に箆を返すことを口実に、お鶴に会いに出掛ける気だと、おせんは睨んだ。

「だったら最初から宗治って言えばよ、何だよわざわざ店主って……そうか宗治の店か、だったら仕方ねえ、俺があとで箆を返しに行つてきてやるよ」

「……うんお願いね」おせんはうなずくと、長吉に背を向け、半分のスイカを三等分に切りだした。心なしか、包丁を握る手に力が入るが、おせんは努めて冷静を装った。しかしどうしても肩が怒る。

「他に用事でもあるのかい？随分と嬉しそうじゃないか、お前さん」

おせんは背を向けたままで言った。低く、胃に響くような、怖い声になつてしまった。

「いや、ねえよ。だけどよ、宗治とも暫く会ってなかったからさ……」

「そうだったかい。宗治さんとは湯屋の二階で、いつも二人で女湯を覗いているとばかり思っていたけどね、お前さんもそう言ってたし、この間だつて、門前町と一緒に飲みに行ったんじゃないか。おせんは、それともあたしの聞き違いかしら」

おせんは、なるべく感情を表に出さないようにして言ったつもり

だったが、振り返ると、長吉が青い顔をしていた。これ以上、追い込むことはやめといた。もし素直に認められたらどうしようかと怯えたからだ。おせん強張る頬を膨らませ、むりやり笑顔を作った。

「宗治さん、いい人いないのかね？」

「ああ、女か？」長吉の声がほつとしている。

「なかなかの男前なのね」

まな板の上で、きれいに三つに切られたスイカが、そのまま長吉の前に出された。折詰めにされた鯨の存在は、忘れてしまっていた。「あいつは昔からお前のことが好きだかならな」

「そうかしら」

「そうだよ」

胡座をかき、眼を半分だけ開けた長吉が、早速、スイカに手を伸ばした。

「あらあら、それは大変ね」

「なにが大変なんだよ、おい、鯨は？」

「あつ、お前さんお願い。小梅、汗だくじゃないの」

おせんは寝ている小梅の汗を手拭いで拭いてやると、「小梅、スイカだよ」と起こし、小袖を脱がしてやった。暑いので、湯文字一枚だけの恰好にすると、背中と胸に、一カ所づつ、蚊に刺された跡があった。「さあさあ、宗治おじちゃんのスイカだよ、お食べ」スイカを取ってやると、汗で濡れた髪を、頭天边で括った。小梅はまだ、ぼーっとしかめっ面でスイカを睨んでいる。おせんは小梅の背中と首を丹念に拭いてから、小梅の背に、団扇で風を送った。

「おいおい小梅だけかよ。亭主も大切にしたいもんだね」

長吉は妬ましい顔で言ったが、すぐに思い出したように膝を打つと台所へ立って、竈かまどの上に、無造作に置かれた鯨の折詰めを持って来た。

「やさしい女房が欲しいな」

「お前さんには使える手が二つあるでしょう。小梅は両手でなくちゃ、スイカを持ってないんだよ」

「ちえつ、女は年月が経つところも変わるもんかね。昔はかわいいかったのによ」

長吉は子供のように口を尖らすと、スイカの種をおせんに吹き飛ばした。おせんは当然、いやな顔をしたが、小梅はけたけたと幼児らしい笑い声を立て、父親を真似た。しかし思うようには飛ばせず、ぶつと、よだれと共に畳に落とした。

「もう汚いね、小梅、やめないと叩くよ」

おせんが手を上げて叩くふりをしたので、小梅が、亀の子のように首をひっこめた。

「おつかあ、めつ。たたかないでちょうだいね」

母親似の、黒目の大きな、それでいて少し埴輪はにわを思わせる眼を、ぱちくりさせて小梅が怒った。

「大袈裟だね小梅は、それじゃ、まるでおつかあが、しょっちゅうあんたを叩いているように見えるじゃないか」

「坊主ならともかくよ、娘は折檻すんじゃないぞ」

手拭いを、おせんの頭から剥ぎ取った長吉は、荒っぽく口を拭くと、またごろり横になった。

「だから、折檻なんてしてませんよ。変なこと言わないで欲しいね。ねえ小梅」

意味も分からず小梅は、ねえとうなずいた。どんなに遊びに夢中になっても、ねえ小梅と、同調を求めると、小梅は必ず、ねえと、愉しそうに返してくれる。意味を理解していなくとも、軽やかな小梅のねえを聞くだけで、時に鬱屈したおせんの気分も晴れるのだ。

「ところでよ、おかめ」

長吉は寝転んだ恰好で言った。そして、桃色の湯文字を巻いた尻の下からちょこんと覗いている、小梅の足の親指の裏をぺろんと舐めた。小梅がひゃつと言って長吉に振り向いた。顔から胸にかけて、スイカの汁で汚れていた。

「なんだいお前さん」

おせんは、小梅の胸に張り付いた、スイカの種を取ってやって、それをついつい飯粒と間違えて口に運んでしまい、あらいやだと言つて、ぺっと掌に吐き出した。

「その気前のいい客って誰なんだよ、まさかすけべなヒト爺じゃねえだろうな」

長吉は肘枕で片膝を上げ、小袖の合わせ目から丸出しになった脚をぼりぼりと搔いている。おせんは最初、答えなかった。無言で長吉の食べ散らかした鮎を片付けた。

「なあ、どうなんだよおかめ」

「さあね」

そつけない返事をしたが、内心、慌てていた。まさか客のことを聞かれると思つていなかったのだ。スイカの皮の乗ったまな板を台所に運びながら、どんな人物をでっちあげようかと必死で考えた。

「さあね、だと」

長吉が、半身を起こしてこちらを凝視しているのが気配で分かった。生ゴミを分け、水桶にまな板を浸すと、前垂れで手を拭きながら、おせんは嘘を吟味した。

「おい、こつち向け」

「もつっ」

両手で頬を挟み、笑顔を作ってから、振り返った。「あれっ」驚いたことに、長吉はおせんの背後に突っ立ってた。片手を鴨居にあて、少し腰をかがめておせんを覗き込んだ。

「なに笑つてんだよ、薄気味悪いな。おい、客は誰で、どこの町に住んでるのか言いな」

「この人、自分が浮気者だから、あたしを心配してた。馬鹿だよ、ほんと。」

いつものことだった。疑わしそくに女房を眺める長吉を、おせんは睨むように見据えた。

「言えねえのか、えっ?」

「ばか」

「ばか？」

長吉は、首筋に止まった蚊をぱしりとやって掌を眺めて、打ち損じたとつぶやくと、刺された首を掻いた。すると諦めたように背中を向け、さつさと茶の間に入っていった。

「まあ、おかめが浮気するとは思えねえけどよ。ぶすだしな。けどよお前、馴染みだといって、客に尻を触らせんのもだめだぞ、そういう小さな切欠から、どんどん深みにはまっていくんだからな。誘惑されそうになったら、俺と小梅のことを思い出せ」

「何を偉そうに減らず口。」

いつもなら口に出し、小さな小競り合いなるところだが、今日はお鶴のことがある。とんでもない喧嘩に発展しそうな気がしたので、言葉を吞んで、おせんは未だ喋り続ける長吉を見ていた。

「男というのはよう、どうしようもない生き物だから仕方がねえが、女はだめだ。特に女房の浮気は笑えねえ。お前も覚えてるだろう、二間隣りに住んでいた錆職かみかみの彦六と、その女房、なんて言ったかな？」

「お北さん？」

「そうそうお北。小股の切れ上がったいい女だったなあ」

長吉は、おせんがげんなりするほどの間抜け面で虚空を見上げた。

絹を引き裂くような女の悲鳴を、回向院が突く除夜の鐘の合間に聞いたのは、二年前の大晦日だった。

底冷えのする寒い夜で、酒でも飲まなきや年が越せねえと、いい加減なことを言いながら、長吉は手酌で飲んでいた。長火鉢の脇には、おせんが朝からこさえた、正月の祝い肴が重箱を満たしている。「正月だ、おかめ、お前も飲みな」

酒がだいぶ回ったのか、長吉は、真綿の詰まった半纏はんてんの上から前垂れを巻くという、着ぶくれしたおせんの肩を抱いて引き寄せた。あたしはいいよと言うおせんの唇に、むりやり盃をつけ、おせんが飲むのに合わせて仰向けた。

「いい飲みつぷりじゃなえか、おかめ」

「あたしなんか酔わしたつて愉しくないでしょう」

前垂れの端で口を拭ったおせんは、長吉の股をぴしゃりと打ち、火鉢の灰を掻き馴らした。

「いや、酔った女房もなかなか色気があるのよ。おかめ、何か食べるか？」

水を飲もうと膝を浮かしたおせんの肩を抱き込んだ長吉は、たたき牛蒡ごぼうを取っておせんの口に運んだ。その時である、大きな叫び声が、新年を迎える裏店に響き渡った。

「なんでえ、ありゃ？」

長吉は、一瞬の間も置かずに、箸を投げ出して外へ飛び出して行った。

「お前さん、ちょっと待つてよ」

身体を突き放されたおせんは、眠っている小梅に、隙間ないように布団を掛けなおすと、長吉の後を追って外へでた。叫び声は二軒隣りから発せられたようだった。軒先には、既に人集りが出来ていた。隣りのおすえが、大きな躰をつま先立ちで支えて、隣家の様子を窺っていた。おせんは、おすえの体重を支える鼻緒が気になったが、いまはそんなことを言ってる場合じゃない。頭をぶるぶる振って「何があつたの？」

「ああおせんちゃん、なんだか分からないんだけどね、彦六さんが包丁を振り回しているらしいんだよ」

「彦六さんが包丁を……うちの人が……」

「おせんちゃん危ないよ」

袂を掴むおすえの手を振り払い、おせんは人垣を分けていた。彦六が包丁を持つてると聞いて、駆けだして行った長吉のことが心配になった。彦六は無口で大人しい男だが、包丁と、女の叫び声の組み合わせは尋常じゃない。

長吉は酒飲みの昼行灯だ。しかし正義感だけは強いし、腕っ節には自信があるらしく、弱い立場の人間を見掛けると、見て見ぬふり

のできない性分だ。理不尽な振る舞いをする相手と喧嘩をし、自身番にしょっぱかれたことも二度、三度じゃあきかない。長吉はきつと家の中に踏み込み、騒動に巻き込まれているという確信があった。――お前さん。

心で叫びながら、長吉を探した。やつとのことで、灯りが伸びた土間に足を踏み入れると、茶の間の端に、首を垂れて蹲る彦六と、奪い取ったのだろう包丁を手に、茫然と彦六を見下ろす長吉の姿があった。

包丁には、血がべつとりとついており、長吉の足元や、彦六の座る畳の廻り、障子の所々に血の跡が見えた。首を伸ばして茶の間を覗くと、夜具にも血が染み込んでいた。だが肝心の彦六の女房の姿は見当たらない。長吉と同じ様に駆け込んで来た数名の男衆の以外、他に女の気配は感じなかった。

「ん……」

おせんはふいに顔を歪め、袂を持って鼻を覆った。室内は、おせんがこれまで嗅いだことのない異様に濃い血の臭いで充満していた。

「お前さん」

呼び掛けると、長吉ははっと顔を上げておせんを見た。険しく鋭い目は、なぜ入って来たと言っていた。その心情は、すぐに言葉や行動で表された。

「女がしゃしゃり出て来るんじゃないやねえ、ひっこんでろっ」

凄まじい剣幕で怒鳴ると、ずかずかと近づき、おせんの帯を掴んで人混みに押し倒した。おせんはそのとき変な転び方をして、足首を捻挫したのをいまでも恨みに思っている。

「あのとき、あんたに押されて足を痛くしちゃったんだから」

おせんは恨み節で言つと、いまはちつとも痛くない足首をさすつて長吉を睨んだ。

「お前はしつこい女だね」

そう言つと長吉は、物干し場に洗濯物を取り込みに行くというお

せんの後を、母恋しと追いかけて回す幼子のようについて歩いた。小梅は近所の子たちと遊びに出掛けた。小梅の方が、長吉よりも随分と、おせん離れをしているようだ。

途中、井戸端で、おすえや、裏店の女房衆に会つと、長吉は片手を上げて、よつと気安く挨拶をした。そんなところが意外と女房たちにはうけが良く、二、三たわいのない掛け合いをしては、大声で笑つたりしていた。

「結局、お北さんは命を落とさなかつたんだよね、不幸中の幸いだつたよね」

「不幸中の幸いなもんか、最愛の女房に浮気されてよ、まあ、不貞を働いたのは女房の方だから、お上の寛大なご処置で彦六は不問となつたが、結局、江戸には住めねえと、播州の田舎に引き揚げてしまつたじゃねえか。だからつて向こうに親兄弟がいるわけじゃないんだよ。彦六は身寄りのない男だつたんだ。いい職人だつたのに勿体ねえ……奴はあんどきまだ、俺と同じ二十七だぜ」

物悲しく言う長吉の横顔を、おせんは洗濯物を胸に抱え込んだ恰好で見つめた。確かに長吉の言う通り、彦六は女房のお北を宝物のように可愛がつていた。決して醜男ではない銚職の彦六が、どの馬の骨かわからないお北なんか骨抜きになつちまつて情けないと、口の悪い人々に陰口を叩かれても彦六は、一向に気にした素振りを見せずに、真冬なんかは、お北に水仕事をさせないほど慈しんだのだ。血の上で頂垂れた、彦六の姿が思い起こされ、おせんの胸は、寂寥でいっぱいになつた。

陽射しは傾き始めていたが、じりじりと灼きつける太陽の輝きは健在で、細面の長吉の額際や、首筋は玉のような汗を吹きだしていた。

「お前さん納得がいかないだろう。お北ちゃんが江戸十里追放で済んだことが」

「したつてよ、ふつと不義密通は死罪じゃないのか？」

「そういうけど、お北ちゃんはまだ十七だつたんだよ。浮気はさ、

気の迷いつてこともあるんじゃないかな。きれいな娘だったしさ、……そういうところを考慮されたんだよ、きつと」

「だったら相手の男はどうなんだ、お咎めなしはおかしいだろう」

「相手は、お北ちゃんとは一緒に酒を飲んだだけだと言い張るんだもん、お北ちゃんも口を割らないし、仕方ないさ、不倫の現場を見つけない限りどうしようもないだろう。お武家じゃあるまいしね」

「なんでそうお北なんて娘を庇うんだよ。お前。言つとくけどな、おせん、浮気なんかしやがったらぶっ殺すぞ」

「はいはい、そうでしたね。でもね、いつも浮気をしてんのは、あたしじゃなくて、あんただろう」

強めに言い切つて、家に戻るとするおせんの後を、長吉は、せつせと追いながら話し続けた。井戸端を通るとき、また女房衆に会つた。その中の一人で、おとせという二十代後半の女が、

「金魚の糞みたいに女房について廻るんだつたらさ、他の女と悪さするんじゃないよ」

と、からかうように声を張り上げたので、他の女房や、家の軒先で寛ぐ老人らから、どつと笑いが起きた。長吉は不服そうに唇を尖らせながら辺りを見渡した。

「なんだいなんだい、おかちめんこの女房連中や、死に損ないのばあらが寄つて集つて人をバカにしやがって。よう、おとせ」

長吉は、おとせの丸い肩に手を乗せた。最近、肥えすぎじゃねえかと肩を揉んでから

「亭主にかまつて貰えねえときは、いつでも俺の家の戸を叩きな、自慰じいの仕方を教えてやるからよ」

おとせを挑発した。

「あーら、長吉さん」

おとせは、洗っていた大根を片手にぶらさげて立ちあがり、

「おあいにくだけどね、うちの亭主は、毎晩しつこいくらいなんだよ、自慰なんて必用ないね」

「へっ、どうだか」

「それとも長吉さん、あんたが慰めてくれるとでも言うのかい。それならあたしや構わないよ、いい男だしさ、前から好みだったんだよ、ハハハハハハ」

おとせが大笑いしながら、丸顔に、線をひいたような細い眼を、長吉に近づけてきた。長吉が思わず後ずさる姿に、みんな笑いを堪えた顔で、おとせ、長吉、おせんを順々に見ている。おせんは、どちらかというと背丈もあり細身だが、胸や腰には色っぽい丸みのある女である。おとせよりは器量も良かった。大量の洗濯物を抱えたままの恰好で突っ立って、成り行きを見守っている。

「いいや、悪いがおとせ、うちはうちの山の神で間に合ってる。おとせはな、この大根で我慢しなよ」

長吉は、おとせがぶら下げている大根を取り上げて、おとせの胸にぽんと押し付けた。(この場合の山の神とは、貧乏所帯に嫁いできてくれる女を有り難い存在と崇めた言葉であり、当時は裏長屋の女房をそう呼んだ)

「もう、いやだよ長吉さんたら、こんなの大きすぎるに決まってるじゃないか」

「ほいよ、だったら干して沢庵にしたらどうだい？おめえんとこの亭主の萎びたのよりは、ずっとましだと思っぜ」

まだ懲りずに喋り続ける二人を尻目に、おせんは、ばかばかしいとつぶやき、家の方へ向かった。おせんの隣りはおすえの家、その反対側は稲荷祠になっており、祠と道を挟んだ斜向かいが厠だ。

祠の辺りから子供達の歌う手鞠歌が聞こえてきた。小梅もいるのかしらと、家の角から首だけ覗かせると、大きなお姉ちゃんに交じって小梅が遊んでいた。しゃがんで、地面に絵を書いている。

「小梅」

他の子の邪魔にならない声で呼び掛けた。小梅はいつものように顔だけ向けて母親を見た。

「かわいい」

思わず声に出して言っていた。小梅が、丸い尻を向けた恰好で首

を捻る姿を見るたび、おせんは、ミツバチがしゃんがんで振り向いたらこんな感じかしらと想像する。それほど愛しい仕草であった。

夕餉の最中から、うとうととしていた小梅を早めに寝かせ付けたおせんは、夫婦の夜具を敷き述べていた。時折、ちらちらと眼をあげて、肘枕について爪を噛む長吉を見ている。

「今日は出掛けなかった。」

両国橋のたもと、広小路まで、宗治に借りた箆を届けに行った長吉は、寄り道もせず、湯屋にも行かず、ものの小半時足らずで戻ってきた。お鶴から受け取ると思われた雪駄も手にしていなかった。

「お前さん、昼間の話しだけどさ」

「彦六のことか？」

気怠そうに答える長吉の前に膝を揃えたおせんは、真面目な話しなんだけど、と、神妙な声を出した。長吉が身構えたのが可笑しかった。

「不義密通は死罪だと言ったでしょう。だったら、男の人も同じだと思つのよ」

「なんのことだよ」

長吉は鼻で笑ったが、おせんの間を見ようとしない。堅くした躰をおせんとは反対の方に向け、また爪を噛みはじめた。

「岡場所の遊女や、酌婦となら、……ほんとはいやだけど目を瞑るよ。でもね、他はやめとくれな」

「下らないことを言ってるんじゃないよお前は。なんの話しか、皆目見当がつかねえや」

長吉は言つと、躰を捻っておせんの間を小突き、立ちあがった。

「どこに行くの？」

「湯だよ」

「えっ！」

急いで長吉を追って下に下りて行くと、土間に立った長吉は、ぬか袋と手拭いを両手に掲げていた。

「行ってくるよ」

「待って、ならあたしも行く」

「あの女狐のところに行く気だ。行かせてなるものかと、おせんは長吉の袂を握り込んだ。」

「お前さん……」

「小梅はどうすんだよ」

長吉は苦笑いをした。ぬか袋と手拭いを片手に持ち直し、泣き顔になっているおせんの背に手を廻して抱き寄せた。さっき見た時、小梅は、すやすやと穏やかな寝息を立てて眠っていた。口が微かに開いているのは、疲れている証拠だろう。しかし、置いていくわけにはいかなかった。もし何かの拍子に眼を覚ましたりでもしたら、小梅は、まるで身を切り裂かれたような声で泣き出す。以前にもそういうことがあった。小梅が寝ているからと、親だけで湯屋に行った。すると小梅が起き出し、二階の寝間で泣き出した。万が一小梅が落ちないようにと梯子を外し、天上板を詰め込んでいたので二階から落ちるといふ危険性はなかったが、泣き声が聞こえたら行ってくれと、おすえに声を掛けておいた。小梅の泣き声で隣家に駆け付けたおすえが、いつものように抱いてゆすり、なかなか泣き止まないのので下に降りてあやしたが、いくら落ち着けようとしても、躰を反らせて嫌がり、戸口に手を伸ばして、おっかあ、おっかあと、まるで憑き物でもついた様だったと汗を掻いていた。たった半年前のことである。それ以来、寝ている小梅を置いて出掛けることは避けてきた。

「小梅が寝てるじゃねえか」

「そつね……」

長吉の袂から手を離し、すんと上がり框に膝を折ると、おせんはうつむいた。抜いた衿から、清潔な襦袢が見えるほど、首を下に垂れている。

「お前さん、湯銭は？」

「持ってるよ」

「そう……」

「じゃあ、行ってくるよ」

躊躇うような、弱々しい口調で長吉は言った。

「やだ」

「ん……？」

「お前さん、行かないで」

おせん、長吉を見上げる目に涙が膨らんだ。

「なっ何を言つてやがる、湯屋くらいで」

縋り付くような目から逃げるように、視線を逸らした長吉は斜を向き、口元を手で覆って困惑している。しばらく黙つてそうしていたが、やがて大きな溜息を吐くと、行つて来るよと、振り向きもせず、急ぎ足で出て行つてしまった。

「今夜は年増婆ばかりだな」

水菓子売りをしている青物屋の宗治が、湯屋の二階座敷の床に取り付けてある格子窓から女湯を覗いている。

「ふん、好きだねえお前も」

長吉は、菓子を口に放り込んで仰向けに寝転んだ。両掌を枕にして、天上を向いて考え込んでいる。おせんを振り切つて家を出て来たのはいいが、予定していたお鶴の家に行く気にもなれなかった。おせんの涙を見た後では、どうも気分が萎えて、立ち直れない。

何時、何処から、おせんに漏れたのか、それともただの疑いなのか、どちらにしても、お鶴との関係を断ち切る時期にきているのだと思つた。これまでの浮気の中で、お鶴はいちばん長続きした女だつた。お鶴は、道を歩けば、人が振り返るような美貌の持ち主で、性格もさっぱりしていて気持がいい。長吉は、お鶴と別れることを惜しんだ。しかしこのまま情に絆され、お鶴と別れる時期を逃せば、待っているのは地獄である。おせんは美人でないが、良く尽くしてくれているし、料理の味もいい。それになんと言つても娘が可愛い。家庭を壊す気など、さらさら無かつた。

「いい女だったんだけどな」

「えっなんて？」

「いいや」

長吉は溜息交じりの返事をした。行く所がないので湯に入り、そのまま帰るのも気が引けたので、湯屋の二階に上がったが、そこでばったり宗治に会った。いつもは商人や武士で賑わう二階も、今夜は二人以外に、将棋をさしている武士が数人、それ以外に客はいなかった。

「おおっ！」

宗治が大声を出したので、長吉に限らず、武士の面々も手を止めて、格子窓に、いやらしそうに張り付く宗治を見た。

「なんだよ」

「うわっ見ちゃった」

宗治は女のように両手で口を隠して恥じらっている。

「なんだ、なんだ、そんなにいい女か」

だらしない顔になった長吉は、四つん這いで格子窓に近づいた。お武家も気になるようで、ちらちらと格子窓の方を窺っているが、やはり体面があるらしく、腰を上げるまでには至らなかった。

「だめだめ、お前はだめ」

「なんでだよ」

躰を突っ伏して、格子窓を覆い隠す宗治を、長吉は押しやって女湯を覗いた。そしてすぐに顔を上げ、胡座を掻くと、どこまで見たと、低い声を出した。さっきまでのにやけ顔は消え、どこか険しい怒りの色を含んでいた。

「あっ……頭、顔、乳房に、尻……」

身振り手振りで身体の部位を表現する宗治の頭を思いきりひっぱいたいた長吉は、もう一度、格子から階下を見下ろした。小さな格子窓のすぐ真下には、目をこすり、寝ぼけたように立つ小梅と、その小さな躰を洗うおせんの姿があった。

「いい身体をしてるな……おせん。」

本気でそう思った。白い肌は磁器のようにつやつやと輝き、手に余るほど膨らんだ乳房は、触れるとずしりと重くて弾力がある。腰はくびれているが、少し出た下腹は、小梅を生んだ母の証だ。尻から股にかけての膨らみも、小梅を生む以前は骨っぽかった。そこにあるのはまさしく、長吉が慣れ親しんだ躰だった。

何度も欠伸を繰り返す小梅に、おせんはしきりに話しかけていた。すると長吉は思い出した。その昔、父親と喧嘩して家を飛び出した母親が、寝ている長吉を人質変わりにおぶり、夜の町に出て行った時のことである。一つ歳年上の姉は、母親に手を引かれていたが、いまの小梅のように何度も欠伸をし、目を擦り擦り、擦り着いてきた。時折、足を絡めて転びそうになるのを、母親に手を大きくひっぱり上げられて釣り下がり無事だったが、母の実家がある深川北松代町まであと、もう少しという新辻橋の辺りまで来ると、さすがに母の手を振り払い、行く手に立ち塞がり、大きく手を広げて、だっこ、だっこ飛び跳ねた。

「長吉をおぶってるんだから、ねっ、もう少しがんばろう」

そう言っつて長吉をゆすり上げた母の背の温もりと、姉をなだめる母の自責のようなものが、今のおせんと重なった。

「悪かったな」

今度は声に出してつぶやいた。

翌朝、母親を実家まで迎えに来た父親が言った言葉だ。両親の喧嘩の理由は聞いてないが、母親の放った「何よあんな尻軽女」という言葉が耳に焼きついて残っていた。当時五歳の長吉には意味が分からない、「しりがるおんな」に、このところ大変、お世話になっているような気がする。とにかく、両親の夫婦喧嘩の原因が臍おほろけ氣に見えて来たのは十歳の頃だった。

おせんが洗い場を出たのを確認した長吉は、もう一度、強く宗治の頭を張ると、脱衣所から出て来るおせんと小梅を迎えようと、ゆつくりとした足取りで梯子を下りて行った。

―親子三人、広小路で冷水でも食うか。

湯屋の暖簾を開けて外に出ると、生暖かい風が肌をじつとりと湿らせた。空を見上げると満月だった。どつりで明るいやと、長吉は微笑むと、手拭いを首にかけ、額と鼻の下の汗を拭った。

恪気

「しかしこう暑いと堪らないね、おせんちゃん」

「これからが夏の盛りよね」

おせんは、おすえに笑いかけると、石鹼のついた手を振って、甲の方で額の汗を拭った。五日振りの休日である。家のことは、今日中にできるだけしておきたいと思った。

「しっかしうるさい蝉だね」

「生きるのに必死なんですよ、あたしたちと一緒に」

さつきから文句ばかり言うおすえが可笑しくて、おせんはくすくすと笑い声を立てると、肩に力を入れて汚れ物を擦った。蝉が競うようにして鳴いていた。その中で、時折聞こえてくる蝸ひぐらしの、流れるような響きに、おせんは夏の美と、命の儚さを感じずにはいられなかった。

冷たい井戸水に両手を浸して洗い物をしていても、額際や首筋には汗がどんどん噴き出してくる。

「最近、仲が良いねあんたち夫婦」

「そう」

おせんは上目遣いにおすえを見ると、すぐに眼を伏せ、所帯を持つたばかりの娘のように、頬を赤らめた。

「女関係が一段落したんだね？」

「えっ？」

「長吉さん、また女遊びしていたんだらう。知らない女と一緒にどこをを見たわけじゃないけどさ、木戸を出て行く姿で、なんとなく分かるんだよね、浮き足立ってるっていうかさ」

「ああ……」

おせんはふーっと息を吐きながら背筋を伸ばした。おすえは勘が鋭い。これまでの長吉の浮気の殆どは、おすえに見つけて貰っていたようなものだ。

「まあ、良かったじゃないか」

「……」

「今夜は花火を見に行くんだってね、小梅がはしゃいでたよ」

「ええ、そうなんですよ、花火は毎晩のことですからね、明日にしよう、明日にしようと先延ばしにしている間に川開きが終わっちゃうことが多いでしょう。だから今年はぜひにと思ひましてね。亭主も賛成してくれましたし、小梅も喜んで、喜んで」

おすえがようやく話題を変えてくれて、お、せんは、ほっとして
いた。

「近すぎて、ついついね、行きそびれちゃうんだよね、分かるよ」

「おすえさんも行きませんか、ご亭主殿と一緒に」

「ああ、うちはいいわ、亭主とじゃあ色気もないしね、ぎゃはははははは」

おすえは笑っていたが、ふと手元を見ると、洗い終わったおせん
の家の洗濯物が搾られて、大きな芋虫みたいになって、駕籠の中
にくつも治められていた。

「いい人だな、おすえさん。」

湯屋から、すずめ長屋に戻った三人は、こざっぱりと浴衣を着こ
なして、夜の両国橋広小路に向かった。おせんと、小梅は同じ絵柄
の浴衣。長吉には、藍染めの浴衣を、昨夜ほとんど不眠で仕立てた
「相変わらずすごい賑わいだね、お前さん。小梅の手を離さないで
下さいよ」

「おう」

長吉は威勢のいい返事をする、小梅の腰を持って、ひょいと肩
に乗せた。

「あつ、落ちない、大丈夫？」

「お前は心配しすぎなんだよ、なっ小梅」

「うん」

肩車された小梅は喜んで、長吉の眼元を抱え込んだ。

「おい小梅、それじゃあ、ちゃんが無にも見えねえぞ」

「あら、本当だ」

おせんは前に回り込み、小梅の両手を長吉の顎の下にずらさせた。ついでに下駄も脱がせ、おせんがぶら下げて歩いた。空いた手は、小梅の足首を掴む長吉の腕の輪に潜らせた。

「しあわせ。」

涙が出る思いでおせんは歩いてきた。廻りを見渡すと、家族連れも多かつたが、何よりも若い男女の姿が目立った。人目も憚らず寄り添い歩く十代の若者。空に上がる流星（花火）に歓声を上げる子供達。誰もが皆、しあわせそうに見えたが、この世で、あたしほど恵まれた女はいないと、おせんは、沸き上がる歓声よりも大きな声で叫びたい気分だった。それほど嬉しかった。長吉の浮気の苦悩など、すっかり消えていた。

あの夜、湯屋の外で汗を拭きながら待っていてくれた長吉が眼に入った時、おせんは思わず長吉の胸に飛び込んで泣いてしまった。お鶴のところへ行ってしまったとばかり思っていたから、尚更、会えたことに感動した。

「あの夜から一度もお鶴の元へは行ってない様子だ。」

長吉に、お鶴のことを問いただすことはしないので、確信はなかったが、この五日間、確かな愛情を受けている実感はあった。きっと大丈夫と、おせんは長吉を信じ始めていた。

「ほら小梅、見えるか。お舟がいつぱいだろう、あれが屋根舟、あれが猪牙舟だ」

両国橋のほぼ中央で足を止めた長吉は、橋の下を行き交う舟を、一つ、一つ指さしながら、小梅に説明している。おせんは興奮する小梅の背をおさえ、自分も欄干に身を乗り出して舟を眺めた。橋の下を、何隻もの舟が行き交う様子は、子供の小梅でなくとも心を踊らせた。小梅がどんな表情をしているの見たくて、おせんは顔を上げた。

「小梅、よかつたね」

「うん、おふね」

「そうそうお舟……。あれ、お前さんどうしたんだい？」

小梅は片手を振り上げてきゃっきゃと叫んでいたが、長吉は蒼白い顔になっている。空に舞い上がった流星の火花が開いても、長吉の横顔は険しいままで、どこか一点を見下ろしていた。例えようもない不安が、おせんを覆った。怖る怖る、長吉の視線の先を辿ってみた。

「行くよっ」

きつい口調で言ったので、長吉は我に返ったように振り返っておせんを見たが、視界の中に、もはやおせんは映されていないように感じた。長吉の瞼の中にあるのは、屋形船で、大野屋の檀那と戯れるお鶴の姿である。

「おい、待たねえか」

「やだね、ぼーっとしちゃって」

早歩きで先立つおせんの後ろを、人の群れに押されながら長吉は追い掛けてきた。

「なんだってんだよ」

「うるさい。小梅、ちゃんと掴まってなね」

おせんの腕の中には、剥ぎ取るようにして奪った小梅がいる。

「どうしようもないね、あいつは。」

涙が自然に溢れ出た。遊びならまだ我慢はできたが、さっき見た長吉の顔は、間違いなく嫉妬の炎に燃えていた。その嫉妬の先には、あの女に惚れている。堪れない気持は恠気という言葉では、どうにも収まりきれなくなっていた。

「別れちまうか。」

涙を拭ったとき、腕をもぎ取られるかと思う強さで引つ張られた。

「おい、待たねえか。とことこと先に行きやがって……ん？」

苛立つ声の長吉が、腰を少し屈めておせんの顔を見つめた。おせんは凄いやつな眼で長吉を睨んだ。人混みで立ち止まったので、行

き交う人に舌打ちされたり、躰をぶつけられたりしたが、長吉は、きつと相手を睨むだけで、手も口も出さなかった。普段とは明らかに様子が違う。

「お前、どうした？涙が流れてるぜ……眼ん玉にゴミでも入ったのか？」

「ばかつ」

もういやだと、長吉の胸を力いっぱい押し、おせんは足早に橋を下りると、そのまま猪のように、突っ走って正面に掛けられた芝居小屋に入った。

「何やってんだろうね、あたしは。」

芝居小屋の棧敷は満杯だったので、人に揉まれながら立ち見をしていた。と言つても芝居を見ているわけではない。汗だくの小梅に、手で風を送りながらぼんやり、さつき見た光景を思い返していた。芝居は、季節外れの赤穂浪士が演じられていること以外、頭に入らなかった。そのうち小梅がぐずりだし、おせんと自分の躰を引き離すように、両手をつっぱって、暑いと泣き出した。廻りの客に文句を言われたので、仕方なく、芝居小屋を出た。

出口で長吉の姿を探したが見当たらない。背の高い長吉は、人より頭ひとつ抜き出ているので、探すのは容易の筈だった。まさか、間男が阿呆面下げて、お鶴のところに行つて、大野屋と喧嘩沙汰になつてるんじゃないかと一抹の不安も抱いたが、そうなりやなつたで仕方のないこと。自分には女髪結いという仕事がある。手に職がある限り、生活に困ることはないし、長吉という、どうしよもない食い扶持が一人減つたと思えば、この別れもそう惜しんだものじゃない気がしてきた。

「小梅、お腹すいたか？」

「うん」

元気に返事をする小梅のおかつぱの髪は、湯屋帰りのように汗で濡れていた。

「親の勝手で悪いことをした。」

小梅を愉しませるために来た祭りなのに、両親の痴話喧嘩の板挟みになり、鮎詰め芝居小屋で悶えていた小梅が不憫でならなかった。小梅を下ろし、ありったけの笑顔で言った。

「小梅、今夜は何でも好きなもの食べていいんだよ、ささどこに行こうか？」

「うーん？」

暑さで上気した頬に、小指を突きさして考える小梅の顔を見ていたら、ふとあることを思い出した。

「財布がない。」

「あーっ」

「えっ、おっかあ？」

いきなり声を上げる母親を、小梅は驚いて見上げた。

「ごめんよ、小梅、おっかあ財布持ってないんだよ」

「……かね、ない？」

小梅はおせんの両手を掴んだ。そして大きく横にゆらしたり、上下に振ったりしている。

「財布は、ちゃんに持たせたんだった。ありやりや、失敗しちゃったね」

「どうしゆる？」

小梅はかなり不安気だ。眉を寄せたしかめっ面になると、おせんの手を振り回すのをやめた。

「どうしようかね、小梅」

「おうちにかえる？かねもってくる？」

「んーっなんだか面倒だね」

おせんは両国橋の人混みに眼をやって頂垂れた。あの橋を渡って帰って、また、ここへ戻って来る体力が自分に残っているだろうかと疑問だった。しかも小梅を抱いていた腕は、今でも感覚を無くすほど痺れている。

「そっだ」

「思い付いた。」

おせんは俄に少女のような顔になると、不安顔の小梅を抱き上げた。

「宗治おじさんのところでスイカを御馳走になろうかね？」

「うんうん」

小梅は何度もうなずいた。

宗治の店のある河岸は今夜も混んでいたが、おせんの足取りは軽かった。もしかしたら、いやっ、十中八九長吉はそこにいる筈だと思つたのだ。あの時は頭がかーっとなつて長吉を振り払つて芝居小屋に駆け込んでしまつたが、よくよく考えたら、長吉のあの視線は、ただ不思議な物を見たといった類のものだつたかも知れない。それを色眼鏡で見ってしまった自分の方に責任があるのだとおせんは解釈しようとしている。というのも、この五日間の長吉といえば、常におせんに気を遣つているように思えたし、溢れんばかりとはいかなくても、情熱的な夜もすごした。秘め事を思い出してる自分が恥ずかしくて、おせんは袂を顔に押し当てて、くすくす笑つた。そんな母親を、小梅が眉をしかめて見ていた。

「やだ、小梅……」

照れていると、おせんちゃんと声を掛けられた。聞き慣れた声である。心がすーっと落ち着いた。

「あらっ」

気が付いたら、宗治の屋台の前まで来ていた。

「宗治さん」

「何、一人で笑つてるんだい」

「いやいや何でもないのでよ」

馬鹿な姿を見られたと、おせんは手をひらひら振つて、身体を左右に揺らした。宗治は他の客の相手をしながら、ちらちらとおせんを見ては、首をひねっている。

「さあ小梅、食べていいんだよ」

切り分けられたスイカの載つた台の前に小梅を下ろすと、おせん

は腰に手を当てて、あーっ疲れたと軀を大きく反らせた。

宗治には貸しがある。おせんはそう思っていた。長吉と所帯を持つてから最初の五年間というもの、宗治はほぼ毎晩、長吉とおせんの暮らすすずめ長屋に立ち寄っては、唯飯を喰らい、唯酒を飲み、唯泊まりをしていた男である。その頃はいまのような二階屋ではなく、同じすずめ長屋でも、棟割りの九尺二間の狭い方の家に住んでいた。

宗治の飲み食いが、余計に家計を火の車にした一つの原因なのだから、スイカのひとつや、ふたつ、ただで貰っても罰は当たらないと、おせんはにんまり微笑んだ。

「宗治さん、うちの人、来なかった？」

「いいや、今夜は来てないよ。おせんちゃんと一緒じゃなかったのかい？」

宗治は客に釣り銭を渡しながらそう言った。

「一緒だったんだけどね、さっきまでは……はぐれちまったんつだよ」

おせんの声は力を無くしていた。眼を懲らしたり、背伸びをしたりして周囲を見渡すが、長吉の姿はどこにも見当たらなかった。

「先に帰ったんじゃない？」

「そうかもね、そう、きつとそうね」

自分を納得させるように言うと、宗治から与えられた椅子に腰掛け、屋台の内側でちゃっかりスイカと瓜を交互に頬張っている小梅に微笑みかけた。

「水菓子代として手伝っちゃおうかねえ」

と言いながら、おせんは、待っている客に注文を聞き出した。最初は、いいよ、いいよと恐縮していた宗治も、忙しさにそうも言つてられなくなり、接客はおせんに任せ、自分はスイカや瓜を切りだした。

「おっ、随分と別品なおかみさんだね、子供もいるのかい、かわいいな」

などと冷やかす客も多く、そのたびにおせんは、

「いやだよお客さん、うちの亭主の幼馴染なんだよ、この人は」と弁解したが、宗治は否定もしなければ、肯定もせず、ここにいと嬉しそうだ。その顔を見ると、長吉がいつも言うように、宗治が自分に気があるような気がしてきた。宗治は、白皙の美男子とまではいかないが、背丈もあり、優しい顔で、女に良くもてる。長吉と並んで歩くと、若い娘に限らず、よばよばの婆さんまで眼を留めるほど目立った。

そんな宗治が、女と浮いた話がないのをおせんは気に掛けている。一時は真剣に相手を見つけてあげようと、良い頃合いの娘がいる親に、片っ端から声を掛けてみたが、娘や親が宗治を気に入っても、宗治はまるで娘に興味を示さなかった。

「ねえ、お前さん。宗治さんでもしやこれかい？」と、片手を頬に当て、品を作ってみたことがあるが、「馬鹿かお前は、宗治は岡場所に週に一度は通ってる助平な男だぜ、男が好きってことはねえだろうよ。現に俺と一緒に行った時もよ、あの娘は気にいらねえ、もそつと乳の大きなのはいねえかと、うるせえんだよ。俺なんてね、顔がついてりゃいいんだけどな」と、口をすべらせた長吉が、おせんに組み伏せられ、顔に猫にされたような引つ掻き傷を作ったことがある。

「いい男なのにな」

売り物の水菓子も少なくなり、客足が途絶えたところでおせんは、ぼんやりそう言った。

「えっ何か言ったかい？」

「あつううん、何でもないんだよ」

おせんは慌てて首を振った。

「おせんちゃんのお陰で、今日は売れ行きが良かったな」

「そんな、あたしのお陰なんて」

「いや、そうだよ。おせんちゃん美人だから、客がわんさか集まってくる」

「そうかしら」

おせんは無意識に後れ毛を撫でつけていた。そういえば、久しく異性から褒められたことなどなかったような気がする。長吉にはいつもおかめ、おかめと蔑まれ、最後にいつ、おせんという名で呼ばれたかさえ覚えていない。おせんは心なしか、浮き立つような心地でいた。

「そろそろ行こうか？」

店の後片付けをした宗治が、片腕に小梅を乗せてそう言った。

「どこへ？」

「腹が減ったでしょう。飯を御馳走するよ」

「そんな悪いわ……」

長吉と屋台で夕飯を食べようと考えていたので、正直さつきから腹が鳴りっぱなしだった。しかしスイカや瓜もいただいたことだし、その上、食事まで馳走になつては浅ましい。夕餉の誘いは断るべきだと考えた。

「家に冷や飯が残っているかも知れないし、ねっ小梅」

宗治に抱っこされている小梅は、宗治の首に小さな腕を廻すと、

激しく首をふった。

「小梅も、外でおまんまが食いたいよな」

「うん、うん。湯漬はいやなのよ、おっかあ」

宗治の腕の中で、小梅は自分の腹をぼんぼんたたいた。

「もう、小梅……恥ずかしい」

「あそこの天ぷら屋が旨いんだよ、行こうっ」

宗治は十軒ほど先の天麩羅の看板を指さして言うと

「小梅は天ぷらが好きだもんな」

とおせんの返事を待たずに歩き出していた。

「ご馳走様でした」

おせんは、小梅の頭を下げさせて、自分も丁寧にお辞儀した。

天ぷらを食べている最中も、天ぷらを食べ終えてからも宗治は上

機嫌だった。他の客から親子連れと間違われるたびに、宗治は赤く染まった首をさすって照れていた。誤解を解こうとは、いちどもしなかった。屋台の店主は宗治と顔見知りだから、おせんを女房と間違うことはなかったが、元来、無口な性質なのだろう、じつとおし黙ったままで、時折、宗治に眼をやっては、口元をやりわり緩めていた。おせんもそんな宗治の態度に流されるように、否定も肯定もせず、勘違いする客の言いたいようにさせていた。宗治が何も言わないのに、慌てて否定するものどうかと考えたからだ。

遠慮もあり、腹七分目に抑えたおせんは、進められた酒には口をつけなかった。宗治は少し酔っているようだった。橋の方へ歩いて行く途中、人に揉まれ、何度も宗治と躰をぶつけたが、そのたびに濃い酒の香がただよい、そうすると長吉のことが思い出され、気が塞いだ。

腹を満たした小梅は、宗治の腕の中ですやすや寝ている。行き交う人々は、自分達を間違はなく家族と見るだろうし、知り合いにでも見られでもしたら、それはそれで厄介な弁明をしなければならぬいと負担に思っただけ、長吉との夫婦生活をこの先も続けていけるのか定かではないいま、些細なことに神経を尖らせるのはやめようと考えた。

橋を渡り終え、東詰の広小路に下り立ったとき、宗治が急に立ち止まった。

「どうしたの宗治さん」

宗治は振り返ると、おせんを躰で庇うようにして、あっちから行くこうと、家とは別の方向を顎で差した。

「えっ、なんで。遠回りになるじゃないの」

おせんが宗治の大きな肩越しに顔を突き出そうとしたが、宗治は、小梅を抱いてない方の腕でおせんを抱え込むようにして押し歩いた。まさか。

宗治は嘘が下手だと思った。さっきまで酔ってにやけていた顔が、あまりに神妙になりすぎた。駒止橋のたもとまで背を押されて歩い

てきたとき、おせんは不意打ちのように後ろを振り返った。

「あらっ……」

「おせんちゃん、さっ行こう」

そこに居る宗治の声が遠くに聞こえた。いくら人混みの中とはいえ、こんなにも自宅から近い広場で、自分の亭主とお鶴が、囁くような距離でいちゃついているではないか。

「人を馬鹿にして……」

ふしぎなことに、人の押し合う雑踏にいても、長吉とお鶴の輪郭だけは、そこだけ妙な色を帯びて浮かび上がり、まわりの人々は、時が停止したように灰色に見えた。もちろん長吉と、お鶴の話す声は聞こえない。だが、伏し目がちにうつむく長吉に、腰をくねらせながらお鶴が、何かを必死で伝えようとしているのが分かる。その様子は、恋仲の男女が、何やら揉めているようにも映った。お鶴は大胆だった。長吉の袖を振り回し、時に頬を寄せて顔を覗き込んでいる。長吉はというと、片手がお鶴の腰から下の辺りを擦っていた。――いやらしい……知り合いに見られても構わないというの。

全身に戦慄が駆け抜けた。機嫌を損ねて駆け出した女房と、その胸に抱かれている娘を追わず、お鶴とべたべたする長吉が赦せなかった。

「おせんちゃん、見ちゃいけねえ」

宗治が怯えたような声を出しておせんの肩を抱いた。

「きつとなんかの誤解でさあ」

「いい加減なことを言わないでっ」

おせんは怒鳴っていた。宗治の手を振り払い、悪人でも見るような目で宗治を睨んだ。おせんの怒鳴り声で、廻りの人間がいつせいに振り向き、訝しげな目を投げてきた。くすくすと笑って通り過ぎるゆく人たちのことは気にならなかった。声に驚き、うとうとしていた小梅の肩がぴくりと動いたのに、ふつつき虫のようにいやらしい、長吉やお鶴には聞こえなかったようだ。

「おせんちゃん行こう。いま怒鳴り込むなんてことはしない方がいい

い、……おせんちゃんが惨めになるだけだ」

「なぜ、なぜあたしが惨めになるの、あの人が、あたしじゃなくて、あの女を庇うとでも言いたいなの？」

「いや……」

「宗治さん、なんか知ってるんだね、あの二人が、あれと昵懇なのを知ってたんだね……知ってて、三人であたしを笑ってたんだろう。いままで、あの人が浮気するたびに、あたしを宥め梳かしてくれたのも、あたしのことを考えてではなく、あの人のためにしていたことなんでしょ」

全てを言い終わらないうちに、おせんは駆けだしていた。走り寄る足音はなかった。涙を手の甲で拭いながら、どこまでもどこまでも、川縁を走り続け、吾妻橋まで来たところで、周囲の暗さに気が付いた。無我夢中で注意してなかったが、人通りのない、薄暗い所まで来てしまっていたらしい。武家屋敷の外灯を仰ぎ見て、ふつと深い溜息を漏らすと、おせんはいま来た道を戻りはじめた。横綱町の路地を左に曲がり、回向院の前を通り抜けたけれど、その裏手にあるすずめ長屋には帰る気がしなかった。長吉の帰宅を、寒々とした心で待つのがいやだった。

「小梅。」

小梅のことが気に掛かり、一つ目橋のところであらうらうらしている、数人の男に声を掛けられた。夜鷹だと間違われたらしい。顔を伏せて、小走りに相生町一丁目と二丁目の路地にさしかかったところでまた足を止めた。酔っぱらいに顔を覗き込まれたり、しなだれ掛かってくるのを除けたりしながら立ち竦んでいると、

「おせんちゃん」

と、やさしい声が背中をつついた。

「宗治さん、小梅は？」

「小梅なら、おすえに預けてきたよ」

「うちの人は、家に戻ってないんだね……」

「……」

「そっ……」

べそを掻いてうつむいてみると、宗治が肩を抱いてきた。長吉で嗅ぎ馴れた酒の匂いがしたが、いやだとは思わなかった。暖かい愛情のようなものが、宗治の掌から伝わってきた。

「行くっ」

「いやよ帰るのは、……寂しいもん、あたし死んじゃうかも知れない」

小梅がするように大きく首を振って躰を堅くするおせんに、宗治はやさしく微笑んだ。酒の香は残っているが、顔は、いつもの涼しい宗治に戻っている。夜の町と、宗治から香る酒の匂いが、おせんを開放的にしているようだった。母親とは、別の顔になっている気がした。おせんは躰を翻し、家とは反対の方向に向かって歩いた。

「どこに行くんだい、おせんちゃん」

「……」

「仕様がないな、飲みにも行くか？」

宗治は笑って、指先で杯を煽る仕草をして見せた。

同じ頃、長吉はお鶴の部屋にいた。二階の寝部屋の縁側から、外の景色を眺めている。といっても、昼間なら翡翠色の川が広がる風景も、夜は漆黒の中に、ぼちゃりとした水音と、棧橋に繋がれた舟がぎしぎし軋む音が聞こえるだけである。

「気になるの？」

「ああ」

お鶴が団扇で長吉に風を送っていた。それを邪険に払って長吉は首を振った。

「もう、いい」

「今更、悔やんだって仕方ないじゃないの」

「……」

長吉は無言で部屋の奥に眼をやった。乱れた夜具が延べである部屋に、お鶴の躰から剥ぎ取った、小袖や襦袢、湯文字などが散乱し

ていた。

「あたしたちはきつと離れられないんだよ、ねっ長吉さん」

長吉の腰に腕を絡みつけ、素肌の胸板に顔を寄せてきたが、その肩を抱き寄せる訳でもなく、意思のない、まるで人形のように長吉はただ、そこに座っていた。

長吉の鬱屈は自分自身に向けられていた。五日前、湯屋の格子戸からおせんと小梅を覗き見て、親子三人で冷水を食べた夜は、真剣にお鶴と手を切ろうと決めていた。だからおせんを愛情を込めて扱ったし、今夜だって、行きたくもない祭りにも出掛けたのだ。喧嘩別れした親方にも詫びを入れ、もう一度一から唐木職人として出直すところまで話が進んでいた。もう、おせんの情夫に似た生活からは脱したかった。

両国橋から下を覗いたとき、お鶴が、大野屋の肥えた躰に寄り添っているのが見えた。長吉は、表現しようのない嫉妬に駆られた。自分でも驚いたほどである。お鶴のことは好きだったが、捨てること決めた女だったし、お鶴が困われの身だということは承知していたから、今日は檀那が来るから早く帰ってね、などと言われたときでも、後腐れがなくてこりゃいいや、くらいにしか思わなく、嫉妬に身を焦がしたことなど一度もない。それなのにいざ、お鶴と、大野屋の仲睦まじい姿を眼にすると、なんとなく惜しいような悔しいような、妬ましい気持になっていた。

果たして、おせんが小梅を抱いて芝居小屋に駆け込んだのをいいことに、お鶴が大野屋と舟から上がる頃を見計らって、船着き場でお鶴を待ち構えた。待つこと半刻（一時間）大野屋から少し送れてお鶴が舟から降りてきた。大野屋はまだ船着き場にいる。悟られては具合が悪い、長吉としても、ここで大野屋と揉め事になるのは御免だ。

お鶴が大野屋と、完全に離れるまで遠巻きに観察した。お鶴が、お付きの女中と二人になったのを確認すると、駕籠に乗り込もうとするお鶴に目配せをして、橋の東詰に引き寄せた。そこまではよか

つたが、そこでお鶴は、長吉が思つてもなかつた行動に出た。冷静な女だとばかり思つていたお鶴が、人目も憚らず突然泣きだしたと思つたら、家まで連れ帰つてくれなければ橋から飛び降りて死ぬるとまで言い出したのだ。困り果てた長吉は、いろいろな言葉でお鶴を宥めめた。しかしお鶴は生娘のように首を振り、全く聞き耳を持たない。そうしているうちにも何人もの知り合いが、脇を通り過ぎて行つた。男の知り合いは、にやにやとからかうような目付きをしていたが、女の知り合いなどは、汚物でも見るように、長吉とお鶴を眺め、けつ、と息を吐いて過ぎて言つた。この時点でもう、おせんのお耳に、お鶴とのお鶴が入るのは確実である。裏店の女房衆などは、人の噂話しか、愉しみがなような生き物だ。どんな尾ひれが付くか知れたもんじやない。口を吸い合つてたなんて嘘も、序の口のような気がした。しかし、それよりも何よりも、この現場をおせんに押さえられたりしたら修羅場だ。それだけは避けたかつた。

憔悴し、疲労も困憊していた長吉は、もうどうにでもなれと、殆ど投げ遣りに、お鶴を家まで連れ帰つた。玄関先で見送るつもりだったが、ここでも長吉の予期せぬことが起こる。

腹が痛いとお鶴が躰をねじ曲げ、土間に蹲つたのだ。始めは芝居かしらと怪しんだが、お鶴は額に脂汗を掻いていた。艶やかで薄い唇からは、ほの甘い吐息を漏らしている。お鶴の小柄な躰を支え、居間まで運んだ長吉は、ちよつと待つてな布団を持つてくると言つて二階への梯子をよじ登つた。

布団を抱えて振り返ると、そこにお鶴がいたから驚いた。お鶴さん、もう大丈夫なのかいと額に手をあててみると、やはり熱があるようだった。頬も上気して赤い。さつき丸めたばかりの夜具を延ばして敷いて、お鶴を横に倒すと、帯を解いてくれと頼まれた。知らない躰じやないので、なんの躊躇もなく帯揚げ外して帯を緩めるとお鶴が首に絡みついてきた。病人とは思えない凄力で引き寄せられ、少し恐怖を感じたほどだ。それから、いつものように淫楽を味わつたのだが、今夜に限つては後味が悪かつた。おせんのこととは

気に掛かるし、自分の不甲斐なさにもほとほと愛想が尽きた。

お鶴は普段、凜と構えた隙のない女だったが、褥の中では別人となった。そこがお鶴の魅力でもあった。

お鶴との出会いは昨年夏のことである。日雇いの肉体労働は、夏場は疲労が身に染みてきつい。昼食時、食欲もなく路地で座り込んでいた長吉に、沈香の香を漂わせたお鶴が話しかけてきた。家の格子戸の建て付けが悪いから直してくれないかと、突然頼まれたのだ。自分の家の建て付けも直さなくせに、報酬は弾むという、美人のお鶴の家にいそいそと出掛け、躰の關係を持つようになったのは、ほんの二月ほど前のことである。

それまでは月に、一度の約束で出掛けて行つては、箆笥や鏡台、縁側などといった類の修理をしていただけである。長吉は、浮気の常習犯だ。浮気をすることでの罪悪感など殆どなかった。そんな氣持が、辛うじてあつたとしたら、所帯を持つて一年もしたころに、酔つた勢いで、宗治と岡場所に行った時くらいであろう。あの夜は、家に入ることも憚られ、冬の寒空の下、早朝おせんに氣付かれるまで、酔いつぶれて外で寝てしまった風を装つた。

濃密な情交で果てて眠るお鶴の脇を這い出て縁側に座つた長吉は、これまでのことと、これからのおせんとの生活のことを考えていた。しかしいくら悩んでも、おせんと別れるという二文字は浮かばなかつた。おせんは器量はまあまあだが、働き者で、氣持のやさしい女だ。それに、この世でたつた一人の小梅の母親でもある。家族離散など、想像するだけでぞつとした。

「あんたも堪え性のない人ね」

「お鶴さんに言われたくないねえ……」

緋色の襦袢に腰紐ひとつ巻き付けただけの姿で、胸などは、乳房がこぼれそうなほど開いていたが、お鶴は構わない様子で長吉に甘えてきた。濃い沈香の香が、今宵はいやに鼻についた。胸が悪くなる思いである。

「今夜、泊まっていって」

「いや、それはだめだ……」

「どうして？」

「どうしてって……」

「冗談じゃないと長吉は思っていた。両国橋の上では気付かなかったが、ここに来て漸くおせんがぷりぷり怒った理由が分かった気がする。女の勘というか、霊力のようなもので、長吉の見つめる先の女を見咎め、それが自分の亭主となんらかの関わりを持つだろうと感じ取ったに違いなかった。これで無断外泊などしたら、今度こそお仕舞いだ。長吉は顔をあげた。

「お鶴さん、いま何時かな？」

「さあ、夜五つくらいかしらね？」

「そりゃいけねえや」

「なによ、いきなり、いやだよ帰らないで」

長吉の袖を引っ張る指を一本、一本、解いてから、やさしくお鶴を抱き寄せた。お鶴が満足そうな溜息を吐くと、ごめんよと言って、脱ぎ捨てた着物や帯を拾い集める、長吉は足早に梯子を降りて行った。

「ちきしょう、湯に入らないと帰れねえぜ」

通り縋る人を除け、時には除けすぎて転びそうになりながら、長吉は松原町の湯屋まで駆けて行った。

「閉まってたら、扉を蹴り破ってでも入ってやるぞ、もうろく爺待ってるよ」

崩壊

宗治行きつけ煮売り酒屋も、今宵は時間が遅いせいか閑散としていた。おせんは、顔の前に差し出された盃を受け取るうか、どうか思案している。

「一杯だけでも、どう？」

この店に入ってから小半時がすぎようとしていた。宗治に幾度となく酒を進められていたが、「お酒はどうもね、苦手なの」と、断り続けてきた。先程、道端で宗治に肩を抱かれたせいか、それとも、子持ちの女が、酒場で男と差し向かっている環境がそう思わせるのか、いつもは子供っぽい笑顔を浮かべるだけの宗治が、見ず知らずの他人のようにしか見えなく、警戒していた。

「別に酔わせてどうしようとしてわけじゃないぜ、おせんちゃん」「そつそりやそうね。じゃあ、一杯だけ」

あまり断るのも失礼だし、執拗な宗治の進めに飽き飽きしていたこともあって、おせんは宗治の酒を受けることにした。

「これ飲んだら帰ろう。」

自分の意思で酒場に来てはみたものの、おすえに預けた小梅のことが気に掛かる。早くこの場を立ち去りたい気持で、おせんは顔を仰向けて一気に飲み干した。

「へえ……」と宗治は、感心したように、眉を上げ、少し引いておせんを見つめた。

「あれ、大丈夫？」

おせんは、拳で胸を叩いて咳き込んだ。酒が飲めないわけではない。急いで飲んで、器官に入ってしまったのだ。

「おせんちゃん」

宗治は慌てたように立ちあがると、二人が腰掛ける長床几の反対側からおせんの背を擦った。

「大丈夫よ宗治さん、ちよっと」

言葉にならないほど咳が出た。背中に気安く触る宗治の手を潰すように、壁に背をふつつけ、手を上下に振って、「もう、いい」と、宗治を座らせた。

「おい、ちよつと水を頼むよ」

すぐに女中が水を運んで来た。草履を引き摺るように、だらしない歩き方をする十七、八の女だった。どうぞ、と気怠そうに言うとおせんに水の入った湯飲みを手渡した。

「ありがとう」

おせんは咳き込みながらも、女が去り際に、宗治の腕をつねっていくのを眼の端で認めた。

「あーつごめんね、もう大丈夫だから」

「良かった……顔が真赤ですぜ」

「あらあら」

おせんは両手で頬を覆った。ぽんぽんと頬を打って、額の汗を掌で押さえると、目尻に堪った涙を拭った。ほつと溜息をつくとなんだか急に可笑しくなり、おせんは弾けるように、けらけらと笑い出した。宗治もつられて笑った。

家に帰りたくないと言ったおせんを、宗治はこの門前町の酒屋に連れてきた。天ぷらを腹いっぱい食べたあとだったが、泣いて走ったせいもあり、小腹が空いていた。酒を注文する宗治の横で、おせんは枝豆や、焼き魚をつまみながら、長吉と、お鶴のこと、宗治に洗いざらい話して聞かせた。宗治は終始、相槌を打つだけで、自分の意見を述べようとはしなかった。

「もしかしたらこの人、うちの人とお鶴のこと、知っていたんじゃないかしら。」

おせんに思わせたほど、宗治に動揺や、驚愕の色は見えなかった。「もう一杯だけいたどうかしら」

「もう一杯とは言わずに、どんどん飲んで。こういうくしゃくしゃした時はね、飲んで忘れるのがいちばんだよ」

宗治はおせんの杯を満たすと、自分にも酒もついだ。おせんが手

を伸ばしたが、手酌の方が気楽でいいからと、宗治はおせんの酌を断った。

「お正月以来でしょう、お酒を飲んだの。なんだか胸が熱くなってきた」

「おせんちゃん、酒は嫌いだったね」

「そうね」と、おせんはうなずいた。実のところ酒は嫌いではないが、亭主が一升徳利を抱えてる姿を始終眼にしていると、酒の存在事態が悪のように思えてきてしまう。それに、長吉と所帯を持つ前に、酒なら厭というほど飲まされた。

「でもたまには酒もいいよ。いやなことも一時的になら忘れられるしね」

「そう……でも、お酒にあまりいい想い出がないのよ」

長吉も、宗治も、すずめ長屋の誰も知らない苦い過去を思いながら、おせんはそう言った。言つてすぐ、邪気を振り払うように大きく首を振った。

「おせんちゃん」

宗治が窺うような表情で顔を覗き込んできた。眼が細いせいか、間近で見ると、意外と黒眼勝ちだった。この数日間の夏日で焼けたのだろつ。色白の肌が褐色になり、男らしさが増していた。一瞬だが、異性として意識してしまい、おせんは宗治から視線を外した。

「どうかした？」

「ううん、なんでもないの」

おせんは首を振って唇に杯を持って行った。飲み干すと、顔がぼつと熱くなった。

「馬鹿亭主のことを思い出しただけよ」

「もう、長吉のことはいいよ」

宗治は嫉妬したような粘りのある言い方をすると、斜に向いて脚を組み、酒を呷った。

雲行きが怪しい。「宗治さん」帰ろうと、促すつもりで声を掛けた。しかし宗治は、腰を据えて動かないつもりだ。振り向く前に、

酒と肴を追加で注文した。

「おせんちゃん飲んで」

宗治は手にしていた銚子を傾けて、おせんの杯に酒をつぐと、自分も杯を口にあて、上目遣いにおせんを見た。おせんは、酒は嫌いじゃないが、強くない。顔から首、白い胸元に、耳たぶまでが桃色に染まり、熱を持っていた。

「この人、本当にわたしに気があるのかしら？」

酒がまわったせいとか、ふと、そんなことを考えた。が、すぐに打ち消し

「亭主のこと意外、話すこともないでしょう」

敢えて、そつけない風に言った。

「そんな意地悪なことを言つて……今夜は、好色な長吉のことは忘れよう、ねっ、おせんちゃん」

「そうね、あんな男のことなんて考えてたら、せつかくのお酒がまずくなつちゃうもんね」

二人は声を揃えて笑った。おせんもたいぶ酔いが回って心地がいい。

「おなみ、熱燗もう二本つけて」

宗治が片手を上げて、おなみと呼ばれた先程の女を呼んだ。おなみは、はーいと気の抜けた返事をする、きつとおせんを睨んで板場に入った。

「なんだありや。」

おせんはむかついた。板場の方を睨み返してから、改めて店内を見渡してみた。小さいが、こざつぱりとした店内には、五、六人の男の客が、静かに酒を飲んでた。板場にいるのが、たぶん店主だろう。割腹の良い無愛想な顔付きである。額には、まるで傷のような深い皺が、川の字に三本並んでいた。他に給仕女が二人、合わせて三人で今宵は切り盛りしているらしい。店主が料理をこさえ、女は接客と、膳の上げ下げ、それに酒を温める仕事をしているようだった。時に、客の席に座り、酌婦の真似のようなことをして、二言、

三言、言葉を交わしてはいるが、客も女も、互いの躰に触れるようなことはない。変な言い方だが、女を置いてる店にしては、健全な商売のようだと思った。おなみの外の、もう一人の女は、少し肥えた色白の娘だった。

「ねえ、宗治さんはこの店、良く来るの？」

「そんなこともないよ、三日に1遍くらいかな」

「うちの人も来るんでしょう？」

「また長吉の話か……」

今度、宗治はおもむろに厭な顔をした。その態度に、おせんは、思わずごめんと片手拝みで謝っていたがすぐに、これはおかしいぞと思いはじめた。これではまるで宗治が、自分の情夫のようだ。

「おせんちゃん」

宗治の声が甘えていた。先程まではつきり開いていた眼が、一瞬のうちに半開きになり、白目の部分が、赤く染まってきた。それだけではない。長床几に座る二人の間に置かれた酒肴の幅が狭まり、宗治の顔がぐつと近くに感じた。

「俺ね、前からずっと、おせんさんのこと……」

「宗治さん」

おせんは咄嗟に立ちあがっていた。その瞬間、店内にちらほらいた客と、女中二人、板場の店主までもが顔を覗かせたが、おせんが酒で赤くなった顔を、更に赤くして会釈すると、みんな元の通りに酒を飲み出したり、持ち場に戻ったりしていた。

「やはりだめか……」

首をうなだれる宗治の肩を、おせんはほんと叩いて腰を下ろした。帰ろうと言いたかったが、財布を持っているのは宗治である。言い難かった。

「宗治さん」

「えっ」

宗治は虚ろに赤く滲んだ眼をおせんに向けた。

「あの人、ほら、おなみさんって言ったかね」

おせんはちらとおなみの方を見やると、声をひそめて尋ねた。

「ああ、そうそう」

宗治は首を振り子人形のように振ってうなずいた。拍子に、首が落ちてしまっじやないかと思うほど首はだらりと下に伸びている。急に酔いが廻ったようだ。

「これじゃ男前も台無しね。」

おせんは宗治を、奇怪な生き物でも見るように眺めた。

「あの、おなみさんと宗治さん、なんかあった？」

「いいや、ねえよ」

酔ってるせいだろ。宗治はぞんざいな言い方をした。惚けたような眼を向けると、馴れ馴れしい手付きで、おせんの顎の下を撫でた。おせんは、その手をぴしゃりと払った。

「こら、宗治さん……人の女房に触っちゃだめじゃない」

「冷たいな、おせんちゃん」

泣きべそをかくふりをする宗治の口におせんは、水の入った湯飲みをあてた。宗治はその手を押し退けると、酒の入ってない杯を捨てた。

「もう飲まない方がいいよ宗治さん」

「飲まないよ、これはおせんちゃんの、いま入れるね」

宗治がするままに、仕方なく酒を飲んだおせんは、喉にしたたり落ちた酒のしずくを拭いながらもう一度、おなみのことを聞いた。

「本当に何も無いの、あのおなみって子と」

「ないよ」

「だってね、さっきから睨まれてる気がするのよね、あたし……」

「俺はないよ」

「俺はないよってなに？含んだ言い方をするわね」

こつ話してる最中でも、おなみの刺すような目が気になる。凄みにある視線は、嫉妬以外に考えられなかった。それくらい、鈍感なおせんにだって分かる。

「おなみは、おせんちゃんが長吉のおかみさんだって知って、苛つ

「いてるんじゃないかな、さっき聞かれたからそう答えたんだ」

「それ、どういう意味？」

厭な予感がした。もう子細を聞かなくても、次に宗治の口から出て来る言葉はおよそ想像がついた。身体を丸める宗治の胸から銚子を奪い取ると、自分で注いで飲んだ。立て続けに三杯飲んだ。

「長吉と、あのおなみつて娘に何かあつたのかい？」

ゆらゆら身体を前後に揺らす宗治の肩を掴んで、背筋をしゃんと伸ばさせた。

「ああ見えても酌取り女だからねおなみは……、金を払えばさせてくれるんだが、おなみは自分から長吉を気に入って、それで唯で何度か……」

「……どこで、あの女の家で？」

「とか、神社の境内……」

「罰当たり……」

「これ、内緒……ねっ」

宗治は人差し指を唇に当てた。躰はまだゆらゆらと揺れだした。じつと見ていると、こちらの気分が悪くなりそうだった。おせんは宗治から目を逸らせて手酌で飲んだ。勢い余って、^{おくひ}？ 気を漏らしても気にしなかった。

「そうかい、そうかい、あんたたちはそうやって、いつも二人であたしを騙してたんだね」

おせんは宗治の額を軽く叩くと、ふん、もうどうでもいいや、あんの野郎と口汚く長吉を罵った。

「宗治」

酔いに任せ、おせんは宗治を呼び捨てにしていた。宗治がはいと顔を上げた。上げた顔をおせんに近づけ、今にも口を吸おうと首を少し傾けている。おせんはその宗治の頬を両手で包んで固定した。宗治のゆらゆらとした動きが止まった。

「あたし決めたよ。長吉とは離縁する」

「ほんとう？」

宗治は、頬を押さえるおせんの手を取って、帯の下で握りしめた。「う、うん……」宗治の真剣な眼に戸惑いながらもおせんは、うなずいた。

「だったらおせんちゃん、小梅と、俺と、おせんちゃんの三人で暮らそうか……」

宗治は泣き出しそうな声で言った。おせんちゃんが好きだ、ずっと昔から……そう付け加えると、肩を抱いて引き寄せた。おせんは抗わなかった。胸の上で銚子と杯を抱え、宗治の肩に顔を寄せた。もうどうにでもなれと思った。

「宗治、……今夜は、あたしを、あんたの好きにしていんだよ」「へ？」

宗治はおせんを引き離すと、間抜けた顔で見つめた。眼をパチクリさせ、背の方に置いてあった水を後ろ手で取ると、一気に飲み干した。

「すすすきにしてって……」

「分かるでしょう、子供じゃあるまいし。あたしはね、亭主にはほとほと愛想が尽きたんだ。もうこれからはあんな浮気野郎に縋らずに、あらっ縋られてるのはあたしだね、ハハハ。……とにかく、小梅と二人で生きて行くんだ。今夜は新しい生活への船出だよ、あんに身を任せるからね」

自分で言って恥ずかしくなったのか、おせんは袂を顔に押し当てて笑った。

「おせんちゃん、さつきも言ったけど、俺、本気だから……酔って言ってるんじゃないねえ、小梅と三人でどこか遠くで暮らそう、ねっ」

宗治はおせんの袂を下ろすと、心の中を探るように見つめ、「前々から、ずっと考えていた。おせんちゃんと夫婦になって、小梅と三人で暮らせたらどんなにいいだろうと……」

「そうだったの？」

「気がおかしくなってしまうんじゃないかと思うほど、おせんちゃんのこと……」

「でも、あたしなんて、若くないし、顔も美人じゃないし……」

おせんは言うと、また酒を注いで顎を仰向けた。完全に酔っていた。うつむくたびに頭がぐらぐらした。宗治に本気に身を任せてしまおうかとまで考えた。

「おせんちゃんは、かわいいよ、肌だつてこんなにきれいだ」

「また、肌か……」。

いつも肌ばかり褒められる。憤って、もう一杯飲んだ。その間に宗治は水を何杯もおかわりしていた。酔いを覚まそうとしているのがわかる。

「亭主にはいつも、おかめ、おかめつて……あたしの顔は泣きべそ顔だと笑うんだよ、あの人」

「確かに悲しそうな顔をしているが、それは長吉が浮気ばかりするからだよ、俺はおせんちゃんを、一生、泣かせない」

「ほんと？」

「本当だとも」

「女も買わない？」

おせんが見つめ返すと、宗治はごくりと喉を鳴らした。

「おせんちゃんと、小梅がいてくれれば、他の女の肌はいらねえ」
「嬉しい」

「おせんちゃん」

宗治は人目を憚らずおせんの肩を掴んで引き寄せた。おせんも宗治に寄り添った。だが二人の間には、おせんの抱える銚子と杯がある。

そのとき、ごめんよと長身の、懐手をした男が石鹸の香りをぶんぶんさせて入ってきた。暖簾を潜ったのと同時に、

「よっ、おなみ。お前、まだここで働いてたのか？一杯だけ飲ませて貰うよ」

「と言い、人差し指でおなみの胸をつついた。もう一人の女に向かつても」

「お前、なんて名だったかしら？それにしても白のような体格しち

やってよ、また肥えたな？この狭い店がお前のせいで余計暑苦しくなるんだよ、痩せな、ねっ」

と尻を打った。女中はふんと、鼻を仰向けて長吉の前から店の奥の方へと銚子を運んで行った。長吉は懲りもせず、その肥り気味の女に向かい、地響きがするぜと、からかった。刹那、店内にいる客が笑い、長吉も笑ったが、その直後、

「なっ……」

おせんと目が合った。長吉の表情がみるみる険しくなっていた。先程の、おちやらけた気配は微塵もない。

「お前さん……」

「おい、なんだそりゃ……」

長吉の目には、はつきりと、長床几で躰を寄せ合うおせんと宗治の姿が映っていた。

「てめえ、……おいこら宗治、お前なんでうちのかかあの肩を掴んでんだ」

一步、一步、踏みしめるように長吉は二人に近づいた。狭い店内である。五歩ほどで、長吉は二人を見下ろす位置へきた。宗治はおせんへ廻した手を、そろそろと下げて、膝の上に重ねた。

「おい、おかめ」

じつと宗治を見据えていた鋭い視線は、今度おせんに向けられた。おせんは動けなかった。

「おめえ、小梅はどうした。おい、小梅はどうしたって聞いてんだよっ」

長床几を思いっきり蹴り上げられ、おせんは飛び上がって店の隅に逃げた。銚子や杯はおせんが抱えているが、長床几にあった食べ残しの乗ってる皿などが落ち、無残な音を立てて割れた。客達もみんな席を立て成り行きを愉しげに眺めている。面白いものが見られると、にやにやと笑う者もいた。泥酔している宗治は、素早い行動が取れず、惨めにも床に尻をついて、長吉を怖々と見上げていた。

「宗治」

長吉は宗治の前に腰を下ろして、煙たそうに細めた眼で、宗治の頭の天辺から、尻餅をついた腰の辺りまで眺め下ろした。宗治は後ろ手に付いた手をじりじりと引いて躰を長吉から遠ざけようとしている。腕っ節では、ひ弱な宗治は到底、喧嘩馴れしている長吉に勝てない。それは宗治自身が良く知っている。

「お前さん、やめて」

店の壁に、躰を隠すように押しつけていたおせんが、銚子と杯を近くにあつた飯台に置き、長吉の後ろに駆け寄つた。

「なにっ」

長吉は、首だけねじ曲げておせんを見上げた。所帯を持ってからこれまで、見たこともないような凶暴な目で、おせんを睨んでいる。「おかめ、お前、いつからこいつとできてやがった」

「できてたなんて、変なこと言わないで。勘違いなんだから。まずは大人しく話を聞いておくれな」

「嘘つくんじゃねえ」

長吉は立ちあがつたついでに、宗治の腹を蹴っていた。うつつと唸り、宗治が身を丸めた。

「宗治さん」

走り寄ろうとするおせんの帯を掴んだ長吉は、手の甲でおせんの頬を張り倒した。躰を大きく翻して、床に叩き付けられたおせんが飯台の脚にぶつかつた。勢いで、上に積んであつた箸や、小物がばたばたと床へ落ちた。

「おいおい、喧嘩なら表でやってくれよ」

店主が敵つい顔で出て来たが、長吉は一瞥しただけで、気にしていない。倒れたおせんの前に屈むと、衿を掴んでねじり上げた。

「前にお前に言つた筈だぜ。浮気したらぶつ殺すとよ」

「ふん」

おせんは不適な笑い声を立てて顔を上げた。鬢が乱れ、唇が切れて、凄惨な感じがした。肥えた酌婦は床に散らばつた瀬戸物の欠片を集めていたが、おなみの方は腕組みをして成り行きを傍観してい

る。宗治は、蹴られた腹を押さえ、軀を折って苦しそうな嗚咽を漏らしている。

「何がおかしい」

長吉は、おせんの頬を二度、張った。おせんは黙って泣く玉じゃない。片手で長吉の衿を掴み抵抗し、もう片方の手では、長吉の首筋に鋭く爪を立てたが、すぐに手首を折られるほどの力でねじ曲げられた。

「ふふふ……っ勝手なことばかり言ってさ、あんた自分の浮気を棚に上げて、よくそんな大口が聞けるね」

「なんだとこのあまつ」

長吉はおせんの衿を握り込んだまま立ちあがると、なかなか立っていないでおせんを引き摺るようにして店の戸口へ向かった。

「ちよつと待て」

起き上がった宗治が、長吉の脇腹に体当たりをして止めようとしたが、片手で払われ、反対に顔を蹴り上げられた。鼻をおさえ、蹲った宗治は、大量の血を床いっぱい流した。唸るように、鼻が折れたと言っている。長吉が宗治に気を取られている少しの際におせんは立ち上がり、長吉の衿を掴んで揺らした。

「あんたね、お鶴とかいう女狐と、今まで一緒にいたんだろう、そうだろうっ、働きもしないで女遊びばかりしゃがって、このろくでなし」

「何を言っつてやがる……」

初めて長吉に狼狽えの色が現れた。目線を外し、可笑しくもないのに唇の端を緩めている。

「それに、あのおなみとかいうばか娘ともできてたっつていうじゃないか、わたしは何もかも知ってたんだよ」

おせんはおなみを睨んで言った。おなみに動じた様子はなく、袂で口を隠して、婆アにはか娘だつて言われちゃったと、けらけら笑っている。

「どつなのさ？」

おせんが顎をしゃくると、長吉は苦笑いをして宗治に向いた。

「宗治……この野郎、てめえだけは赦せねえ」

衿を握り込むおせんを押し倒すと、長吉は、苦しそうに悶える宗治に掴みかかるうとした。おせんは素早い動きで長吉に立ち塞がる
と平手を喰らわせた。

「ばか亭主っ」

「なにしゃがだ、このあま」

すぐに平手は返され、長吉はおせんの鬢を掴んで羽目板に押しつけた。急所を蹴ろうと足をばたつかせ、泣きじゃくるおせんを、長吉は狂気なまでに冷酷に見つめた。

「おせんさんよう、いいか、良く聞きやがれ」

凍り付くような冷たい声を出した長吉は、鬢から手を離し、おせんの大きく開いた衿を合わせてやると、荒い呼吸を整え、唇の端を噛んでうなずいてから、おせんを鋭く睨んだ。

「前にも言ったが、男と女は心も体も全く違う生き物なんだよ。勝手なように聞こえるかも知れねえが、女はな、特に女房って立場の人間は浮気しちゃあなんねえ」

長吉の語尾は泣き声になってた。大きな溜息を吐くと、涙をすすった。

「お前は、小梅の母親だからよ、殺しはしねえが、だが……、おせん、お前とはもう、おしめえだ……」

おせんは、何度も殴られて、赤く腫れ上がった顔を上げた。口を開こうとしたが、長吉の方が早かった。

「今まで、お前に苦労ばかり掛けてきた俺だけだよ、まだ腕の方は衰えていない。三日ほど前、親方に頭を下げて、また働かせて貰うことになったんだ。そのとき、試しに櫛を彫ってみたんだが、親方に揉められたよ。お前の腕は天下一だつてね」

「そんな話、聞いてないよ……」

「手間を稼いでから、話そうと思ってたんだがな……」

長吉は自分の不甲斐なさを思い出したのか、大きく息を吐き出す

と苦悶に顔を歪めた。大袈裟に言えば泣き出しそうな顔になっている。

「明日、早朝にでも、あの家を出て行く。俺には一分なんて店賃を払える甲斐性はないからな」

おせんはもう答えなかつた。静かな歎歎の声を上げ、長吉を見つめている。長吉は、そんなおせんの目をまっすぐ見据えた。

「小梅のことだがな」

「うん」

小梅の名を聞いた途端、おせんはしゃくり上げる様にして泣いた。「小梅は、俺は引き取って育てる。浮気をするような薄汚い女の元には置いてけねえからな、しかもお前は昔……いや、なんでもねえ」長吉は顔を逸らせ、言い掛けた言葉を飲み込んだ。おせんは驚愕に震える目を上げ、長吉の袖を掴んだ。

「お前さん、何言ってるんだい」

小さく首を振り、懇願の表情を浮かべている。

「何ってお前……」

「小梅を引き取るって馬鹿なことを言うんじゃないよ。小梅はね、女の子なんだよ、母親がいないとこれから苦労するんだよ」

おせんは血だらけの口を、腕で手荒に拭って長吉に掴み掛かった。「あんたと別れてもいい。けど小梅と引き離されるのだけは堪えられない」

「……」

「お前さん、聞いてくれ、あたしと宗治さんはなんでもないんだよ、本当だよ」

長吉は顔を逸らせ、おせんを見ようとしない。懐のあたりを握り込まれ、揺らされるままになっている。他の客からも、店主からも、そう簡単に離縁なんてするもんじゃねえ、もつと女房と話し合え、後添えなんてそう簡単に見つからねえぞ、子供が可哀想だと思わないのかと、野次が飛んだ。

「嘘じゃない。ねえ、お前さん、あたしを見て、あたしがそんな女

に見えるかい」

「……悪いがなおせん……」

「いやっ、お前さん、ねえ信じておくれよ……」

小鳥がさえずりはじめた。朝日が、茶の間で寝ている小梅の瞼を射したとき、小梅は、ぐずるように口をへの字にして眼を掻いた。

「お前、なんであんなこと言ったんだ。あんなことさえ言いださなけりゃ、俺たち、やり直せた筈なんだぜ」

身支度をしながら長吉は言った。背を向けて、胡座をかいて、小梅の小袖を風呂敷に包んでいる。今朝、長吉は小梅を連れて出て行くらしい。しばらくは親方の家を間借りし、暇を見て住む家を探すと言っていた。

「どうせ無理だとわかったからさ、あんたの言う通りだもん、躰で金を稼いでいたあたしなんて、小梅の傍にいない方がいいんだ」

「……」

「宗治に抱かれようと思ったなんて、なんで言ったんだ。それさえ聞かなければ、かっとなって別れようとは言ったけど、俺だって、

……黙って元の暮らしに戻れたぞ」

「……あたし、こんな女だもん」

おせんの覇気のない声が虚しくひびいた。

あの夜、長吉に店を連れ出され、すずめ長屋に帰る道すがら、蹠蹠とした足取りで着いて来た宗治が、おせんと酒場で飲むに至った経緯を長吉に訴えた。もちろん、両国橋で、お鶴と一緒にのころを見たことも話した。それでも長吉は納得しなかった。自分のことは棚に上げ、疑いを寧ろ、女房のおせんに向けた。長吉は、おせんが昔、長吉と所帯を持つ以前、いかがわしい料理屋で働いていたことや、身請けされたやくざもんと淫らな生活を送っていたことなどを喋った。

「知っていたの」と泣くおせんに、親方との喧嘩別れの理由はそれだと言い放った。あの日、親方はうつむきながら、自分も昔、おせ

んを買ったから確かだと言った。どこかで見た顔だと思っていたが、祝言の日に思い出し、ずつと言えずにきたのだと途切れ、途切れに教えてくれた。こうなったら、どこの誰がお前の女房と関わりがあったか知れたもんじゃない。おせんとは、子供ができる前に別れちまえと長吉を説得した。嘘だと反対に怒鳴りつけ、激怒した長吉は、気が付いたら親方を殴り飛ばしていた。しかしそのころの長吉に、おせんと別れる気はどうしても起きなかった。過去は過去だと割り切って、二人で生きて行こうと一人誓った。だがいまになって思えば、長吉がおせんの過去を忘れたことなど一度もなかったのだ。おせんは恪気の強い女だが、ぶらぶらと仕事もしないで女遊びに耽る長吉を、頭ごなしに叱りつけたり、癩癩を起すなどということは殆どなく、いつもどちらかと言うと、穏やかに冷静に、ことの次第を見守ってくれた。それは、おせんの中にある、長吉への後ろめたい、懺悔の気持だろうと薄々感じていたし、またそういうおせんに対し、騙しやがってと咎める心が長吉に無かったとは言えない。

「行ってしまუნだね」

おせんは泣き出しそうなのをじっと堪えてそう言った。決めた事だからなと言うと長吉は立ち上がり、まだ寝ている小梅を抱いた。小梅の首が後ろにだらりと垂れ、抱き直したとき、前のめりになって長吉の肩に鼻を打った。「うっう」と言っただけ泣き出す小梅を、長吉はあやしたが、目覚めで鼻を痛くし、機嫌の悪い小梅は、両手をおせんに投げ出した。

「おつかあがいい」

おせんは小梅に背を向けた。台所に立ち、米を洗い出した。水桶の中には、今朝、長吉が汲んでくれた水がぎりぎりまで張っている。建て付けの悪い戸も、今まで何度、お願いしても直してくれなかったのに、今朝は日が昇ると同時に、カンナを片手に修理をしてくれた。

「もう行って……」

「ああ……」

「あつ、でもお前さん……」

米を磨ぐ手を止め、小梅の小袖を掴もうと手を延ばしたが、裾はひらりと翻り、おせんの指先をかすただけだった。振り返り、長吉はおせんを見下ろした。いつもの縞の着流しに、風呂敷を斜に結び、片手に小梅、もう片方で、長吉お手製の小さな行李を抱えていた。小梅はまだ、口の端を下げた泣きべそ顔で、長吉がどつちを向いても、おせんにきつと振り返り手を伸ばしている。声は出ていなかったが、さつきから涙が際限なく流れている。家の中の異様な雰囲気、小さな体で感じているようだった。その証拠に、長吉の首に廻した右腕は、衿を、手が変色するほど硬く掴んでいるのに、もう片方はおせんに伸ばし、この世で大切な人をもう一人、掴まなくちゃと、必死に藻掻いていた。

「やっぱり……お前さん」

おせんの言葉を、長吉は首を振って遮った。昨夜から、長吉のことを、どこか他人のように感じていた。七年も夫婦でありながら、目の前の男は、おせんとは全く繋がりのない人物のように思えてならない。

「小梅のことは心配するな、達者で暮らせ」

長吉は、こちらが拍子抜けするほどあっさりと言いつ捨てた。

長吉の顔を、おせんは見る事ができなかった。未練もなく背を向けた長吉が足で戸を開けたとき、おせんは、つい手を伸ばして長吉の袂を引いた。

「このまま、本当に別れてもいいの。ほんとにほんとなの？あたし誰かと所帯を持つちゃうよ、……ねえ、お前さん答えて」

長吉に縋り付くおせんの肩を小梅が掴んだ。泣き顔が本格的になつてきている。おせんは小梅の手を握りしめた。

「くどい」

長吉は顔を傾けて、微かにうなずきながらそう言った。小梅の小さな指をおせんの手から引き契った時、火がついたように小梅が泣きだした。

「じゃあな」

玄関の鴨居に頭を打たないように首を曲げて出て行くいつもの背中は、もう二度とこの家の敷居を跨ぐことはないのだ。おせんは土間の柱に躰を預け、魂の抜けた屍のように、そのまますると腰を落とした。

「どうしたんだいおせんちゃん」

泣き喚く小梅を抱えて出て行く長吉を見たおすえが、草履を散らかして這い上がってきた。

「ねえ、あんた、どうしたんだよ」

土間の柱に身体を凭せ掛けたおせんの目は、うつろに宙を向いていた。

「いいんですよ、おすえさん、酌婦上がりのあたしが、人並みのしあわせなんて望んじやいけなかつたんだから……」

「えっ、なんだって？」

おすえも泣いていた。太い指先でおせんの袖を掴むと、何があつたか知らないけど、いやだよ、小梅と離れるのはいやだよあたしと、泣き崩れた。

過去

あれから一年が過ぎ、本所深川に、また賑やかな夏がやって来ようとしていた。風の便りに、長吉が、万年橋の向こう、海辺大江町の表店に小さな店を構えたと聞いていた。あの日、長吉と小梅が出て行ってからも、ずっと松坂町のすずめ長屋を動かなかったおせんは、いつか小梅が一人とことこと訪ねて来てくれることだけを祈って暮らしていた。

いつかまた一緒に暮らせる日が来る。儂いようなおせんの希望は、小梅との血の繋がりだけを頼りとしていた。

「おすえさん、お願いね」

おせんは毎日こう言ってから仕事に出る。もし小梅が訪ねて来たら、家に入って待つようにと頼んでいるのだ。家の中には、小梅のために買った玩具や、菓子をいつも切らさず用意していた。

長吉と小梅の住む海辺大工町までは少し距離があるが、そこへ越す前、二人は、亀沢町に住んでいたと聞いている。亀沢町と松坂町は、細川若狭守の屋敷を挟んだだけの距離である。そのことを聞いた当時、おせんは飛び上がって喜んだ。また三人で暮らせる望みが、消えていない気がしたのだ。

海辺大工町へ長吉が移り住んだのは、ほんの一月前のことだと、人伝えに聞いた。眼と鼻の先の亀沢町とは違い、橋を二つも超えなければならぬ場所なので、四歳になつたばかりの小梅が、母を訪ねてすずめ長屋に来ることは絶望的に思われた。それで少々寂しく気落ちはしたが、おせんは自分を奮い立たせるようにして、とにかくきびきび働いた。

長吉と別れて一月ほど経ったある夜、宗治が突然、家の戸を叩いた。

「俺だよ、おせんちゃん、開けてくれないか、大事な話があるんだ」
宗治の声は、切羽詰まって聞こえた。もし戸を開けてしまえば、

長吉と小梅との生活をという、一途の望みが経たれてしまう気がしていた。行燈の火を吹き消して、息を殺して部屋の隅で蹲っていたが、やがて宗治のすすり泣きの声が聞こえてきた。

「おせんちゃん、話しがしたいんだ」

宗治の声は小さかったが、それでも隣近所に聞こえたら具合が悪い。おせんは灯りの消えた部屋の中を、這うようにして土間まで下りると、板戸越しに宗治に呼び掛けた。

「宗治さん、どうしたと言うの、一体」

「どうしたって、……おせんちゃん俺と一緒にいてもいいって言ってくれたじゃないか。長吉が小梅を連れて出て行ってしまったのは残念だったけど……あんな亭主と別れられたんだ、なっ二人で生きていこう……開けてくれないか、おせんちゃん……これからの話しがしたいんだよ」

身震いがするほどの恐怖を覚えた。宗治がまさか、ここまで思い詰めているとは夢にも思わなかったからだ。唯の酔っぱらいの言葉だと、特に思い出すこともなく日は過ぎていた。

「宗治さん、もう遅いから、今日は帰って」

「遅いって、まだ日も暮れていないじゃないか……おせんちゃん、俺が嫌いになつたんだね」

「何を言ってるの宗治さん、もうとっくに夜中じゃないの」

「おせんちゃん、開けてよ」

宗治はそう言うのと同時に戸を激しく叩いた。正気じゃないと思つた。酔っているのもまた違う気がする。酷く戸惑つたが、隣近所の眼を気にしたおせんは、宗治を入れてやることにした。

「開けてもいいけど、明日も早いからすぐに帰ってくれる？」

「分かつてるよ、おせんちゃんの顔が見たいだけなんだ」

「乱暴なことしないでね、宗治さん」

「大好きなおせんちゃんに乱暴なんてするわけないだろう」

その言葉は、おせんの背筋を寒くした。宗治が嫌いなわけではないが、男として意識したことなどない。あの夜の酒屋での出来事だっ

て、酔った勢いで吐いてしまった言葉であつて、宗治の方も、遊びを愉しんでいるだけだと思つていた。まさか本気で、小梅を引き受けて、おせんと所帯を持つなどと考えているとは、露とも思わなかつたので、今夜この時まで、宗治のことは頭から抜け落ちていたのが正直なところだ。

「今、開けるわね」

心張り棒を外す指先が震えていた。掌にしつとりと掻いた汗を股の辺りで拭いてから、棒を外した。その棒を左手に握つて背後に隠すと、板戸を開けた。すぐに宗治の胸が土間に入り込んできた。恐怖を感じた。宗治は後ろ手で勢い良く戸を閉めると、心張り棒を探るような手付きでおせんの腕を引き寄せた。おせんの躰は固定されたかのように硬くなつた。すぐに開けてしまったことを後悔した。死の恐怖さえ感じた。宗治に、おせんを氣遣う様子はない。荒つぽく、おせんの手から棒をひつたくると、素早く心張り棒をかつておせんを抱き寄せた。背が高く、胸板の厚い宗治の胸に、おせんの顔は埋まつて息苦しいほどであつた。

「宗治さん、痛い……」

「じゅめん」

宗治は急に照れくさくなつたのか、顔を背けておせんを引き離すと、上がり框に腰を下ろし、膝頭に腕を乗せ、絡めた指先を見つめた。

「親に勘当されちまつた……」

宗治はつぶやく様な声で言つた。

「勘当されたつてどういふこと？」

おせんは突つ立つたままで聞いた。抱き寄せられた時に乱れた前を合わせ、後れ毛を撫でつけた。

「おせんちゃんと一緒にになりたいって言つたら、あんな……とんでもないつて騒ぎ出して……」

宗治は言い難そうに、どもり、どもりそう言つた。月を隠していた雲が動き、茶の間の障子の隙間から射した、白い月明かりに浮か

び上がった宗治の容貌は、おせんが一瞬、息を飲むほど様変わりしていた。頬がそげ落ち、蒼白く血の気を失った肌は荒れているように見える。口の廻りを、それまで見たことのない吹き出物が痛々しく覆っていた。

「あたしのこと話したの？ 酌婦をしていたこと……」

うんと、宗治は首を落とすとした。

「正直に全てを話した上で、おせんちゃんのことを受け入れて貰いたかったんだけどな、うちの親が、ああも下らない体裁を気にするとは思いませんでしたよ」

宗治は言い終わると、フフフと、悲しい笑い声を立てた。親のないうちの子や、貧乏な家の子に食事や衣服を提供して、町の人から敬われている両親を、宗治はいつも自慢していた。まさか、おせんの過去を聞き、そのことを理由として、おせんを拒否するとは想像しなかったのだろう。宗治の両親と面識のあるおせんとしても、宗治の狼狽は当然のようにも思えたが、それでいて、息子の将来を思う親心は充分、理解できるものだった。

おせんは軽くうなずいて、宗治の隣りに腰掛けた。さっきまで抱いていた、宗治への恐怖に似た感情は薄れていた。長い脚の中に上体を埋め込むようにして頂垂れる宗治が惨めで哀れだった。

「宗治さん、あたしとのことはもう……」

そう言ったとき、宗治が顔を上げておせんを見た。すぐに宗治は視線を外したが、真横から近づいて見ると、宗治の眼の下には、隈ができ、眼だけが大きな二つの空洞の様に見えた。何がここまで宗治を追い込んだのか、おせんは記憶を手繰るようには考えてみた。膝を抱き込んで考えあぐねていると、宗治がいきなりおせんの肩を掴んで押し倒した。おせんは激しく抵抗したが、男の腕力に屈服した。普段の宗治からは想像もできない力で組み敷かれ、どうにも身動きがとれない。口を吸われまいと必死で顔を左右に振って逸らせたが、声を出して人に助けを求めることはできなかった。そんなことをしたら、宗治はきつと死ぬだろうと思ったからだ。

「宗治さん、こんなことをしてもだめよ、もっと悲しくなる」

引き裂くように開かれた胸に顔を埋められた時、漸く言葉を発することができた。

「ごめん……」

激しく胸元をまさぐっていた手や、唇の動きが止まり、宗治は両腕をおせんに絡めるようにして抱き締めると、躰の重みを預けたまま泣きだした。四半刻ほどそうしていたが、ふいに何か吹っ切れたように宗治は上体を起こした。

「おせんちゃん」

以前のようなやさしい声音で宗治は言った。

「俺ではだめなのはなぜかな……それだけ聞かせてくれないか？」
涙をすすり、僅かに上を向いていた。頬を伝う涙の筋が、月明かりに光って見えた。おせんも躰を起こして衿や裾を掻き集めると、宗治の少し後ろに膝を折って畏まった。

「長吉のことが忘れられないのかい？」

宗治は振り向くと、床に片手をついて、おせんの表情を注視するように見つめた。

「あんな好色な男が好きなのか、あんたの過去に拘り、自分は浮気を繰り返す癖に、おせんちゃんが、たつた一度、俺と酒を飲みに行ったことが赦せないと喚き散らすような度量の小さな男に、おせんちゃんはまだ惚れているというのかい？」

宗治の声は、穏やかに室内に響き渡った。言われたことは尤もだと納得したが、長吉には、長吉にしか分からない拘りがあのだろうと思っっている。親方を殴り飛ばしてまで、自との生活を選んでくれた長吉に感謝している。赦されることなら、また元の暮らしに戻りたいと心から願った。

おせんは、涙を流しながら宗治の質問に応えた。

「小梅がいるからね……」

おせんは、宗治を傷付けまいとした。長吉と別れられないのは、長吉を未だ愛しているからではなく、小梅を捨て切れないのだと、

宗治に説明して聞かせた。宗治も納得したような笑顔を見せた。

「そうか、小梅か……」

悪かった、家に戻ると言って、去って行った宗治とは、その後、顔を合わせたことはない。風聞さえ聞こえてこなかった。

「おせんちゃんに、いい話があるんだね」

得意先を巡っていると、こういう話しはしょっちゅう持ち上がった。呆れたことに長吉が家を出て半月もしないうちからこういう種類の、いわゆる見合い話は、どこからともなく沸いて出た。今日もまた、同じ言葉を囁かれた。つき屋のおかみ、おこつからである。「独り身になつて一年も経つんだからさ、そろそろ誰か新しい人と所帯を持ったらどうだい。おせんちゃんだって、もう二十六になるんだろつ、あつという間に姥桜だよ」

「はあ」

「それともあんた」

おこつは、幾分肉付きの良くなった腕を廻して、おせんの腰の辺りをぽんと叩いた。

「動かないで下さいね」

おせんは呆れたように言った。

「はいはい。あんたまさか、まだあの亭主に未練があるんじゃないだろうね。酒飲みの女たらしだったんだろつ、噂だよ。いまはどうか知らないけどさ、やめときな、ろくなもんじゃないよ」

「ええ」

おせんの溜息のような相槌も、氣遣いという言葉とは無縁のおこつは気が付かないらしい。続けて早口で捲し立てた。

「浮気もんの分際で、女房が男と酒を飲んでいただけで三行半を叩き付けるなんてねえ、酷い話だよ。聞いたことがないよ。何考えているんだろつねえ、娘まで奪つてさあ。あたしゃ赦せないね、あなたの前の亭主」

「三行半……」。

鬚を結うおせんの指先が止まった。両手をおここの頭の上に置いたままで、茫然と、鏡に映る自分の顔を見ていた。

「おせんちゃん、どうしたんだい？」

「おかみさん」

「ん……？」

おせんは腰を落とすと、膝でにじつておここの横に座り、おここの、ぼによぼによと肉付きの良くなった手を握った。

「だめですおかみさん」

「なっなんだよ、いきなり」

「あたし、まだあの人の女房なんですもの」

「今までなんで気付かなかつたのだろう。」

おせんは自分の馬鹿さ加減に涙を流していた。涙といつても悲しい涙じゃない。未だに長吉の女房だということが分かった歡喜の涙であつた。おせんは道具箱を胸に抱え、一目散に海辺大工町を目指して走つた。しかし高橋にたもとに差し掛かつたとき、おせんの足は速度を緩めた。この橋を越えれば、長吉と小梅の住む町はすぐそこにある。

「でも……。」

と、弱気な妄想が胸を支配した。ここはお前の来るところじゃないと、無下に追い返されるかも知れない。もしかしたら、もう新しい女がいる可能性だって充分ある。馬鹿みたいにはしゃいだ自分が急に惨めになつた。

小梅。

心でつぶやき、小名木川の向こう岸を見つめた。渡りたい、しかし、この緩やかな勾配は、渡つてはいけない気がしてきた。川の向こう岸に見える町並みは、おせんが入つてはいけない領域なのかも知れない。呑気な長吉も、三行半のことなどすっかり忘れていただけで、おせんに会えば、「おうおう、しまったな忘れてた。すぐに書くから待つてな」なんてあっけらかんと言うんじゃないか。

「あり得ない話しではないな。」

迷子のように、小さな橋の、欄干もない橋板に蹲って川面も眺めていた。時折、通りすぎりる人に奇怪な眼で見られていることは気付いていたが、人が自分をどう思うことなど気にしている心境ではなかった。川の流れは緩やかで、翡翠色の水草が川底で揺れていた。柳や、桜の梢が水面に映り込み、さらさらとした水の流れに反射して、鮮やかに光り輝いて見えた。眼を上げると、大川を行き交う数隻の舟が、煌めくしぶきを上げている。夕暮れ時になれば、両国の花火を見に行く人々を乗せる舟が通るのだと思うと、昨年の悪夢のような出来事が鮮明に、おせんの脛に浮かんできた。

「おばちゃん道具箱が落ちるぞ」

馴れ馴れしく話しかける声がある。おせんの躰が石のように固まった。

「聞こえねえのかな？」

「……………」
親しんだ声だった。懐かしさに、おせんの心が温まっていった。膝をきつく抱き込み、脛を閉じた。

「しばらく会わねえ間に、顔だけじゃなくて耳まで悪くなったか？」
「……………」

相変わらず、口の減らない男だと思いながらも、腹は立たなかった。もっとそうやって憎たらしいことを言い、一年の空白を埋めて欲しいと思っていた。

「顔、頭、耳、悪いのが三拍子揃っちゃったな」

嬉しさが込み上げたが、おせんはこの一年で後ろ向きな性格が身についてしまったらしい。再会の嬉しさよりも、長吉の、いまの生活を覗くことへの恐さが先立って、なかなか顔を上げられないでいた。

「おせんさんよう、久しぶりだな」

隣りに腰を屈めた長吉が、肩を軽くぶつけてきた。違和感と、喪失感に襲われた。長吉が、おかめではなく、おせんと呼び、しかも

おせんさんと敬称までつけてくれたからだ。「少し痩せたか、ん？」
前を向いたまま膝を抱いて固まるおせんの後れ毛を、長吉は、馴れた手付きで撫でつけた。ふと袂から白粉の匂いが香ってきた。おせんは泣き笑いをして顔を、膝と胸の間に押しこんだ。

「どうしたおせん、小梅に会いに来たんじゃないのかい？」

「ええ」おかめと呼んで欲しいと思ったのは初めてだ。

殆ど消え入りそうな声でおせんは答えたが、首は横にふっていた。
「どっちだよ、一体、会いに来たのか、そうじゃねえのか？」

長吉は笑いながら言った。

「どっちもよ」

おせんはうつむいたままで答えた。やっと目を開けることができた。横目で、隣りを見ると、長吉の足の先が見えた。見覚えのある雪駄を履いていた。お鶴の部屋にあった雪駄だと、すぐに分かった。絶望という言葉が、おせんの頭に取り憑いた。

「そうか……」

「小梅はどうしてる？」

小梅の名を口にした途端、胸が苦しくなり、涙で水面が滲んで見えた。泣くのを堪えようとして、喉の奥が痛くなった。

「元気だぜ、お前に会いたがって大変だったが、ようやく最近は夜泣きもしなくなった」

「……」

「おつかあに会いてえとよ、一年たってもしつこい女だぜ、小梅は「あたしも小梅に会いたい……」

とうとう嗚咽を漏らして泣き崩れるおせんを、長吉は胸の中に抱き入れた。噎せるような白粉の匂いも、おせんは気にしないで泣いた。

「悪かったな、お前と小梅を引き離すようなことをしちまってよ。

でも、あのとき、俺はああするしかなかったんだ」

「もういいの」

「それでよ、お前のところに行かなきゃなんねえと思ってたところだ」

小刻みに震えていたおせんの躰がまた地蔵のように固まった。
―去り状だ。

やはり来なければ良かったと、そうすれば、あと少しの間だけでも復縁の夢を見れたのにと、放心するおせんの肩を、長吉は何度も揺すり、大丈夫か？と聞いていた。

一年前おせんを残してすずめ長屋を出た長吉は、唐木職の親方の家を間借りさせて貰っていた。親方には子供がなく、狸のような風貌には似合わない、美人のおかみさんと二人暮らしだった。共に五十は優に超えた老夫婦だが、長らく不仲だった長吉の訪れを喜び、厚遇してくれた。おかみさんなんかは、小梅の小袖の布地を買い込んだでは、一月という短い期間に四着も縫いあげてしまったほどだ。「遠慮をせずに、もう少し居ればいいのに」という言葉をはね除けて、親方の家を出て来た理由は、親方のおせんに対する酷評を聞いていられなかったからだ。おせんとは、嫌いで別れたわけじゃない。最初は堪えてきたものの、

「俺のいうことを聞いてれば、こんなことにならなかったんだ」とと、おせんが生んだ小梅を、まるで、でき物のように一瞥したのには憤った。親方が、一体、何処で、どういう風におせんを知ったのか、おかみさんの前で、ぶちまけてやりたい気持ちにさえなった。しかしそれは、おせんを尚更、汚すことになる。「ご高慮に感謝します」とだけ言って、親方の家を出た。新しい住み家が決まっていたわけじゃない。親方を通して請け負った注文が多く、それらを仕上げるのに手間取り、思うように家捜しが出来なかった。

家なしの父子が当てもなくふらふらと町を歩いていると、相生町のあたりで、ある女に出会った。秋だというのに、夏日のような強い日の照りつける日だった。その女は無地の舞踊傘を日傘代わりに差し、白い呂の着物を粹に着こなしていた。緋色の手巾で額の汗を拭いながら、瀬戸物屋の軒先で、ありとあらゆる商品を手に取って眺めていた。女はお鶴である。長吉はそっと、廻れ右をして逃げよ

うとした。が、後ろから、「長吉さ〜ん」と背筋も凍る声が追い掛けてきた。それでも無視して歩いていたら、「もう、待つてよ長吉さん」と大声で呼び掛けるものだから、人目を気にし、仕方なく振り返った。

「よっ」

「うん、もう、つれないんだから」

お鶴は派手な手巾をひらひらと揺らして駆け寄ってきた。知らない仲じゃあるまいしと、と、芸者のような手付きで長吉の袂の端を掴んで躰ごとくねくね揺らし、それに飽きると今度は、長吉の手を取って弄び、日傘を小脇に抱えると、指先で長吉の胸に何かをなぞり、「もう、どうして会いに来てくれなかった」と、若い娘がするように足を踏みならして、頬をふくらませた。これをもの一分足らずで全て遣って退けるのだから、長吉も、幼い小梅もあんぐりだ。「家を出たんだって、嬉しい」

仕草とは異なる酒焼けの声を甲高く上げて喜んだと思ったら、腰をかがめて小梅に挨拶をした。忙しい女だ。

「ここじゃ暑いわよね、ささ、どこかで心太ちんたでも食べましよう」

小梅はお鶴を酷く警戒したように長吉の脚を抱き込んだ。その脇から顔だけひよっこり付きだして、見知らぬおばさんを睨むような目付きで覗き見た。

「小梅ちゃんでしょう。おばちゃんを怖がらないで」

お鶴は、いやがる小梅の手をむりやり引っ張って歩き出そうとした。

「おいおい、そんなことしたら、こいつはもっと怖がるぜ」

そう言いながら、長吉はどうにかこうにか、小梅を助け出し腕に抱いた。

「それよりお鶴さんよ、俺が家を出たこと、それに、こいつが小梅って名、何で知ってるんだ？」

「風の噂だよ、気にしないで……」

「風……うわさ？」

「気にしないでって言われてもな。」

疑念に思っていたことを、やっと聞き出した時、長吉たちは、回向院境内の水茶屋にいた。お鶴がどうしても回向院でと言うので仕方なく寄ったのだが、回向院は、おせんのみならず長屋と、土壁ひとつ隔てただけの場所にあり、まだ一緒に暮らしているとき、小梅を連れておせんはしょっちゅうここに参詣に来ていた。

「ここは良くねえな。」

漸くその事に気付いたのは、小梅が、心太ではなく、みたらし団子の餡で、顔中べとべとにした時だった。おせんはこれがいやで、串から団子を全部取って、皿から一つづつ小梅に突きさせて食べさせていたことも思い出した。

お鶴の無駄口を聞きながら甘酒を飲み、ふと小梅に眼を落とした時はぎよつとした。どういふ食べ方をしたらこうなるのかと、首を傾げたくなる程、小梅の顔が汚れていたからだ。餡のついた皿を舐めている小梅を叱り、後ろから抱きかかえ、小梅を手水舎まで運んだ。手と顔、それに前髪までもがべとべとに汚れていたので丁寧に洗っていると、その背後から、お鶴が話しかけてきた。娘の前で、しかも回向院で、お鶴に寄り添って欲しくない。かなりうつつしい気分になりながらも、お鶴の話しに耳を傾けたのは、お鶴が、「実は、あんたの女房と会ったことがあるんだ」と悪ぶれた風もなく言っただからだ。

お鶴の家で女中をいっている若い娘がいるのだが、その娘に指示して、長吉のことを調べさせると、おせんという名の女髪結いが長吉の女房だということがわかり、おせんが、つき屋のおかみと昵懇だとも知り、好奇心の湧いたお鶴は、悲しい小芝居をしてまで、おせんを自分の家に呼びつけた。その後の詳細を聞きながら、長吉はお鶴を殴りたい衝動を必死に抑えた。そんな長吉の心情はお鶴に通じたらしく、お鶴は珍しく萎れたような顔になっていた。元も小柄で細身のお鶴がしょんぼりと頭を落としたのを見た時、悪人はお鶴ではなく自分なんだと悟った。別れ際、お鶴は、

「長吉さんとはもう二度と会うことはないね、身勝手なようだけど、あたしのはきっぱり忘れておくれな」

と、さっぱりとした口調で言った。お鶴とは、それきり会っていないが、しばらくして、お鶴の元で働く娘が、親方の店まで雪駄を届けにきた。それを親方から受け取った時、気の強いまなこを伏せ、強張った笑顔を見せたお鶴の去り際の姿が思い出され、長吉は、物悲しさを覚えた。涙が落ちる前に躰を翻し、手に下げた舞踊傘を差すことも忘れたように、小走りに、まだ日差しの強い町中へと去って行ったお鶴の哀愁が、痛い想い出となって、長吉の心に突き刺さった。

回向院でお鶴を見送ると、長吉はとてつもない罪悪感に襲われた。二人の女が、長吉の知らない空間で、涙を流していたことに、全く気付くことなく、一人戯れていた大馬鹿者

だと、自分を散々罵った。回向院から小泉町へ出て、武家屋敷の下見板張りを望みながら歩いていると、右手に、かつておせんと暮らしたすずめ長屋の粗末な板壁がある。長吉は、首が左にしか廻らない人のようにして、小梅にいろいろと話しかけていたが、板壁の向こうから、聞き慣れた子供達の笑い声や、掛け声が聞こえてくると、それまで、若く凛々しい容姿を持った武家屋敷の門番に眼を釘付けにしていた小梅がふつと板壁に振り向き、長吉の手を強く引いた。

「なんだ、小梅つかれたか？」

長吉はわざと小梅の訴えに気付かぬふりをして、手をこちらに引き戻して歩こうとしたが

「ちゃん……おっかあ……」

小梅は両手で長吉の手を握りしめ、足を踏ん張って首を振っている。その手が熱かった。そろそろ昼寝の時刻なのだ。眠くなると小梅はぐずりだす。長吉は、小梅の要求には答えず歩き出した。すると小梅が手を離し

「おっかあ……おまんま……」

と、叫び出した。小梅は三つだが、言葉の発達が少し遅いような気がする。こましゃつくれた同年代の女の子に比べ、発する単語の数が極めて少ない。長吉は速度を緩めずに歩き続けた。

「うっ……うっ……おっかあ、おまんま」

長吉が、小走りで追い掛けてくる小梅の声に振り向く刹那、小梅が転んだ。運悪く、昨夜、降った雨でぬかるんだ水溜まりの手前で転んでしまったようだ。両手を差し出して走ってきたのだろう。地に手を付くこともなく、小梅は腹から水の中に落ちていた。

「小梅、大丈夫か？」

駆け寄ると、ぶはーっと息を吐いて小梅が顔を上げた。口から泥水が流れ出し、凄顔になつてる。

「なんで、わざわざ水溜まりの手前で転ぶかねえ」

小梅は当然、火が付いたように泣きだしたが、抱き上げた長吉ではなく、おっかあと、と、すずめ長屋の傷んだ板壁を指さして泣き叫ぶものだから、惨めな長吉の眼も潤んできた。住むところどころか、小梅に昼寝をさせる場所も探せないでいる己の不甲斐なさと、泥だらけになった娘が不憫だったし、生まれ育った江戸を、こつも寂しく、無情に感じたことはない。しかし長吉にはまだ実家という最後の砦がある。身寄りのないおせんは、然も、心細い思いで暮らしているのだろうと思つと、小梅と一緒に、声を出して泣きたいくらいであった。

ーいま引き返せばまだ間に合う。

そう思つたとき、人の良い風采をした男に声を掛けられた。亀沢町の裏店に住む魚屋の佐介だった。その縁で、長吉は亀沢町に住むこととなつたのだ。

すずめ長屋と眼と鼻の先の亀沢町に住み始めてから、長吉は、たびたびおせんの姿を眼にしていた。といつても偶然ではなく、雨降りを狙つては、おせんが仕事に出掛ける時刻を計って待ち伏せた。蛇の目傘で顔を隠し、相生町の角で、道具箱を抱えたおせんが通り

過ぎるのを待つのである。そういう時、小梅は、佐介の女房のお吉に預けて出た。貧乏所帯なのに、二十二を頭に子供を十一人も産んだお吉は、四十すぎの痩せた女だが、亭主同様、人が良くて子供好きだ。安心して預けられたし、小梅も喜んでお吉の二歳になる末子と遊んだ。

これまでおせんが、長吉の待ち伏せに気付いて振り返ることは一度もなかった。理由はおせんの段取りの悪さである。出掛ける寸前になるとおせんは決まって、あれがない、これがないと騒ぎ出す。なのでいつも刻限ぎりぎりになって、慌てて家を出るといふ始末だ。雨の日などは傘を片手に高く持ち、短めの丈に着付けた小袖の裾を蹴るようにして、脇目を触れず走って行く。長吉は、おせんの下駄が遠くなるまで、じっとおせんに背を向けていた。通り過ぎたのを確認してからそっと傘を上げて快活な、おせんの後姿を見送り以前と変わらない様子に安堵するのだ。

所帯を持つ前のおせんは、長吉にとつて、その名を聞くだけで動悸が高まり、食事もできず、痩せ細るほど胸を焦がした女なのである。そんな憧れのおせんと一緒にいながらも、好色な長吉は浮気を度々繰り返した。だからといって、おせんに飽きるわけではない。時たま、他の女の肌に触れるからこそ、おせんへの愛情は絶えないのだと、長吉は身勝手な持論を持っている。歪んではいるが、長吉はおせんを愛していた。そして母となった女は聖母だと崇めた。その聖母か、菩薩か知らないが、心の広い女房は、長吉の浮気は必ず赦す。母となった女は、妻と母、この二つの顔しか持つてはならないと信じ込んでいた。ゆえに、宗治とのことが赦せないのだ。

長吉は、おせんの過去を探ったことがある。それは昨年夏、おせんを置いて家を出てから二月ほど経ったある日のことである。長吉は、小梅の手をひき、時には抱いたり、おんぶつたりして、自分と出会う以前のおせんの生活を追ってみた。いずれ夫婦が遣り直すとしても、その前に、おせんのことを、充分に知っておきたいという気持が働いたからだ。おまず手初めに、長吉が訪れたのは、おせ

んが努めていたという花町の料理屋だ。大店ではないが、派手な造りの店で、裏では女中に淫売をさせているという噂の店だった。親方からこの店の名を聞いただけで、長吉は親方を殴るべく拳を堅くしていたので、この店の裏家業は有名で、殆ど淫売宿と変わらない店だということを知っていた。

長吉は店の裏手に回ると、勝手口の外で、大きなたらいの前に屈み込み、一抱えもありそうな菜を洗う年寄りの女中に手招きした。最初、女中は怪訝な目付で長吉の上から下まで眺めていたが、小粒を握らせると、躊躇はさつさと捨て、梅干しのようにしぼんだ口を開きだした。

長吉は、人目を避けるように路地の奥まで女中を連れて行くと、おせんが働いていたと思われる時期、年格好などを説明した。

「ああ、お夕ちゃんね、間違いない、それはお夕ちゃんだよ。確かあの子がここへ連れられてきたときの名はおせんだったと思うよ」

「本当か、婆さん。人違いじゃねえな？」

「あたしゃ、歳はくつてるけど、記憶だけは自信があるんだよ。そうそう……」

女中は長吉の足に絡みつく小梅に眼を落としたりした。

「この子のような、大きな切れ長の目をしていたよ。ほらっ、こうやって、初めて会った人を睨むように見るんだよねえ。娘かい、お夕の？それじゃあ、あんたはご亭主かい？」

女中は皺だらけの顔に薄気味悪い笑みを浮かべると、親指を立てて見せた。

「あっああ……そうだよ」

長吉は小梅に飴を渡し、近くにあつた酒樽に乗せた。

「お夕のことならなんでも聞いとくれ」

と、前のめりに曲がった背をむりに仰に反らせて、自信ありげに言った女中は、いまでこそ老いばれだが、昔は売れっ子の酌婦だったと自慢気に語った。そのあと、漸くおせんの話をしてくれた。

女中によると、おせんは、十五の時、この料理屋に奉公に上がった

た。おせんは多くを語るのを嫌がるが、店のおかみから伝え聞いた話しによると、おせんの実家は神田。親は裏店で草履屋を営んでいたらしい。おせんは四人弟妹の長女で、弟の誕生までは一家の暮らし向きは悪くなかったらしい。贅沢こそはできないが、親子は慎ましく、笑い声が絶えなかつたと、裏店の中でも評判が良かった。しかし弟が、二つころから胸を患い、時に発作を起こすほどの病弱で、暮らしは一転、苦しくなるばかり。医者にかかるたびに借金が嵩んでいった。

悪いことは続くもので、働き頭の父親が卒中で呆気なく逝つてしまつと、次女、三女の二人が瘡瘡を煩い続けて死んだ。残つたのは母親と病身の弟だけだったが、高利貸しの取り立ては容赦なかつた。弟や、妹たちの薬代や、往診代で、莫大な金を借金していたので、もう首でも括ろうかと、神経衰弱になつた母親が、常にそう漏らす有様だ。そんな時、高利貸しから、長女のおせんを本所花町の一倉という店で働かせたらどうかと、殆ど脅しに近い態度で説得された。おせんの母親は、一倉のよからぬ風聞を耳にしていたので、凄じい剣幕で断つたが、居間と寝部屋を隔てる襖に、耳を側立てていた当のおせんが、親と弟のためならと、母の居ぬ間を狙つて来た高利貸しに、一倉へ行くことを承諾したのである。もちろん当時のおせんには、一倉がどの様な裏家業の店なのかは知らないが、十五にもなれば奉公に出される友達も多い中、自分だけ着物の仕立てや家事だけして、のうのうと暮らすのは、どうにも不孝であると考えた。おせんは自分を可哀想だなどと思わなかつた。果たして十五の春に、一倉で働き出したおせんであったが、始めは当初の約束通り、洗い物や仕込みの手伝い、店の掃除などをするのが仕事だった。鼠の這う狭い女中部屋や、辛辣な労働も苦と感じなかつた。しかし三月が過ぎた頃、「良い人だから」と、先代から一倉で馴染みの呉服問屋の主、美濃屋甚兵衛という五十代の男の相手をさせられたのだ。

「その時、お夕は生娘ではなくなつたのよね、かわいそうに、まだ十五だよ。激しい雨の音さえ掻き消してしまつような大騒ぎでね、

部屋の中で、ばたばたと逃げ惑うお夕の足音や、衣桁が倒れ、物の壊れる音、それにね、いちばん耳を塞ぎたくなつたのは、おかみさん助けてと泣き叫ぶ声だよ。あの子まだ、自分の立場を理解していなかったんだろうね。ずっと泣いてたらしくてね、眼を真赤に腫らして、美濃屋の寝ている部屋から這い出て、帳場のおかみさんの膝に顔を埋めて、美濃屋の檀那に痛いことされたと訴えていたよ。あの娘の処女を売つたのは、何を隠そう、おかみさんなのにさ。湿つた雨が降っていてね、薄暗い、いやな感じの朝だったよ」

「……」

そう言つて女中は身震いすると、莖をふかし、鼻から思い切り煙りを出した。

おせんを一晚で気に入つた美濃屋は、おせんに他の男の相手をさせるのを惜しがり、数ヶ月後には、百両という大枚を叩いて身請けした。

「入江町に家を借りて困つたんだよ。あの子、美人じゃないけど、妙な色気があるだろう。肌なんて雪のように白くて、きめ細かくて、素人臭さがいいと、客の評判だったからさ、身請けの話しを、おかみさんは随分いやな顔をしてたけどね。美濃屋は上客だしさ、眼の前の金にも未練があるしで承諾したんだけど、金を受け取つてからも。あんた、引き取られるまでの五日ほど、商用で江戸を出た美濃屋に内緒で客の相手をさせていたんだから、がめつい人だよ。まあ、その時にはお夕も諦めて、文句も言わずに、客の自由になっていたけどね……あら、あんたお夕の亭主だったね、ごめんなさい」

十年前のおせんの泣き声が、この大層、派手な店の奥から聞こえてきそう、長吉は無意識に耳を覆っていた。女中が一倉のおかみから聞いたおせんに関する情報はここまでだった。そこで長吉は今度、おせんが困われていたという入江町を訪れた。驚いたことに、おせんの暮らした家は表店にあった。外から眺めただけで内部は分からないが、外観からすると、二階の縁側から見て、往來を越えた真向かいに流れる大横川を眺められると思われる。向かつて左

の堀沿いには、大河内、織田、岡部土佐守のお屋敷が建ち並んでいた。日差しが燦々と差し込む明るい妾宅だった。

長吉は周囲を見渡した。そしておせんの暮らした表店が軒を連ねる隙間にひっそり建つ、割長屋の木戸から路地の奥へ眼を細めた。表店の連中は口が堅い。ここは一つ、路地裏の人間に話しを聞く方が容易いと思つたのである。

「おつ、あれがいいや」

奇声を上げて横切る子供達の群れに、転ぶんじゃねえぞと声を掛け、少し進むと、目星を付けた女を遠くから眺めた。その女は、路地の、突き当たりに設けられた物干し場にいた。痩せた白い腕を伸ばして洗濯物を干している。長吉は、女房衆が固まる井戸端を、ここは珍しく美人揃いだなあと、愛想を振りまいて通り過ぎた。女房たちも悪い気がしないようで、初対面の長吉を目で追ひ、互いに見つめ合つてくすくす笑つた。陽当たりの良い、その物干し場で小梅を下ろした長吉は、

「小梅、あのおばちゃんのところまで走りな、飴をくれるぜきつ」と、背中を押したので案の定、勢い余つた小梅はすつ転んだ。

「あらあら、大丈夫。どこの子だろうね？」

緋色の湯文字を干す手を休めず、女はちらと小梅と長吉を見た。

「あんた、この子の父親かい？」

「ああ、そうさ」

泣きべそを掻く小梅の膝小僧の砂を払ってやり、袂から出した飴を舐めさせると、長吉は、とびきりの笑顔をその女に向けた。それまで、日の光りが眩しいのか、眼を細めていただけの女も笑顔になった。前垂れを外し、後れ毛を撫でつけながら、長吉の膝に尻を乗せて座る小梅の前に屈んだ。年増だが、腰のくびれた色っぽい女だった。

「見掛けない顔だけど、空き家でも探しているのかい？うちの隣り、空いてるよ」

女は品を作り流し目を送った。長吉は慌てて手を振って、

「いやつ、そうじゃねえんだ。ちょいと尋ねたいことがあってね。あんた、ここは長いのかい？」

長吉が、家を探してないと知って、その女は少し気落ちした表情を見せたが、すぐに、そうだよ、もう十年は住んでるねえと言った。長吉は、友達のかみさんの話だということにして、おせんの話しを聞き出した。

おつゆは、表店のおせんのことを良く知っていた。なんでも子供好きなおせんは、暇を見つけては裏店の子供たちと遊んでいたらしい。おつゆの子供も良く遊んで貰っていたと言っていた。おつゆは声を弾ませながら、おせんに関して知ってる限りを話した。そこでもやはり名はお夕だった。

その頃、おせんは、美濃屋からの手当の、その殆どを実家に送っていたらしい。日当たりの良い二階造の家や、鮮やかな小袖、頭の上の飾りなどを美濃屋に買って貰っていても、おせんが、自分のために散財するような素振りにはなかったと言う。美濃屋は年寄りだが優しい人だと、おせんは常々話していたらしい。美濃屋は、40も歳の離れたおせんを宝物のように扱い、体調の悪い時などは、一流の医者呼んで、全快するまで、足繁く、日に何度も通い、自ら看病した。

だが、そんな穏やかな日々も、たった半年で幕を下ろす。本家と若い妾の家を往復する生活が祟ったのか、おせんの家で晩酌を愉しんでいる時に、美濃屋は心の臓の発作で倒れ、そのまま帰らぬ人となったのだ。

「やくざもんに身請けされたんじゃないなかったのか。」

先程からの疑問に、長吉は首をかしげた。おせんの檀那、美濃屋甚兵衛の葬儀が終わると、おせんを、一刻も早く放り出したい美濃屋の本妻や、跡継ぎ息子が、時を移さず押し掛けてきて、早く出て行けとおせんに詰め寄った。引越の期限を一月と定められ、美濃屋との関わりを一切断つという証文に、血判付きの署名をさせられたおせんが、神田の実家に帰ろうか、それとも次の働き口を探そうか

と思案していたところに、神田に住む親戚から一通の手紙が届いた。訃報だった。これまでどんなに困っていても、何の助けもしてくれなかった母親方の叔父の手紙には、半月前、母親が弟の首を絞めて殺し、自身も居間の天上の梁に引っ掛けた紐で、首を括って死んだと書いてあった。遺書らしきものは見当たらないが、一向に回復の兆しを見せない息子の行く末と、困い者として暮らす、おせんの負担を考え、生きること悲観したのだろうと、叔父の文は推測していた。

「遅すぎる。報告が遅いじゃないかと、泣き喚くおせんの声は、裏店にまで響いてきたらしい。」

葬儀も済ませてあると、墓の場所だけ報せてきた手紙を、行燈の火で燃やしたおせんは、それから三日後、美濃屋と過ごした家を出た。

その後一月ほどして、おせんがひよっこりおつゆを訪ねて来たらしく、入江町を出たのちの生活も、おつゆは知っていた。

おつゆによると、家を出たおせんは、柳原町の旅籠で二日ほど寝泊まりしていたらしい。そこで、彦五郎とかいう男と知り合った。

「彦五郎？それがやくざもんか？」

長吉は顎に出来た吹き出物に触れながら考えた。

「それ、あんまり触れない方がいいよ」

おつゆは細い眉をしかめると、話しを続けた。美濃屋が五十代の年寄りだったのに比べ、彦五郎は、二十代の優男である。おせんとは五つほど歳が離れていたが、背が高く、胸板の薄い体型が、どこかおせんを可愛がったあの美濃屋を彷彿させたらしい。半年、美濃屋に通い詰められているうちに、おせんの中にも美濃屋への情のよくなものが芽生えたのだろう。親、弟妹を失った悲愴の渦に飲み込まれていたおせんは、そう迷うこともせず彦五郎を受け入れた。

「それがね」

おつゆは長吉に茶を差し出しながら、手招きのように手を振った。話しが長くなり、いつの間にか長吉は、おつゆの家に上がり込んで

いた。外は日差しがきついかからと誘われたのだが、井戸端の女房衆が怪訝な目付きで長吉やおつゆを見ているというのに、おつゆは気にしていない様子だった。表店に囲われていたおせんとは気が合うが、裏店の女房衆とは、上手くいってないように見受けられた。おつゆもまた、人には言えない過去を抱えて生きているような気がした。

小梅に、貰い物だという饅頭をあげたおつゆは、満足そうな顔で長吉に向かい合った。

「彦五郎とかいう男と一緒に住み始めてから知ったらしいんだけどさ、その彦五郎、前の、ほれ、死んだ檀那の次男だったっていうから驚きだよ」

「次男、……っていうと……檀那とは親子かい？実の？」

長吉は言葉を失い固まった。おせんが、躰を売っていたという事実を知った時は絶望したが、まさか親と子で交わるとは。あまりにも衝撃的だった。

「そういうことになるね、お夕ちゃんもその点は悩んでたよ」
「……」

「家業を継いだしっかり者の長男に比べて、次男はごろつきでね、職にもつかず、遊興に耽り、賭場にも出入りして性質の悪い連中との付き合いがあったっていうから、どうしようもないね」

「それが、なんでおせん、あついや、お夕と知り合いに」

「檀那の親父さんが存命の頃から、お夕ちゃんを囲ってることは、家では相当、問題になってたらしくてね、大変な騒動になったらしいのよ。それでも、お夕はかわいい、手放したくない。女房はきついで、意固地になった檀那は、お夕ちゃんと別れようとしなないでしょう。父親が見初めた女を一目、見てみたいと、ある日、彦五郎がね、出掛けた親父の跡を付けたらしいのよ」

一気に話して口が乾いたのか、そこまで言うと、おつゆは茶をすすった。長吉も湯飲みを取ったが、飲まずに掌で温めている。おせんの男が登場するたび、胸を鉛のようなもので叩かれる思いがして

いた。おつゆは大きな溜息をついてから、肩の力を抜いた。

「檀那を見送りに、玄關まで出てきたお夕ちゃんに岡惚れした彦五郎はさ、ほれ、お夕ちゃんて肌がきれいでき、男好きする顔だろう、なんか弱々しいっていうか、顔が寂しそうな……」

「泣きべそ顔」

「そうそう、それ、泣きべそ顔。あんた上手いこと言うねえ」

「いやあ……」

長吉は褒められたことに満足し、おつゆは手を叩いて笑った。

「それから何度となくお夕ちゃんの姿を陰から見ているらしいよ。機会を窺ってたんだね、きつと、あたしはぜんぜん気付かなかったけどさ」

おつゆはひらひらと手を振って笑った。何が可笑しいのか、長吉にはちつとも分からなかった。

「なんの機会を窺ってたんだい？おせん、……」

長吉は首を振った。見ると、おつゆが意味深な笑みを浮かべている。長吉が嘘を言っていることが知れたのだろう。そんな目付きをしている。しかしおせんの名を出すわけにはいかない。三歳といえども、母親の名くらい、小梅だって知っている。

「お夕と知り合う機会かい？」

「そうじゃないよ」

おつゆはまたひらひら手を振った。身振り手振りの大きな女で、さつきから長吉は、何度となく瞬きをしている。

「親父が死ぬ機会さ。お夕ちゃんも言ってたけど、檀那は元もと酒飲みのだったらしいから、そう寿命は長くないと思っていたんじゃないの、彦五郎も」

「……」

饅頭を食べ終えた小梅が、長吉の肩に縋りながら、茶が欲しいのと、耳にささやいた。その時、小梅の口についてた饅頭の皮が、長吉の耳についた。それを、眉をしかめて掌で拭き取っていると

「あらあら小梅ちゃんすごい顔」おつゆが、すぐに台所に下がって、

濡らした手拭いを持ってきた。それで小梅の顔中を吹いてやると、長吉は小梅を、自分の隣りにきちんと座らせた。

「熱いからな」

おつゆが変な具合に気を利かせ、入れ換えた茶を、長吉は口で吹いてぬるくし、こぼさないようにそつと小梅の口に含ませてやった。

「いい、お父つっあんだね、あんた」

「そつでもないよ」

母親から奪い取って、母と子、二人に悲しい思いをさせている。

良い父親でなんかあるもんかと、顔を伏せた。

「そつそつ、それでね……」

おつゆはちろちろつと二間だけの家の中を見渡した。

「誰かいるんですかい？」

長吉は閉ざされた障子の方へ眼をやったが、おつゆは、誰もいないよ、壁に耳あり、障子に眼ありっていうだろう、用心しただけさと、大口を開けて笑った。

「そつか……」

長吉は、自分の背中を背もたれにして寛ぐ小梅から感じる温かさにな堵していた。自分の指先だけで遊ぶ小梅の手を、後ろ手で握りしめながら、おつゆに視線を戻した。

「旅籠に寝泊まりしていたお夕を、彦五郎は誘ったのよ。あたかも偶然を装ってね、しかし彦五郎は遊び馴れた見た目も良い男だろ、お夕ちゃんもころつと騙されてしまったんだね、寂しかったんだよ、きつと」

「二人はどこで暮らしたんだい、どんな風に？」

返事は、長吉が耳を塞ぎたくなるようなものだった。彦五郎は、着の身着のままのおせんを、入江町からほど近い、清水町の自分の借りている長屋に住ませた。二人は昼も夜も殆ど戸を締めきつたまま半月ほど過ごしたらしい。

五十代の父親の方も優しく良い人だったが、その息子の彦五郎は、巧みな話術と若さで、十六になったばかりのおせんを虜にした。

。吸ったことのない煙草も吸うようになり、酒も飲んだ。

「夜具にくるまったまま煙管を煙草盆に叩き付ける仕草など、堂に入ってた」と話してくれたのは、当時のおせんを知る、清水町裏店の家主だった。

あまり長くなる前にと、眠る小梅を抱いて入江町を出たのは、昼過ぎ、名残惜しそうなおつゆに礼を述べ、二町ほど先の清水町を訪れていた。

「お夕ちゃんは彦五郎さんに惚れていたわね。いつも彦五郎さんの腕にぶら下がるようにして寄り添っていたもんだわよ」

それを聞いた長吉は気落ちした。確かにおせんは、その外見から想像できないほど多感な女だ。情も深く小梅ができるまで、長吉と二人、彦五郎とおせんのように、戸を閉めきって過ごした日々がある。小梅を授かり、母親という立場になってからは、そういうことも無くなったが。

「その二人はどうして別れたんですかい？」

「それがね」

家主は、肥りすぎのヒヒのような風貌である。眼の下から頬が、何故か黒ずみ、秋口だというのに雪崩れのような汗を掻いている。長吉は、眼を見張って家主の首を探したが、肉に埋もれ、とうとう見あたらなかった。

自分の家は狭いからと、連れて行かれた自身番屋の茶の間には風が通らず、なんとも言えない汚物のような体臭と、噴き出る汗の匂いが、女つばい話し口調の家主からじわりじわりと放出されていた。

「お茶、飲む」

片眼を瞑り、色目を使う家主の厚意を丁重に断った長吉は、眠る小梅を床にも置かず、腕の中で揺らしていた。置いたら、眼の前に座る巨漢の男に、取って食われそうな錯覚を覚えたのだ。

「ろくでなしっ！」

家主が急に嬌声を上げた。

「へっ……っ？」

「ああつ、ろくでなしって言うのは彦五郎さんのことだね」

「……」

自分も充分ろくでなしの長吉は、こういう言葉についつい反応してしまふ。

「一緒に暮らしはじめて、三月しないうちに暴力を振るうようになったんだよあいつ」

「……暴力」

小梅を抱く手に力が入った。

「それが酷くてね、ある時なんて、お岩さんのような、お岩さんて知ってるう？あの四谷怪談の執念深い女？あらっいけない。こんなことを言ったら呪われちゃうわ。お岩さんごめんなさい。それでね、お夕ちゃん、片眼を蹴られて、お化けのような顔で青物を洗ってたわ、かわいそうに」

「暴力の原因はなんなんですかい？」

長吉は憤怒で、頭がどうにかなりそうになっていた。巨漢のおかまと一つ屋根の下に居るせいか、暑くて仕方がない。汗が、顔の輪郭を伝い、喉から胸元に流れているのがわかる。なぜわかるかというと、家主の目線がそこにあるからだ。長吉は衿を掻き合わせた。

「おせんを殴りやがって……」

短気なところのある長吉も、おせんを叩いた覚えがしばしばある。あの夜の煮売り酒屋でも、かなり酷くおせんを折檻したが、そのことはいまでも悔いている。この話を聞いて、余計に懺悔の思いに苛まれるようだった。

「嫉妬よ」

家主は、茶を、音を立ててすすると、気の抜けた、尺八のような屁をこいた。

「……」

小梅の顔を覗くと、ちゃんと眠ってはいたが、屁が臭く、苦しそうに眉をしかめていた。

「彦五郎っていう男は恠気の激しい野郎でね、お夕ちゃんがちらっ

と、裏店の男と言葉を交わしただけでも殴るんだわよ。ある時には洗濯中のお夕ちゃんが他の男の眼を見て話ただけで、あの男に色目を使いやがったな、このあまつて、衿上を掴んで家中引き摺り廻して。でもね、どういう訳か、あたしと話すのは平気だったみたいよ」

「……」

「まあね、あたしもね、女よりも男の方が好きかな。どんな男が好みかと言うとね……」

「そんなに殴られてもお夕は逃げなかつたんですかい？」長吉は、生真面目な顔で家主の話を遮った。

「逃げたわよ、何度も」

家主は、折り曲げた太い脚が鬱血したのか、どっこいしょと座り直した。座り直したのは、自身番屋に来て、これで十度目だ。

「でもね、血眼になつて探し回られ、見つけられて家に連れ戻されると、また殴る、蹴るでしょう。そのうちお夕ちゃんも諦めたんじゃない、あの男からは逃げられないって」

「それで、二人が別れたのはいつのことぞ？」

「お夕ちゃんが、うちの裏店に越して来たのが、春先だから、別れたのは暮れのことだわよ、なんだか他に好きな人ができたんだつて、職人らしくてね、彦五郎に殺されても、その人と一緒になるんだつて、頬を赤らめて語ってくれたわよ」

「好きな人？職人……」

時期的に、おせんの好きな男は自分と重なつた。大晦日も近い晴れた日、回向院の境内で、長吉はおせんと出会つた。顔に痣のある記憶はないが、熱心に拝殿で祈りを捧げるおせんの、すらりと伸びた後ろ姿に、長吉は見とれたのを覚えている。

おせんは、桃割れに、可愛らしい色の根掛を掛けていたが、それとは少し不釣り合いの、唐棧の羽織を着ていた。祈り終え、振り向いたその姿に、長吉は心を奪われた。美人ではないが、人恋しそうな、憂いを含んだ表情に惹かれた。このまま別れたら、一生この娘

をを見失うと思った長吉は、満を持して、話しかける機会を窺った。運命の悪戯か、境内の水茶屋を横目で見ながら歩くおせんの下駄の鼻緒が切れた。他の男に盗まれてはなんねえと、急いで駆け寄り、「お嬢さん」と話しかけ、懐から出した手巾を齒で裂いて、肩を貸した。緊張し、鼻緒を結ぶ指先が震えた。

想い出に耽ける長吉に、家主は続けた。

「女って現金よね、あんなに彦五郎と別れた方がいいと進めていたときは、普段はやさしい人なんですと庇うこともあったお夕ちゃんかよ、そのなんとかっていう職人とすぐに夫婦約束して、彦五郎さんが賭場に行ってる間に、彦五郎さんが犯した恐喝などの罪を、自身番に洗いざらいぶちまけて、風呂敷袋一つ胸に抱えて飛び出して行っちゃったんだから」

「っていうと、彦五郎は」

「すぐに捕まったわよ。怒鳴ってたわよお、気が狂ったように、お夕の奴、ぶっ殺してやるってね、怖かったわ」

「……」

家主は大きな身体を揺らして身震いをした。神棚の榊が、風も無いのにゆらゆら揺れた。物が落ちてきやしないかと、長吉は頭上の神棚を見上げ、躰を戸口の方へずらした。小梅はすやすやと寝息を立てている。

「それで、そいつは？」

「彦五郎さんが犯した罪って、微罪が多くてね、実家からも金が出たようで、小伝馬町の牢屋敷にちよつと入っただけで、江戸払いで済んだんだわよ。地獄の沙汰も金次第って言うじゃないのさ。だけど、彦五郎さん、法を破ってお夕ちゃんを探しに江戸に戻ってきたまっつてね、痩せこけた顔であたしのところに来て、お夕はどこに行った、あのあまあ、他に男ができたんだろって必死の形相で聞くんだからあ、あーっ怖かった、怖かった。ほんとだよお、本当に怖かったんだからあ……」

「それで……？」

「捕まっちゃまったわよ。今度は遠島。駄に繩をかけられて引つ張つてかれるときは泣いてたわよ」

「……」

「実家が、放蕩息子のためはかなり金を積んだらしいから、彦五郎さんもじきに戻つて来るんじゃないかしらね、そうしたら、お夕ちゃんも地獄だわね、ありや執念深い男だよ、ほんと」

「彦五郎は、お夕を忘れてないということかい？」

「忘れるなんてあるもんか、あの彦五郎って奴はね、お夕ちゃんを殴るたびに、ああして謝つて泣くんだよ、もうしないから許してくれとね。今頃、島で、お夕をどう片付けようか考えてる筈だわよ」怖ろしい話しを聞いたような気がした。島流しになつた彦五郎が戻つてくるのは、多分来年頃ではないかと、あのおかまの家主は言つていた。目覚めたばかりの小梅を背負い、清水町を後にした長吉は、堅川沿いを、ゆっくりとした足取りでばんやり歩いた。時折、小梅をゆすり上げては後ろを向いて、腹は空いてないか、喉は渴いてないか、飴は欲しくないかと尋ねた。三歳にもなつて、でんでん太鼓が欲しいとねだる小梅に、願いの品を買い与え、黄昏色に染まりつつある、見慣れた町並みを見とれて歩いた。

彦五郎とおせんの暮らしぶり、美濃屋との、案外仕合わせだつたおせん。いままで知らなかつた女房の素顔を垣間見た長吉であったが、気持はどんより曇つていた。長吉の実家はさして裕福ではないが、食う物がなくて困るといふ経験もない。これまで何度となく身を売つて生きる女を、長吉は躊躇いも無く買つてきた。そういつた女の境遇に心を痛めたり、労つた記憶もない。ただの性欲のはけ口に過ぎない女達として彼らを扱つてきたような気がする。だが、悲しい女達の現実を、おせんを通して見てみると、あんな地獄もあるのだと、改めて思い知らされた気がしていた。

薄闇の中、長吉はおせんの住む、住み慣れたすずめ長屋の木戸に立っていた。都合の良いことに、背中の小梅は眠っている。起きていたら、おっかあ、おっかあど騒ぐところだ。まだ母親と離れて二

月しか経っていないのだから仕方がない。顔見知りの木戸番に、おつゆや、おかまから聞き出した彦五郎の容姿を説明して聞かせ、ことういう野郎が来たら、すぐに自身番に届け、同時に俺にも急ぎ報せてくれと、いま住んでる場所の絵図を書いて渡した。くれぐれも、おせんがここに住んでることを、この野郎に言っちゃいけないと念を押しといた。一応、お夕という名も教えたが、詳しい内容は伝えなかった。木戸番の男は、神妙な顔で絵図を受け取った。

ついでに長吉は、宗治のことを聞いてみた。おせんが多情な女だと変に疑われては情けないので、引越したことを宗治には教えない、だから宗治が俺を訪ねて来てしまったんではないかと、周囲に眼を配りながら、殆どひそひそ話しに近い声で聞いた。木戸番は、自分が番をしている時に二度ほど宗治を見掛けたと言った。「それはいつだっ」と、長吉に首を絞め上げられながら、息も絶え絶え木戸番は、宗治は立ち寄っただけで、すぐに帰ったと思うと曖昧なことを言った。顔を真赤に腫らす木戸番を離し、小梅をゆすり上げて夜の町を、月明かりだけを頼りに帰路につくと、煮炊きの匂いがどこからともなく香ってきた。とてつもなく悲しくなった長吉は、おつかあ、ごめんと、自分の頭の堅さを謝り、道に迷った子供のようにな、べそ掻きながら歩いた。

復縁

長吉と、高橋でばったり出会ったおせんは、それから一月も待たずに、すすめ長屋を出て、長吉と小梅の暮らす海辺大工町へ越していった。

あの日、橋の上で頂垂れるおせんの肩を抱いた長吉は、見た目よりも肉を落とし、弱々しくなったおせんを、このまま放っておくわけにはいかないと、おせんさえその気なら、小梅の待つ家へ連れ帰ろうと決めていたのだが、おせんはそんな長吉の胸を押し離して、駆け出してしまった。髪結いの商売道具は、橋の上に置いたままだった。

―困ったやつだ。

ぼそりとつぶやき、眼を細めておせんの去った方向を見ていた長吉だが、橋に置き去りにされた道具箱を拾うと、一旦、小梅を預けてある同じ長屋のおとき婆さんの家に立ち寄ってから、小梅の手を引いて、松坂町まで歩いたのだ。いつもは一つ目橋から二つ目橋までの距離でさえ、つかれた、足が痛いとぐずり出す小梅も、母親を迎えに行くと言え、きゃんきゃん飛び跳ねて、驚くことに、松坂町まで、長吉を先導して歩いた。強く握り込む小さな手の温もりを感じながら、長吉は、身勝手な大人に巻き込まれた、この娘の不幸を見たような気がしていた。

長吉は、おせんを高橋で見掛けるより前に、既におせんとの復縁を、真剣に考え初めていたのかも知れない。おせんほど呑気ではないので、離縁状を渡していないことも、もちろん承知していた。別れる気がなかったとか、おせんを紙切れ一枚で繋ぎ止めておこうとか考えたわけではなく、おせんからの申し出があれば応じ、離縁状なりなんなり書くつもりであったが、自分からおせんとの縁を断ち切ることはどうしてもできないでいたのだ。

母と子の対面は、おせんの家の軒先で行われた。おせんは、大切

な道具箱を橋の上に置き忘れてきたことを思い出すこともなく、茫然と土間の柱に凭れていた。下駄も履いたままで上がり框に腰を下ろしていたが、物が憑いたように不意に立ちあがると、長吉の胸に頬を埋めた時に、顔についたらしい白粉の香を消すため井戸へ走った。

井戸端に蹲り、ばしゃばしゃと顔を洗っていたら、小梅に手を引かれて自分の家へ歩く長吉の姿を見落とした。長吉もまた、井戸の反対側で顔を洗う、おせんの姿は見えなかった。果たして父子は、開け放ったままの板戸から勝手に中に入った。小梅が、狭い家の中を走り廻って母親を捜したが、おせんの姿が見当たらないので、指を加えて立ち竦んでいる。二階は危ないので、小梅ひとりで梯子を上がってはいけない約束になっている。小梅に変わり、長吉が覗いたが、おせんの姿はここにもない。

「出掛けたのかな？」

疲れたようにつぶやいて、長吉は、茶の間に仰向けに躰を倒した。その時、小梅が下駄を引っかけて外へ飛び出した。母親の足音を聞いたのだ。

「小梅……」

顔、衿、袂を水でびしょびしょに濡らしたおせんは、脱力した様子でその場に突っ立っていた。何が起こったか、判断に苦しんでいる様子である。寝転がったばかりの長吉が、急いで立つて行って、家の玄関から顔を突き出した。いつものように、鴨居に手をかけて、頭を少し曲げているが、安心したように微笑んでいる。

「小梅、おっかあが倒れちまう前に支えてやんな」

「はい」

ばたばたとした足取りで、おせんに寄った小梅は、「おっかあ、さあさあ」と、白く細い母親の手を引いて家の中へ導いた。土間に入っても、おせんはまだ蒼白い顔をしていた。小梅が両手を引く張り、「おっちゃんね」と、おせんを上がり框に座らせ、下駄まで脱がしてやった。その動作の一つも逃さぬように、おせんの涙で濡れ

た目は、小梅の仕草を追っていた。

「おせんちゃん良かったね、みんな帰ってきてくれたんだよ」

小梅のはしゃいだ声に気付いたおすえが顔を涙でぐしゃぐしゃにして入ってきた。

「小梅、会いたかったよお」

突然、襲い掛かるようにして太い両腕を上げて迫ってくるおすえから小梅は逃げ出したが、すぐにつかまった。

「大きくなったねえ、小梅」

乳母のように面倒をみてくれたおすえに会えて、小梅も漸く嬉しそうに顔を笑した。くちゅぐつたいと身を擦らせ、けたけた笑った。

「帰ってきてくれたの？」

怯えた仔犬のように、おせんは上目遣いで長吉を見た。長吉はなぜ、おせんの上半身が濡れているのか分からない。訝しげに屈めながら首を少し傾げると、

「いいや」

と、首を振った。おせん顔が見る見る崩れ、半身を折り曲げて座り込んだ。険しい顔付きになったのはおすえである。ねりま大根のように良く育った太い腕に小梅を軽々と乗せると、何処にも行かせないよと、樽のような躰で戸口を占拠した。

「違うんだよおすえ。お前らなんか、勘違いしてねえか。おいおかめ、泣いてねえで顔を上げる。年増が泣いても可愛くねえぞ」

むすつとして顔を上げるおせんの前に、立て膝をついて長吉はこう言った。

「お前、俺が三行半を突きつけに来たのだと思っただらう。ん？」

おせんは濡れた袂を口に押し当てて泣いた。

「俺はお前と別れる気なんて小指の先ほども持ち合わせちゃいないんだよ。……俺の店、小さな店だが、結構、繁盛してんのよ、人手が足らねえ、お前が働いてくれると助かるんだがな」

あれから一月が経つ。三人が暮らす海辺大工町の表店は、以前暮

らしたすずめ長屋と同じ二階造りだったが、表通りに面していることだけあって、陽当たりが良い。通りを越した先には小名木川が流れ、すぐ左手が万年橋だ。

一階部分は店舗兼作業場に居間、なんと、小さな庭も付いている。二階の間は寝間として使用しており、そこには縁側もあった。すずめ長屋のように、井戸や厠、物干し場が混み合うこともない。清潔で、静かで、快適な環境であったが、時に、ごちゃごちゃ騒がしい、すずめ長屋を懐かしく思うことがある。

店を開けるのは朝四つ（十時頃）で、閉店は暮れ六つ（午後六時）と決まっていた。長吉は、一番鶏が鳴くころには目覚め、売り物を作る作業に取り掛かる。狭い作業場なので箆笥のような大きな物は造れないから、箸や、櫛、小物など、注文があればなんでも造った。開店までに家の掃除や洗濯物、台所仕事を終えたおせんは、昼頃までは店を手伝い、その後は二刻あまり家を空ける。おせんは髪結いを辞めていない。長吉の店は、彼が言った通り繁盛していたが、店賃だつて目玉が飛び出るほど高い。いつ何時、何が起きるか分からないのが世の中だ。血の底を這うような貧乏を経験したおせんには、不幸の訪れは、突然、前触れもなくやって来ることを知っている。日に一人だけと決めて、馴染みの客の元へ出向くことを、長吉に納得して貰った。

小梅は長吉に任せて出掛けた。以前の長吉なら、小梅を預けて外に出るのを躊躇い、おすえに世話になっていたものだが、おせんと離れた一年で、長吉は随分と父親らしく変貌した。その変わり様は小梅を見ると一目瞭然で、作業が長引いた長吉を待ちくたびれ、「先に食べちゃおうか」とおせんが飯を盛り出すと、小梅は、ちゃんを待つと言って眠い眼を擦る。一年前には見られなかった光景だ。湯屋へ行くときなども、おせんではなく、長吉の手を掴んで歩くのを後ろから見ている、微笑ましく感じながらも、この一年の間に、父子が築きあげた世界に割り込む難しさに直面するとき、ふと孤独になるのだった。

「お前さん、小梅のことお願いね」

いつもの様に長吉を待っていた小梅が居間で寝てしまった。夕飯も食わず、人形を抱き締め、親指をしゃぶっている。小梅は四歳だが、おせんと離れたころから指しゃぶりを再開したらしく、その習慣は、おせんが戻っても変らなかつた。

「おう」

膝に落ちた木屑を払った長吉は、ひょいっと首を曲げて、作業場と居間の間の鴨居を睨み付けた。うっかりしていたらしく、あと少しで顔をぶつけそうになったのだ。

「なんでこう、鴨居の位置が低いかね」

「気をつけてね」

おせんは小梅を抱いて階段を昇る長吉を不安そうに見上げていた。いつ足を踏み外して落ちてきても良いようにと、細い腕を伸ばし片手を手摺りに、もう片方を壁に貼り付けている。

長吉が一段を上がると、おせんも一歩という具合に上り終え、蚊帳を吊した中に敷き述べた夜具に小梅を横たえた。汗で湿った小梅の小袖を着替えさせ、腹の上だけに？巻をかけてやる。足まで被せると、暑さで蹴ってしまう。腹が冷えてはいけないと、おせんはいつもこうしているのだ。おでこから前髪を撫で上げると、汗でびったりと毛が頭に張り付いた。

「朝のうちに行水でもさせようかしらね？」

「そうだな」

向かい側で小梅を見下ろす長吉に言った。長吉は、正座した膝を少し広げて腰を浮かすと、小梅の吸う親指を取ろうとしたが、眼を瞑ったままの小梅が慌てたように指に吸い付いたので諦めた。口だけでもの凄い力である。良く見ると、赤兎がするように舌をくると親指に巻き付けている。

「二つのころから指しゃぶりはしていないと思ってたんだけどな、お前と引き離されたことが、この子の負担になっていたんだろうな、悪いことをしちまつた。小梅にも、お前にもな」

「そつだね」

立ち上がり様に言い、さつさと蚊帳を潜つて階下へ下りて行つたおせんの方に、怪訝な眼を向けながら、長吉は、梯子の降り口の手前に手製の柵を取り付けた。大屋に相談した上で、二階に、小梅の落下防止用の柵を取り付けたのだ。ここに越す前もそうしていた。というのもすずめ長屋に住んでいたころ、寝ぼけた小梅がふらふらと梯子を下りようとしたことがあつた。寸前で抱き留めたから大事に至らなかつたものの、下手をすれば命を落とす。そこで、唐木職人で手先が器用な長吉が、大人なら簡単に取り外しのできる柵を造り、取り付けたのだ。

「おい、おかめ、お前なんだよ、あの言い草は」

「なんのこと？」

長吉が慥然として円座に座ると、おせんは首をかしげながら膝前に冷やした麦湯を差し出した。

「なんのことだと！俺が気を遣つて悪かつたと謝つたのに対し、お前ときたらなんだ。そつだね、はないだろう。良くできた女房ならな、そんなことは言わないよ。お前さん、悪いのはみんな、このあたしさと言つんじゃないかねえのかい、えっ？」

「……まあ」

おせんは、声を立てずに笑い、掌に湯飲みを包んで膝に置いた。

「だつてさ、良く考えてみたら、あたしがどんな悪いことをしたか思い当たらないのよね」

「なんだとお」

長吉は、気の抜けた声を出した。胡座を掻いた膝が、苛立ちを表すように揺れている。齒を強く噛みしめ、苦り切つた顔でおせんを見つめた。おせんは澄ました顔で茶をすすっている。

「そりゃあね、あたしには人に言えない過去があるよ。お前さんに黙つてたのも悪いと思つてるけどさ、過去は過去でしょう、戻つてやり直すことなんてできないんだ。それに、お前さんと出会つてからのあたしは、お前さん一筋で来たんだし、宗治さんのことにした

つて、本気で抱かれようと思ったわけじゃないんだよ。悔しさ紛れに声に出して言っちまっただけでさ」

「ほほう、開き直ったなおかめ。宗治のことはもういい、許してやりや。だがな、もう二度と俺の前で奴の名を出すんじゃないやねえぞ、お前にその気が無くて、奴にはあつたんだ。とんでもねえ野郎だ」

やり場のない怒りを押し殺すように、長吉は拳を握りしめた。宗治とは同じ歳だが、餓鬼の頃から弟のように、弱虫の宗治を可愛がつてきた。長吉の口癖だった。信頼しきっていた宗治の横恋慕を、長吉は到底許す気がないらしい。あの日を境に、宗治とは縁を切つたつもりでいた。

「それにな、おかめ」

長吉は、やくざもんのように肩肘を膝に付けて斜に構えた。指の先でおせんの頬をついているが、表情にもう険は残っていない。

「俺と出会ってからは一筋だつて言つたよな、ほんとかよ、おい」
清水町の大屋から聞いたことがずっと胸に刺さっていた。おせんと出会つたのは九年前の暮れ、ちよこちよこ会うようになったのはそれから一月後のことだが、長吉は、そのたつた一月のことを言っている。

困つた。おせんは煮え切らない態度で急にそわそわし出した。彦五郎の、凶暴に自分を殴る顔が蘇つたのと同時に、長吉に出会つてからも、約一月の間、彦五郎との生活が続けられていたのも思い出された。しかしそのことを上手く誤魔化す業の蓄えを、おせんは持ち合わせていない。額を汗で湿らせ、顔をしかめた思案顔のおせんに、長吉は続けた。

「お前、俺と出会つた頃はどこに住んでたんだい？」

「どこってお前さん……知ってるだろう、すずめ長屋だよ、松坂町の覚えてないのかい。そこにあんたが転がり込んで来たんじゃないか、まっその頃は、稼ぎが薄かつたから一間だけの棟割りに住んでたけどさ……」

明らかかな動揺を隠せず、おせんは茶の入っていない湯飲みを、音

をさせてすすった。

「あら、入ってない」

湯飲みの中を、片眼を瞑って覗き込んでいる。

「すずめ長屋の前だよ、どこに住んでた？一人だったのか？まさか俺と他の野郎と二股なんて、そんなはしたない女じゃあねえよな？」

長吉はにたにたと笑い出した。いまはまだ彦五郎のことを言うつもりはないし、言及しようとも思わなかった。ただ、おせんの狼狽える顔が、今宵は妙に面白い。

「何か知ってるの……お前さん？」

湯飲みを覗き込んでたおせんの顔色が曇った。低く小さな声で、うつむいて言った。

「いや、そうじゃねえ」

今度は長吉が狼狽えた。すずめ長屋の前は、実家のある神田に住んでいたとおせんからは聞いていた。あの日、回向院は、両国を散策した帰りに立ち寄っただけで、両親はついこの間、病で死んで、兄弟姉妹はいないという説明を、所帯を持つ前、おせんは長吉にしていたのである。なので神田の実家というところに足を運んだことも、盆暮れにおせんの親の墓参りに行ったこともなかった。おせんが拒否し続けたのだ。神田に帰り、ひよっこり身内にでも会って、昔のことが長吉に露見することを恐れたのだらう。おせんはいつでも一人で墓参りに出掛けた。

「もし、あたしのことで、人から何か言われたんだったら、隠さず言つてよ。あたしは、あたしで言い訳したいしさ」

「ああ……」

夫婦の間に、重苦しい空気が流れた。彦五郎のことは、冗談で終わらせられる話しても、過去のことでもない。そのことを、おせんに伝えなければならぬ。彦五郎の性格を考えると、島から戻れば、必ずおせんに会いに来る気がしていた。彦五郎は執念深い男だと、あのおかまの家主も言っていた。

長吉はいつだったか、彦五郎の実家の呉服屋を覗きに行ったこと

がある。柳原町にある美濃屋の前は、まあ近所といえば近所なので、昔から何度も通ったことがあるが、屋号が染められた長い暖簾は、長吉のような庶民を拒んでいるかのように隙間なく閉じ、強い突風でも吹かない限りは、ひらりともしない可愛げのないものだった。

出入りする客の層も、大店の商家のおかみや娘、大身の武家の奥方といった、長吉がまともな口を聞いたこともない顔ぶればかりであった。中の様子を伺い知れないんじゃないや仕方ない。その日、長吉はある一大決心をした。が、この決心だけは、おせんに告げず、墓場まで持つて行く覚悟である。

「麦湯、入れようかね？」

おせんは言うのと同時に立ちあがり、空いた湯飲みを乗せた盆を持つて台所へ行った。

「おかめよう」

「なんだい？」

水音を立てながらおせんが振り返った。

「守るからな、お前との生活」

長吉は片膝を抱えるようにして言った。

「お前の実家の墓参りもさせてくれな」

「うん……ありがとう、お前さん」

おせんは前垂れで眼をおさえていた。涙をすすり、恥じらうような笑顔で長吉に並んで腰を下ろした。

「お前さん、嬉しい」

「なんだよ、気味悪いなあ」

肩を寄せてくるおせんから逃げるようにして、長吉は躰を少しずらした。すると、紐で繋がれているようにおせんもすっと横に動いた。「暑いなあ」とぼやく長吉を無視して、おせんは湯飲みを長吉の手に握らせた。湯飲みの中身は麦湯ではなく酒である。

ほんの一年前までは、飲む、打つ、買うの中の打つだけを抜かした全てを満喫していた男が、生まれ変わったように仕事に専念し、酒も断ち、女遊びは？取りあえず昔のようなことはまだしていない。

と、信じている。長吉への感謝の気持ちがあった。それで、今夜くらい酒を飲ませてやりたいと思いつたのだが、ただ純粹に長吉を喜ばせたいだけではなかった。おせんには、どうしても長吉に聞いておきたい事柄があるのだ。そこで酒の力を用いようとした。

「ん……」

と、長吉はうなり、麦湯とは異なる無色の水を見つめ鼻を近づけた。

「酒か？」

いいのか？と、続けて聞いて、返事も待たずに長吉は酒に口をつけた。喉を鳴らし美味しそうに飲むその姿を見ると、もう少し前に酒を飲ませてあげたら良かったと、おせんの胸に後悔のような気持ちが動いた。

すずめ長屋を出てからというもの、長吉は酒を飲んでいない。大袈裟でもなんでもなく、正月に神社で御神酒を頂いたくらいだ。料理にさえ酒を用いないので、この家の中に酒が持ち込まれたのは、今日が初めてであった。

「あたしもご相伴にあずかるうかしら？」

「おう」

おせんは長吉から湯飲みを貰って、ぐいっと喉を仰向けて飲んだ。そのおせんの姿は、長年連れ添った亭主から見ても、眩しすぎるほど艶めいていた。長吉はふと視線をおせんから外し、家の中を見渡した。おせんが来てからというものは様変わりした。何が増えたというのではなく、どことなく埃っぽかった家中、いつもつやつやと磨かれ、二階の衣桁に掛けられた女物の小袖や、おせんが居た場所、場所に残る女の匂いや、気配が、この家を包み込む全体の雰囲気を変えたのだろう。特に、男が見落としがちな水回り、庭に関しては、感心するほど丁寧な仕事が成されている。打水も欠かさない長吉が、空いた湯飲みの底を覗き込んで微笑んでいる。程よい加減で酔ったのだろう。おせんは、かつてから疑問に思っていたことを聞く機会だと判断した。

「お前さん、前から聞きたいことがあつただけだね」

「ん……なんだい畏まつてよ」

「この家、小さいけど表店でしよう。店賃だつて二分もするじゃない」

「すずめ長屋だつて一分二朱もしたじゃねえか」

「あそこは回向院の裏だもん、こことは場所が違うよ」

おせんは酒で火照つた躰を傾け、足を崩した。

「この身元保証人は誰がなつたんだい？」

「……」

「小商いつて言つても、棚から何から造るのにも元手が要つただろう。お前さん、そんな蓄えあつたの？」

「何が言いてえ……」

長吉は、空の湯飲みを握り込んだ右手を膝に置いて、おせんを睨むように見据えた。

「回りくどい言い方をしないで、はっきり言いやがれ」

夜中なので、流石に声は低かつたが、その分、凄みが効いていた。おせんはふつと軽く溜息を吐いた。

「高橋であんと再会したときね、匂つたんだよ、白粉が……」長吉は睨んでいた目を細めて、にやりと笑つた。

「店の客の殆どが女だぞ、白粉の香が着物に移つてもふしぎなことはないだろう、なっお前」

「そうだね、確かにそうだよな」

「空気に香る白粉が着物に移るもんか。」

微かな酔いのせいか、おせんは心で毒付いた。悪い酒になりそうだと思い、長吉の掌から湯飲みを取つて、盆に返した。だが長吉はすぐにその湯飲みを持って台所に立つて行つた。酒のありかを探しているようだ。うろつると上を向いたり、屈んだりしている。そんなところに入る筈なのに、鍋や釜の蓋まで開けている。見かねたおせんが寄つて行つて、勝手口を開けた。酒は庭先の壁に添つて置いてある。

「何で隠してんだよ」

「隠してなんかいないよ、しまう場所がなかったたださ」

長吉は、おせんの手から剥ぎ取った一升徳利の蓋を口で開け、とくとくと注ぐと、口から蓋を取って栓をした。おせんの胸に当てるように徳利を押しつけ、その場に立ったまま酒を飲み干すと、渋い顔をして胃の辺りを押さえた。

「胃の腑が痛てえと思ったら、飯を食ってねえじゃねえかおかめ」
咎めるよりも問うような口調で言った。

「あらあら」

おせんは慌てて干魚を焼き、味噌汁を温めなおし、沢庵を切つて、里芋を煮たものを椀に盛って出した。二人分、用意し、おせんも一緒に食べた。

「さっきの話しだがよ、おかめ」

「うん」

沢庵の音を景気良く立てて、おせんはうなずいた。蜆の味噌汁を飲んでひと息つくと、長吉は箸を置き、頭の中で必死に整理した話しを説明しだした。

「この身元保証人はな、その、俺の腕を見込んだ馴染みの客がなつてくれたんだよ、店の元手も同じ人だ」

普段、切れの良い話し方をする長吉が、何度もつつかえ、つつかえ話した。

「あたしの知らない人だよね？」

「そういうことになるな」

「誰かだ教えてくれない？お礼に行きたいしさ」

「礼なら済んでる」

「そう言っただっってお前さん……どんな礼をしたんだい？」

「……」女房に言える礼の仕方ではなかった。長吉の、唇の片方が卑屈に歪んで見えた。

「ねえ、誰なの？」

「お前が出る幕じゃねえって言うてんだ。黙って、……黙って大人

しくしてればいい」

なんとも齒切れの悪い言い様だった。嘘を、おせんに見抜かれていると気付いているのだろう。うちひしがれたように仰向けになると、まだ新築の色を残す天上を見つめた。

「女なんだね……」

片付けを終えたおせんが、手を拭いた前垂れを外しながらそう言うのと、寝転ぶ長吉の頭の脇にぺたんと尻をついた。片脚の膝をすり上げ、足の指に触れている。今日の得意先は永代橋のたもと高尾稲荷に隣接する町だった。そう遠くもないが、近くもない。だが客の草履屋のおかみが良く喋る。苦労人で、人の良い大年増だが、痩せすぎの首に筋を立てて、際限なく話し続けるので、おせんは、予定していた帰りの時刻を大幅に遅れてしまい、駆け足で海辺大工町の店まで戻って来たのだ。その時に、足の指を痛めたらしい、小指から三本ほどが赤く擦りむけていた。

「女かい？」

長吉は答えず、おせんの割れた裾からはみ出した赤い湯文字を掴んで広げた。頭を寄せて、中を覗いているが、おせんに気にした様子もなく、また同じ質問を繰り返した。

「女なのね、お前さん？」

言葉を誘い出すような、やさしい声で言った。

「ああそうだよ」

長吉は呆気なく答えた。おせんは、足の指を擦っていた手を止めると空気を肺に、これでもかというほど吸い込み、言葉と一緒に吐き出した。

「なんだってっ」

湯文字の中を覗いている長吉の頭を思い切り張り飛ばした。眼を見開いて仰向けになった長吉の上に馬乗りになって衿を掴んで上下にゆすった。

「おいおい、ちょっと待てよおかめ」

「おかめじゃないっ！」

「おお、そうだった……なんだったかな。まあいいじゃねえか名前なんぞどうでも」

語尾をやわらかく言った長吉の顔を、おせんは、眉を下げた情けない顔でしばらく眺めていた。力なく四肢を放りだした長吉は、おせん的眼に膨らんだ涙を、悲しげに見つめるだけだった。言い訳は通じないと観念したように、眉を寄せ、眼を逸らさずにおせん凝視に堪えた。やがておせんは、長吉の顔にぼたぼたと滴った。

「どうして、そうなの……」

絞り出すように言ったあと、おせんは顔をまつすぐ長吉に下ろし、頬を擦りつけ、子供のように大声を出して泣きだした。杭で胸を貫かれるような痛みを覚える泣き声だった。

「おかめ、泣くこたあねえだろう。お前が泣くようなことはよう、俺は何もしてねえんだぜ。俺はお前と、小梅を生涯守って生きてゆくと誓ったんだ。なつ、泣くな……」

翌朝、おせんは、嫌がる小梅をなだめ梳かし、ぬるま湯を張った桶の中に入れた。庭と言っても小さな坪庭だったが、そこを長吉は、自然石に水穴を彫った手水鉢の前に、前石や飛び石などを置き、板塀は袖垣で飾った。濡れ縁の沓脱石には三つ、親子の下駄が並んでいた。

「ほらね、気持がいいだろう」

おせんは、襷掛けに尻はしよりで小袖の躰にお湯をかけている。ここまでするのに、今朝は本当に大変だった。寝ぼけ眼の小梅の寝巻きを脱がせ、おせんが下になり、手を引く形で小梅を階下まで連れてきた。そこまでは良かったが、昨夜、飯を食べないで寝た小梅は腹が減って機嫌が悪い。いつもは大好きな行水を、「入りたくない」と泣き叫んで、桶の端と端に足を突っ張るので、中に入れるまで随分苦勞をした。悪戦している様子は、小梅の泣き声で充分、長吉に聞こえている筈なのに、仕事場に入った長吉は、素知らぬ顔を貫き通している。それに付け加えて、小梅が、「ちゃん助けてーっ」と叫んだものだから、おせんもいよいよ腹が立ち、小梅の頭を張っ

て、うるさい子だねと、怒鳴りつけた。それでも長吉は、関わりうとしなかった。

小梅の行水が終わると、障子を全て閉めきつて、おせんは小袖を脱ぎだした。小梅があまりに暴れるので、おせんの小袖は下着までびしょ濡れになってしまったのだ。障子を閉める際、店の方をちらと見たが、ぱつと見、長吉の姿は見えなかった。お前さーんと、通りまで聞こえる声で呼び掛けたが返事がない。床の木屑も、造りかけの箸も、今朝、おせんが起きた時のままのような気がする。どこかへ出掛けたのかと、多少の不安に揺さぶられながらも、身支度を整え、忙しく小梅を着付け、髪を梳き、飯を食わせた。

「ちゃんは？」

何度も聞く小梅に、おせんの苛立ちが募った。

「仕事だろ。ささ、早くお食べよ、お父っつあんが留守の間、おつかあが店に出なくちゃならないんだからさ、のんびりなんてしてらんないんだよ」

小梅の頬についた米粒を食べながら、あーっ忙しい、忙しいと、自分の食べた茶碗を片付けた。

「あの人、どこまで行っちまっただらうね。」

狭い店内が一望できる居間の上がり框に腰掛けて、頬を肘に乗せ、風が吹くたびに翻る暖簾の隙間から、通りを行き交う人々や、通りの向こうに流れる小名木川の、初夏にしては強い照り返しに目をやりながら、茫然としていた。

この一月の間に、長吉がこれと同じ様な行動を取った日が一度だけあった。昼前にふらっと店を出て、昼過ぎに戻って来るのだ。

「あんたどこに行ってた？」

と、おせんが咎めると、「朝風呂だよ」と長吉は言う。うつすらと笑みを浮かべているが、おせんの視線を避けるようにして注文の作業に取り掛った。昼過ぎと言えば、おせんが出掛ける時刻なので、深く問いただすこともできずに、道具箱を抱えて慌ただしく店を出るしかない。また長吉は、その時刻を計ったように帰って来るのだ。

仕事から、家に戻るころには、夕餉の仕度もあるし、そのころになると決まって店は忙しくなる。陳列された商品を触ろうとする小梅を叱りつけながら、客の対応に追われていると、すぐに日も傾き、人の影が伸びる時刻になる。店から居間に戻り、玄関を出て物干し場から洗濯物を集め、二階に駆け上がって、取りあえず乾いた衣服はそのままに、夕餉の下準備を終わらせてしまう。普通はそこで湯屋へ行くのだが、思いの外、作業に手間取り、お天道様の明かりを頼りにできなくなると、真暗になる前に夕餉を食べ終えた。その後で、親子三人で湯屋へ行く。

昨夜もその成り行きだった。長吉がもう少し気を遣って夕飯の時刻には居間が上がってくれと、飯も食わず、湯にも入らず小梅が寝てしまうなんてことにはならないのだがと、愚痴がおせんの頭を掠めるが、それを口に出したことは、いまのところない。好きな酒も飲まず、仕事に専念してくれるのに、文句を言っでは罰が当たると思ったからだ。

「惚れてしまったら、だめね。」

などどつぶやき、一人で笑った。昨夜の喧嘩のあとの、夫婦の仲直りを思い出したのだ。濡れた肌を交えてから、まだ湯屋には行っていない。通りから、店内を覗き込む人がいないことをいいことに、おせんは胸を少し広げ、衿の中に顔をうずめて昨夜の甘美を嗅いだ。「何をやってるのかしら」

とすぐに衿を戻し、小梅に見られていないかと、居間に振り向くと、小梅は延ばした脚の上に大人向けの草双紙を広げてぶつぶつ言っていた。

不謹慎な挿絵のない本なので、小梅はそのまま放っておいて、おせんはまた昨夜のことを思い出していた。深く息を吸い込むと、自分の躰に残った長吉の体臭が、肌だけでなく、体内にも入り込んで来た。

昨夜は恥じらうことも忘れ、夢中になって互いを求めた。長吉に、上手く誤魔化された気がしないでもないが気にしない。昇りつめる

寸前、大きく躰を反らした。その時、淫らに悶える自分の姿が、行燈の灯りを通して、居間の壁に、くつきり映し出されていたのを見たような気がする。

「恥ずかしい。」

今更、羞恥が湧いてきた。両手で顔を覆い、昨夜のふしだらを自ら咎めた。すると突然、言い様のない不安に締め付けられた。自分にしたように、他の女にも同じことをしているのではと想像した。想像は膨らみ、おせん頭の頭の中で具体的に描かれた。組み伏せる長吉の下には、大勢の女の顔が入れ替わった。多種多様な顔ぶれである。

「もう、いや……。」

首を振って邪気を払うと、ふっと大きな溜息が出た。

「女かしら、やっぱり。」

生まれついで物の憂い顔の目がつり上がったとき、おせんは拳を握りしめて立ち上がった。どんと床を踏みつけるようにして外へ出ようと軒先の暖簾を上げた。大屋に、うちの身元保証人を聞いてしまおうと決心したのだ。

「あらっごめんなさい」

頭に血が登っていて、暖簾の向こうに人がいることに気が付かなかった。出会い頭にぶつかってしまった。

鼻を押さえ、二歩ほど後じさりして前を向いた。胸の辺りが見えた。痩せた薄い胸をした男だった。長吉は痩せているが胸板は厚く四角い印象を持つ。匂いも違う。

前に立つ痩せた、撫で肩の男の顔を見ないでも、全身の血が下に落ちて行くのを感じた。恐怖で凍り付いた躰を両腕で抱えるようにして、また二歩下がり、少しづつ顔を上げた。男はにやりと微笑んだ。

「久しぶりだな、お夕。いや、おせん」

旅立ち

同じ頃、長吉は常磐町の料理屋の二階座敷にいた。名もあまり知られていない、一見すると、町家のような風情の料理屋で、暖簾も看板も出ていない。店の入り口には夥しい数の植木鉢が置いてあり、この店の店主の趣味らしいが、きちんと手入れがされている。雨が降らない限り、冬でも打水は欠かさず撒かれており、店の横に流れる小名木川が緩い水音を立てていた。屈託ありげな中年女と長吉が微睡む座敷は、八畳と四畳半の襖続きの二間で、この小さな店の中では、これでもいちばん広い客間である。

長吉は、同じ女と、月に一度、ここで密会している。昼近くに出掛け、昼すぎには高橋を渡ってすぐの自分の店に帰るのだが、おせんがすすめ長屋から越してくる前も、越して来てからも、海辺大工町の同じ町内の湯屋へ立ち寄って、躰を流してから、長吉は店へ帰るようにならしていた。

いまはおせんがいるので、店を放り投げた形で出掛けるが、以前は、店を午後から開け、小梅は同じ敷地内にある裏店のおとき婆さんに預けて出掛けた。

湯屋へ寄ってから帰る理由は、淫らな汗の湿った不浄な躰を清めなかったからだ。女の白粉の匂いを体中に纏ったままで、小梅を抱き上げるのが憚れた。

ここに入ると必ず最初に飯を食う。女も長吉も酒は飲まない。互いに仕事と、帰る家があるからだ。

特に言葉を交わす訳でもなく、黙々と飯を掻き込み、食事を終えると、隣りの四畳の部屋に敷き述べられている派手な色合いの夜具で小半時あまり女を喜ばせ、時間があれば少し眠る。帰り際、女は決まって長吉に二分握らせた。これは長吉の店の店賃である。即ち、この女が長吉の店の身元保証人である。

「あんたの倅が戻って来たら、必ず報せてくれよ」

これを去り際の言葉として残し、長吉は店を出る。今日は、意外と早く食事を終えたので、事が済んだ後、寝間で微睡む時間が持てた。といつても躰を離したくないのは女の方だけで、長吉の心は急いでいた。おせんが待っている上に、仕上げて仕舞わないといけないうな気持で、長吉は、躰に張り付く女を引き離すと、逃れるように、連子窓から外を覗いた。素肌の小袖をまとい、素早く帯を締め、居間の肘掛窓枠に腰掛けた。上げた片脚の膝に腕を寄せ、眺めた下ろした川の袂には、おせんと再会した高橋が架かっている。

一月ほど前、橋の上でおせんに声を掛けたのは偶然じゃない。あの日も、この女と時を過ごした後だったが、その日に限って、身仕舞いするまで待つてくれと、女が甘えたため、苛ついた気持を隠しながら、長吉は今日と同じ様に川を眺めていた。そこにおせんの姿を見たのだ。

長吉は最初、自分の姿を隠すため、発作的窓下に蹲った。しかし思い付いたように立ちあがると、いつもの去り際の言葉に付け加え、急用ができたと女に伝え、急いで階段を駆け下りた。店の戸口に立つと、不意に、この店を出る姿をおせんに見咎められては困るという気持が働いた。店主に怪訝な眼で舐め見まわされながらも、しばしジタバタと足踏みしていたら、身繕いを終えたあの女が下りてきた。先程まで床の中で騒いでいた女とは、到底同じ人物に見えないほど、女は大店のおかみの顔に戻っていた。急用の筈なのに、未だ階下にいた長吉を見て、女は少しむくれた様な顔をしたが、その表情は長吉にだけにしか見せなかった。女は自分の立場を心得ているのだ。他の店の者には、つんと尖った顔で接し、長吉よりも先に、植木で覆われた店を出て行った。

袂で鼻から下半分を隠し、軒先から首だけ出してちらと橋の方を覗くと、おせんはまだ、しゃがんで川面を見つめていた。ほっと胸を撫で下ろした長吉は、日傘を差して、澄まして歩き去る女の後ろ姿が、武家屋敷の角を曲がるまで見届けた。そして長吉は、単衣の

袖に、白粉の匂いをさえていることも忘れ、おせんの元へ、踊るよ
うな足取りで向かったのだ。

おせんのごとは、この一年、忘れたことなどなかったし、いつも
見守り続けて来たが、近寄って声を掛けようと素直に思えたのはそ
の日が初めてである。それほどおせんは孤独に見えたとし、長吉の心
と躰が、おせんの存在を、息が苦しくなるほど欲していた。

「おかみさんが、戻って来たんでしょう？」

「……」

「隠したって無駄ですよ、ちゃんとして調べてるんだから」

「隠してなんてないよ。第一、お前さんに隠す必用などないだろう。
俺のところに戻って来たのは、紛れもなく俺の女房なんだからよ」

「そりゃ、そうだけど……でも、わたしいやだわ、あなたがおかみ
さんと、と思うと妬げちゃう」

「そういうことは言いつこなしですぜ、おれんさん。相手は女房だ。
どうしようと俺の勝手だと思っけどな」

冷たく言い放つ長吉から目を逸らし、ふっと肩を落としたおれんは、
裾の合わせ目を指先でなぞった。

「これからも会ってくれるんでしょう。あなたには散々、金を使っ
たんだし、言いたくないけど、店の身元保証人だつてわたしなんで
すからね。意地悪したら、店を追い出しますよ」

床の中とは人が変わった様に、権高な物言いをする女だった。だ
がその態度には、素直に表すことのできない、この若い男への、恋
慕の思いを必死に隠しているような、そんな気が、長吉にはしてな
らなかつた。そういった女の心の中を覗き見たとき、確かに長吉は、
二十も歳の離れたおれんを、可愛いと思うのである。

「心配するな、これまで通りお前さんとは会うよ」

長吉が言つと、おれんは相好を崩した。そしてふと襖の方を見た。
見てすぐ、あらつと言つて立ち上がった。微かに開いていた襖の前
に座り、頭ひとつ出るくらい開けて廊下を覗く素振りを見せた。お
れんはその時、階段を下りて行く薄汚い男の姿を眼にしている。し

かしおれんは、首を捻り、ふんと鼻先であしらったただけであった。薄暗い廊下の突き当たりにある小窓から吹き抜ける風が、襖の僅かに開かれた隙間からそよそよと入り込み、向山に飾られていた料理に敷いていた和紙が、竹細工の器から飛ばされて、長吉の足元にふわりと落ちた。

「どうしたい？」

長吉は、半刻前まで天ぶらが盛られていた、いまはただ、油のついた和紙を拾い上げながら言った。

「ううん、女中がきちんと閉めてなかったみたいね。どうもいけない、悪いことをしていると、疑り深くなっちゃって、いまだって誰かに覗かれていたんじゃないのかと気になって……」

「そうか……」

長吉はうなずきながら、また高橋に眼を戻した。長吉が腰掛ける位置からは、おせんと、小梅がいる表店は見えない。ここに腰掛けるときはいつも、店の方角とは違う、東を向いて座った。

例えば、店の前をふらつくおせんに、薄暗い料理屋の二階にいる姿を見咎められるとは思えないし、河川に添って植えてある柳や桜の枝が、視界を邪魔している。だとしても、あちらから見えないとはいえ、ここでしていることを考えると、女房、子供の姿を遠目にも見てしまったときには、きつと心も躰も萎えてしまうような気がした。ゆえに長吉はいつの時も、大川の方を背に座っていたのだ。

だが、今日に限っては、店の様子を伺いたい気持が強く働いた。心を不快に騒がす何かが、長吉の胸の奥底を衝き上げるようにして喉の辺りを圧迫した。

長吉の気持を波立てる言い様のない不安は、今朝、目覚めた時から続いていた。それは昨夜、おせんに、店の身元保証人のことを詰問されたせいかも知れないし、夜中だというのに、隣近所を憚らず泣いた、おせんの悲痛の叫びと、長吉の衿を持ってゆすり、拳で胸を叩きながらも、涙に濡れた頬を擦り寄せてきた幼気ささが、長吉の脳裡から離れないからなのかも知れない。

得体の掴めない不安に脅かされた長吉は、一旦、腰を浮かすと腕組みをして、外をまつすぐ眺め下ろしたあと、腕組みを解いて再び窓枠に腰を下ろした。今度は、角度を変え、大川の方へ向いてみた。ゆっくり眼を上げ、万年橋のたもとを見た。そこに長吉の店がある。若い女が二人、お喋りをしながら暖簾を潜り、店に入るのが見える。それと丁度すれ違いに、背の高い、痩せた男が店を出て来た。男は店の方を振り返り、顎を撫でて立っている。すぐ後からおせんが現れた。小さな瓶のようなものを小脇に抱えている。蓋は最初から開いていたのか、おせんはおもむろに瓶に手を入れると、男の足元へ、邪気を払うような勢いで何かを撒き散らした。

「何やってんだ、あいつ。」

おせんが塩を撒いたと察した長吉は、窓枠に食らい付くようにして様子を見守った。おせんがその男に乱暴なことをされやしないかと、腰を浮かし、飛び出したい気持で、何度も出入り口の方を見ては足踏みをした。おせんは男の前に突っ立っていた。男は裾を叩いて、周囲の人々を気にするように伺っているが、通り絶る人々は、二人の男女の異様な空気に気付いていない様子だ。足早に過ぎて行くだけだった。

「どうしたの？」

怪訝にな目付きをしたおれんが、窓枠に寄ってきて、長吉の腰の前に膝立ちになり窓外を見た。塩を撒かれた男の表情までは見えないが、おせんの緊迫した雰囲気は伝わってきた。長吉との喧嘩の時とは違い、明らかな恐れを、そのひよる長い男に抱いている。しかしおせんは元来、気の強い性質である。往來に出たことで、本来の勝ち気さに力を付けたようだった。

「まさか……」

不意に長吉は、あの男が彦五郎なのではと想像した。

「おれんさんよう」

長吉の問いかけにおれんは答えず、黙って、長吉の店の前に立つ男を眺めている。二十代後半、長身、痩せ型、優男風の色男の顔ま

では確認できなかったが、遠目から見ても、上等な衣を纏っているのが分かる。つまり、生まれつきの坊ちゃんなの形だ。

おれんは強張っていた。長吉は気遣わず、質問を続けた。

「なぜ、あんたの倅が島から戻ったことを教えてくれなかったんだい。そういう約束だったろう」

「……」

「あれは、あんたの馬鹿息子に違いねえな？」

長吉は鋭い声を出した。おれんは、膝立ちから腰を落としてうつむいた。細帯だけで浴衣の前を止めた衿は広がり、四十路にしては滑らかに白い、それでいてふくよかな胸元が露わになっていた。夏のぎらぎらとした日の射し込む下で、よくよく見るとおれんの、鬢や、鬚には、白いものが目立っていた。目尻と口元のしわが、年輪の残酷さを見せつけた。

「だって、用が無くなったら、あなた、わたしを捨てるでしょう……」

「……」

「……」

「別れたくない……」

裾を分けて覗く長吉の臍に、おれんは縋るように腕を絡めた。長吉の胸に、この女への愛しさが湧いてきた。長吉はしゃがみ込み、一度おれんの臍を強く抱いてやると、「じゃあ」と言って立ち上がった。

「待って、お金は？要らないのかい？」

叫びながら、いつものように二分を包んだ紙を懐へ押し入れるおれんを、長吉はまた抱き締めてやってから、駆けだした。

「次の月も、その次の月も待ってる、ここで」

と、泣き声が交じる、おれんの言葉を無視し、殆ど転げ落ちるようにして階段を駆け下り、女中やおかみに、いつもきれいだねと、お愛想は忘れずに言い、顔を赤くした女中が慌てて揃えた草履を掴んで店を出た。店の軒先に、無宿者のような、垢にまみれた男が転がっていた。その男の前に腕組みをする、良く肥えた店主がしたこ

とどとわかり腹が立ったが、いまそれに構っていられない。長吉は、挨拶をする店主を突き飛ばし、道脇に、ダンゴ虫のように丸まる店主を一瞥すると駆け出した。

「待ってるよ、おせん」

声に出して叫んでいた。彦五郎と思われる男は、遠目から見ても薄気味悪い野郎だった。裕福な商家に生まれついたので島送りとなるような放蕩息子は、江戸に戻って来て改心した素振りがない。奴は必ずおせんに危害を加えるだろうと考えた。実の親父が、大枚を叩いて身請けした女を、親父が死んだ後だとはいえ、横取りした男だ。まだ親父が元気なころから、おせんを狙っていた節がある。都合良く親父が死んだから良かったものの、もしあのまま生き続けていた場合、どうしたものか分からない不気味さが、彦五郎から感じられた。

いつもなら重い足取りで、ふらふら、のたのたと帰るこの道のりが、今日は随分と遠く思えた。途中、知り合いの棒手振りにぶつかりそうになり、除けたところを天秤棒の先で頬を打たれた。わざとじゃない、長吉の除け方が悪かったのだ。相手は危うく甘酒の樽を落としてしまいそうになり、真赤な顔をして長吉を罵った。

「長吉、この色魔野郎。また女のところか」

「違う、悪いな」

と、片手拝みで後ろ向きに歩いたものだから、背後にいる人間にもぶつかつた。棒手振りの赤い顔が一気に青ざめたのを見て、心臓が止まりそうになった。ぶつかつた時の感触が、どうも堅かった。堅いと思った瞬間に跳ね返されていた。まずいことになったぞと思いなから振り返ると、そこには誰の眼から見ても堅気とは思えない男が二人、このクソ暑い日に懷手で突っ立っている。にやにやとした笑顔が、恐怖心を煽った。

「申し訳なかつた、先を急ぐ御免」

と、緊張のせいで武士のような口調になっていた。見下ろす彼等の脇を、腰を曲げた商人のような恰好ですり抜けようとしたら、こ

らつと、猫の子のように衿上を掴まれて引き戻された。

「ちえつ面倒臭せえ。」

気の短い長吉は、やくざもんと喧嘩はしよつちゆうだったが、それには大義が必用だった。弱い者が理不尽に虐められている様子を見ると、後先考えずに加勢をしてしまいが、いまはそういったような理由がない。この場合、非があるのは、後ろ向きで歩いた自分なのだ。

長吉は、さつき、おれんから受け取った、一分銀が二枚入った包み紙を、懐から取り出すと、膝をついて、両手で掲げた。

「おい、おかめ」

漸く店の暖簾を上げた長吉の目に飛び込んできたのは、店先の框に腰掛けて、睨むように慥然と長吉を見るおせんだった。外に彦五郎の姿は見えず、血相を変えて入ったので、手前に座るおせんを踏みつけそうになつたくらいだ。

「何やってたんだい、お前さん」

おせんは薄気味悪い笑顔を作っていた。こういう表情の時は、あまり関わり合いにならない方が良いことを、長年の付き合いで知っている。

「何をそんなに慌ててんだい、お前さん」

言葉尻を強く発するのは、おせんが、長吉にとっては良くない情報を仕入れた時である。長吉の目が泳ぐ。

「お前さん、お前さんつて、おつかない呼び方をするんじゃないやねえよ」

「おつかないとは何だい？」
おせんは立ちあがって長吉に胸を押しつけるようにして顎を上げた。

「そりゃ、おめえ、黙って出掛けたのは悪いよ、だけどよう、最初に言つただろう。俺は月に一度、朝湯に浸らねえと、細かい作業をする手が動かねえつて」

まだ肩で息をしている長吉は、おせんから目を逸らし後ろを向く

と、暖簾の間から首だけ出して外にちらちら眼を配った。まだそこらに彦五郎がいるような気がしていたのだ。油断は出来なかった。その背後から、おせんの声が突いてきた。

「へーそうかい。でもね、出掛けるのはいつも昼頃じゃないか、湯屋なら朝五つ（８時）から開いてんだよ、お前さん」

「だからよ、お前さん、お前さんって、最後に怖い声で言うんじゃねえよ。言い方がどこかおかしいだろう、言い方が……」

どこか尻窄みに言っていると、長吉は、おせんを押し退けて店に上がった。

「あつ」とおせんが声を上げた。

「お前さん、なんで裸足なんだい。湯に入っただけで来たんだろう汚いじゃないか、草履はどうしたんだよ」

おせんは長吉を畳の上から押し出すと、腰に絡みついて後ろに手を回し、草履を探した。土間も隅々まで見ている。だが草履はどこにも見当たらないので、おせんの目が厳しい光りを帯びた。長吉は焦った。さつき道端で、棒手振りか、やくざ風の男とぶつかった時きつと落としてしまったのだ。おせんのことか心配で、早くその場を切り抜けたくて、草履を落としたことも、捨てることも忘れていた。「お前が……そろそろ、なんだな、あの、仕事に出掛ける時刻だと思つてよ、小梅もいるし」

長吉はこれ幸いと居間に向かつておーい小梅、ちゃんが帰ったよと叫んだ。だが小梅からの返事も、ぱたぱたとした足音が駆け寄る気配もない。

「小梅なら握り飯を食べて寝てるよ、起こさないでおくれ」

と、おせんに冷めた声でたしなめられただけだった。仕方なく長吉は、おせんに愛想笑い浮かべた。

「小梅もいるしよ、急いで戻って来たもんで、草履を忘れちゃったんだよ」

「どっこいよ」

「どっこいよお前、湯屋に決まってるだろうよ……」

おせんは腕組みを解いて、長吉の懐を掴んで引き寄せた。おせんは框の上、長吉は土間に立っていたので、おせんにとって丁度いいところに長吉の胸がある。引き寄せた手を緩めないまま、長吉の首筋の臭いをくんくん嗅いだ。長吉は、天に拝むように両目をきつく瞑った。

「汗臭い」

懐を離し、鼻を摘んで顔を歪めた。

「だから言っただろう、焦って湯から駆けて来たから汗を掻いたんだよ」

おれんと一戦交えた後だ。長吉は蒼白くなりながら、おせんの胸を押して、自分も後ろに下がった。

「駆けて来たって、湯屋はその道曲がった角じゃないか」

押されて、少しよろめいたおせんだが、すぐに体勢を立て直し、武家屋敷の堀に囲まれるようにして立つ湯屋の方へ顎をしゃくつた。「だから急いで来たんだよ、こっ蒸し暑いんだ、湯から出た途端に汗まみれになるだろう、なっ？」

長吉は問うように言うが、おせんの疑惑は晴れていないようだ。眼を薄くして斜に構え、長吉の上から下まで、まるで汚いものでも見るように眺めた。

「さつきから、急いでとか、焦ってとか言うけどね、今日まいつもよりも随分と帰りは早い方だよ。まだお天道様は天辺に登ったばかりじゃないか、お前さん」

「いやな女だねお前も。何を疑ってんだか皆目見当がつかねえけどよ、俺は、お前に隠さなくちゃならないことはこれっぽっちもしてねえと、昨夜も言っただろう。人を疑うのもいい加減にしゃがれ」

長吉は吐き捨てるように言うと、どかんと框に座り、すすぎを用意しろ、おかめと怒鳴った。まともに戦っても勝ち目はない。ここは怒鳴り散らすに限ると考えた。

「昼飯は食べるのかい、腹が減ってるだろう、お前さん」

と、居間に下がる前、おせんは厭味な口調で言った。長吉は胃を

押さえ、もちろんだと、威勢良く言ったが、実のところ、おれんと食べたばかりで、おまけに緊張と、走ったせいで吐き気さえしていた。彦五郎のことは、どういうわけか、おせんに聞き出せないでいたし、おせんから、彦五郎のことを打ち明けてくる気配もない。長吉が料理屋の二階で逢瀬を繰り返しているのは、彦五郎の実母である。彦五郎の名を口にするだけで、穩便に、平和に暮らし始めた三人の生活に綻びを、現れる気がした。

黄昏の色が濃くなっても、灼けるような暑さが残っていた。おせんは、手拭いで顔を覆ってあじの干物を焼いていた。おせんと同じ様に頬被りし、たすき掛けした小梅も、七輪の脇にしゃがんで団扇を扇いでいる。おせんが涙を流して咳き込んだ。

「だからね、そこから仰ぐと、おつかあの顔に煙りがかかるって言うてるだろう」

おせんは団扇で反撃するように、小梅に向かって扇いだ。今度は小梅が咳き込み、立ちあがって手拭いを外すと、大袈裟に腰を何度も曲げて何度も咳を繰り返した。何か異物でも吐き出すようなおえーっという言葉交えている。

「全くもう」

その姿がかわいくて、おせんはついつい微笑んだが、すぐに、生まれつき憂いを含んだ目を伏せては、今日一日に起きたことを考えていた。昼前、長吉はこっそり店を抜け出して、昼過ぎに戻ってきた。一月前と違って、石鹸の匂いが香ったが、未だに疑惑は持ち続けたままだ。彦五郎に至っては、あれから姿を見せないことが逆に不気味な気がしていた。あの日、おせんを前にした彦五郎は、店の奥にじりじり下がったおせんの腕を、契れるような強さで握り、乱暴に引き寄せると、ためえ裏切りやがったなど、凶暴な目を近づけた。彦五郎が吐いた言葉はそれだけだったが、彦五郎の目の奥に、執念に近い憎悪の色を見た。愛とか恋とか、そういう甘美なものとは明らかに違っていた。昔、犬ころのように殴られた記憶が蘇り、

おせんは恐怖に打ちひしがれた。それでも小梅が店に出て来ないことを祈りながら、話しがあるなら他で聞くからと声を低く言う。おせんは血走った目と目尻を下げて、声を立てずに笑った。おせんの躰に戦慄が走った。殺されるかもと、恐怖におののいた。それと同時に、目の前にいる、甘やかされて育ったお坊ちゃんを哀れんだ。手をはなして下さいよと、躰を払い、藻掻いていると、長吉と、小梅、この三人の生活を守りたいという気持が、恐怖よりも強くなった。怯えが消え失せたその時、偶然にも、二人連れの娘が入ってきた。

伝統のある商家の血統がそうさせるのか、彦五郎は、馬鹿でも対面を気にする。二人で暮らしていた時だって、人前では、おせんに手を上げたことがない。おせんが泣き叫ぶし、ものが壊れる音がするし、彦五郎の怒鳴り声は響くはで、彦五郎の、おせんへの執拗な打擲は、裏店中に筒抜けなのだが、彦五郎はそこまで頭が廻らないのか、近所の誰かが止めに入ってきて来ると、おせんの鬚を掴んで、拳を振り上げていた手をぴたりと止めて、何でもありませんよと笑顔を見せていた。

この時も彦五郎は、若い娘が入って来たのと同時におせんを開放し、じゅつと手を上げて店の外へ出て行った。
―諦めてくれたのかな。

そう思わない節がない訳じゃない。次男といえども、彦五郎には家族がある。人生をやり直す基盤があるのだから、おせんなんかに固執し、むざむざ牢屋に逆戻りすることはないのだ。おせんは、彦五郎が賢い選択をしてくれることを祈った。

それにしても、腹が立つのは長吉である。いまも店で、木屑にまみれて仕事をしているが、時たま、居間や台所、小さな坪庭と、おせんが居そうな場所に顔を覗かせては、腹が減ったような気がする。など、わざとらしく胃の辺りを擦って見せる。今朝は飯を食べさせたが、昼は長吉の帰る前に、小梅と二人で昼食を掻っ込んで、長吉の帰宅には、飯が米びつに残らない状態にした。

いつもは苦しそうに昼飯を押し込む長吉が、今日に限って腹をぐーぐー鳴らせているのが可笑しくて、おせんは隠れて笑った。今日は珍しく昼飯を食べて来てないようだと思いつつも、おせんにも仕事の時刻が迫っていて、こさえてあげる暇がなかった。三日も腹を空かせてる子供のような、情けない顔をした長吉に、後ろ髪を引かれながらも、仕事に走って行ったおせんだが、得意先の客から妙なことを耳にした。昼ごろ高橋を渡る長吉を見たと言うのだ。証言したのは礼によってお喋り好きの永代橋付近に住む女の客だが、筋張った喉を持つこの客は、用事があって、長桂寺に出向いた帰りに長吉を見掛けたらしいのだ。長桂寺は、常磐町を北へ進んで最初の堀の角にある寺だ。なんでも孫が生まれたお祝いに、こさえた赤飯を吉事だということで、日頃世話になっている寺の住職に届けたいののだが、

「そこまで来たならうちの店に寄ってくれば楽だったのに。」

と、同じく、ささげがふんだんに入った赤飯を頂いたおせんは、自分に都合の良いことを考えていた。

「それで、うちの人、どこに行っただんですかね？」

「それがさ……」

客の女は口籠もった。しかし黙っているつもりはないらしい。上げた顔には戸惑いの色は見られなかった。寧ろ他人のいざこざを愉しんでいる風だ。

「ちようど高橋のたもとに、こぢんまりとした料理屋があるんだけどね、看板も出てないから、あんたは知らないかも知れないけど、そこは実は出合茶屋のようなところさ、とは言っても本格的な出合茶屋じゃないからね、出入り口が一つしかないのが難で、あそこで密会すると、見つかり易いと言われているんだよ。けどその店は繁盛していてね、結構、上等な料理を出すらしいよ。そこに入っ行ったよ、おせんちゃんの亭主」

射すような日差しが、背中をじりじりと焼く中、汗を拭うのも忘れ

て、おせんは帰路についていた。左手に見える大川には、大小の舟が忙しく行き交い、涼しげな水音を立てている。右手に並ぶ武家屋敷の白壁の照り返しに眼を細め、手をかざしながら歩いていると、灼熱の中、日向に蹲る薄汚い形をした男を見た。

「あの、どうされましたか？」

顔を覗き込もうとすると、男は、髭だらけの顎を衿に埋めた。顔をしかめたくくなるような悪臭が鼻をついた。

「腹が空いてるんじゃないんですか？」

と尋ねたのは、男の腹が、昼間の長吉の様にぐーぐー音を鳴らしたからだ。男は何も言わなかったが、おせんは、客から貰った赤飯と、水の入った竹筒を差し出した。真夏だというのに、ぼろ布をたくさん纏った男は、垢と汗の混じった堪えがたい異臭を発していた。それが余計におせんの胸を締め付けた。茫然と蹲る男に、

「日陰に移りましょうか」

と言葉をかけて、男の、垢で汚れた手首を掴んで柳に木の下まで導いた。立つと意外に大きな男だったが、威圧感や、恐怖に似たものは、ふしぎと感じなかった。武家屋敷の塀では都合が悪いので、隣接する霊雲院の土壁越しに座らせた。寺の庭から騒がしいほどの蝉の音がしたが、爽やかな風が吹き通る場所でもあった。

「いい事をした。」

おせんの満足した足取りはすぐに重くなった。男を置いて来た霊雲院から自宅までは眼と鼻の先である。本当に心配なら、家に連れ帰って行水でもさせてあげれば良かったのだ。それを、長吉の浮気を示唆する口の軽い客に苛立ち、客のくれた赤飯をごみ同然に男に与えことへの少しの苛みで、竹筒をあげて、卑しい自分の行為を隠そうとしただけのような気がしたのだ。

「こんなことだから、夫に浮気をされるんだ。」

おせんは、急ぎ足で男を置き去りにした寺に引き返したが、既にそこから、男の姿は消えていた。

夕餉の仕度が調うのを見計らったように、長吉が居間に入って来

た。おせんの機嫌を伺うような態度はまだ続いている。おせんもおせんで、浮気の証拠を掴んだばかりだ。臨戦態勢を崩していない。機嫌の悪い時のおせんの癖だが、瞼をひくひくと動かして、顎をしやくるような話し方をする。自分で意識してるわけではない、自然とそうなってしまうのだ。

「旨そうだな、なあ小梅。おつかあの作るおまんまがいちばん美味しいな？」

「うん」

小梅が箸を持った手で口をおさえてうなずいた。頬はこれでもかというほど沢山の飯を詰めて膨らんでいる。

「お箸を持ちながらだらしない」

おせんが小梅の手の甲を軽く叩いた。

「おいおい、なんだよ」

「賤けのなつてない子だね。あんたが甘やかすからだよ。ほらっ、また米をこぼした。」

気にしないで食べ続ける小梅に眼を細め、その同じ眼を横にずらせておせんを睨んだ長吉が、とうとう憤懣を爆発させた。

「文句があるなら俺に言えばいいだろう。それをむすーつとふてくされて揚げ句の果てには娘に当たるとはどういう見だ」

長吉は、片膝を上げておせんの衿を掴んだ。おせんは構わず、ふふっと薄ら笑いを浮かべると、

「昼間っから店をほっぽり出して、料理屋に引き籠もるとは、いいご身分だね、お前さん」

と、長吉の顔も見ずに斜を向いて言った。長吉は言葉も出ない。おせんは勝ち誇ったような顔で、小梅のあじの小骨を取ってやっている。甘やかしたらいけないと思いつながらも、以前、魚の骨を喉に刺した小梅が、喉が痛いと言ってきた。ご飯粒を丸めて飲み込ませても一向に骨は取れず、仕方がないので、おせんが小梅を押さえ込み、長吉が小梅の口を開けさせて、裏店のおとき婆さんが、とげ抜きで骨を抜き取るという大騒動を起こしたことがある。あんな風に

うんざりと疲れるくらいなら、最初から魚の小骨を取ってあげた方が良いという考えに、その夜を境に変わった。

「それはお前、昼飯に誘われたんだよ、……あの、ほれ、なんだ、いつも湯屋の二階で会う知り合いによ」

さすがに長吉は青くなっている。おせんの衿を離すと、腰をがくつと落とし、胡座を掻きなおして汁を飲んだ。喉が渴いて声も出ないといった様子である。おせんは眼の端でその姿を見ながら、片手で衿の乱れを正した。

「金はどうしたんだい、そのお友達が払ってくれたのかい、お前さん」

「そりゃ、そうさ、俺にそんな余分な金がある訳ないだろう、ハハハハ」

「だったら今度、挨拶に行かなきゃいけないね。餅菓子が買ってさ、なんていったかね、林町の菓子屋の名、そのよもぎ餅が絶品らしいよ、近江屋っていったかね？」

「挨拶なんて要らねえよ、餓鬼じゃあるまいし……フフ」

「そんな訳にはいかないよ。町内の湯に通ってるってことは、その、なんとかって人は、この近所に住んでるってことでしょうか？顔を合わす機会だつて、もしかしたらあるかも知れないじゃないか」

「会わねえよ」

「なんでさ」

おせんはつつかかった。

「お、お武家だからだよ」

「へーつあんたにしては大層なお友達だね、湯屋の二階であれかい、そのお武家さんも一緒に女湯でも覗いてるのかい。だいたいなんの義理があつて、お武家さんが、お前さんに飯を驕ってくれるんだろうねえ」おせんが挑み掛かった時、小梅が味噌汁の椀を引つ繰り返した。

「あつ……あーあ……ごめんなさい」

「あーつあーつて小梅……」それまで、もくもくと食事を口に運び

ながら、単調で話し続ける母親と、口籠もって答える父親を交互に見ていた小梅がとうとうやってしまった。一瞬、がくと首をうなだれたおせんだが、素早く台所に走って行って雑巾を持って来ると、馴れた手付きで畳にぶちまけられた味噌汁を拭きだした。おせんに怒られると察した小梅が汁で汚した膝のまま、部屋の隅に逃げようとした。

「小梅、動くんじゃない」

おせんは嗜めると、何もしないで飯を食い続ける長吉をちらちら見ながら、小梅の小袖を脱がした。かわいい金魚の絵柄だが、白地はくつきりと茶色のシミを付けていた。

「縫い上げたばかりなのにな、残念」

「おつかあ、ごめんね……」

「いいよ」

涙を浮かべて謝る小梅に微笑み掛け、台所に戻ったところには、先程までじりじりと胸を蝕んでいた嫉妬も、どこかへ消えていた。

「あの人が男友達の侍と料理屋に行ったというのなら、それでいいじゃないか。」

この頃は大切にされているし、数ヶ月様子を見て、また考えればいいと寛大な気持にさえなっていた。男に股を広げて、自由にされることで稼いでいた自分を嫁にしてくれた人なんだあの人は、贅沢を言えば罰が当たる。多少生活の中に、不安を抱えていた方が、きつとしあわせは逃げないと、誰に教えられた訳でもないが、おせんは漠然とそう信じ込んでいた。

湯屋から戻ると、長吉は縁側に座り、灯りもない庭に眼を向けていた。食事の後、三人で湯屋へ出掛けた。今宵は涼しい風が吹いていたので、少し遠回りをして帰ったのだ。家まですぐそこというところで、昼間、遊んで疲れた小梅がとうとうとしだし、長吉が抱いて二階に運んだ。上で細々とした仕事を片付けて下へ降りてきたおせんは、妙に憂いのある亭主の後ろ姿を見たのだ。

おせんは足音を忍ばせるようにして台所に入ると、買ってから数

日が経つが開けていない一升徳利を下げ隣りに座った。長吉はおせんと酒を見比べるような顔をして、少し微笑んだが、またすぐに暗い庭に目を落とした。

その時の長吉の頭には、料理屋の二階で、鬼女のような顔をして泣き喚くおれんの容貌が映っていた。身震いがするほど怖かった。別れを切りだす前までは、歳のわりには、たるみのない顔にうつすらと笑みを浮かべて、長吉に寄り添う素振りを見せていたおれんが、突如として暴れ出したのだ。

長吉はおれんを好きだった。見目麗しい女だし、未練が全くないと言えは嘘になる。しかし彦五郎が島から帰ったことを隠したおれんに憤りを覚えていた。また、彦五郎が戻ったいま、おれんと繋がっている意味はないようにも思えた。第一、おせんが勘付き始めている。

「一月にたった一度だけの関係じゃないか」

と、別れを拒むおれんが変貌したのは、別れ話から四半刻あまりした時だった。

「ばかやろう」

と大声を張り上げ、長吉が造ってやった唐木細工の簪で喉を突こうとした。店の者までが、総出になる騒ぎをどうにかこうにか抑えて家に帰ろうとする長吉を、おれんは汚い言葉で罵った。

「ぶっ殺してやる。お前も、女房も、娘もみんな不幸になればいいんだ。人を馬鹿にしゃがって、この野郎っ」

これまでも、女との別れ際には、ある程度の愁嘆場を味わっては来たが、ここまで気を遣えた女の姿を目の当たりにしたのは初めてだった。家族を襲われはしないか、どうしようもない恐怖が全身を凍らせた。

「おせん、ここを出ようと思うが、それでもいいか？」

暗い庭を見つめながら長吉が言った。おせんは全てを察したような顔をしていた。うなずきながら涙を流した。

「また、すずめ長屋で暮らそうよ。あたし好きだよ、あの汚い裏店

と騒がしい人達。それにね、お前さんと小梅が居れば、どこでだつて、あたし、しあわせだもん」

うつむいて顔を覆うおせんさんの肩を引き寄せた長吉もまた、おれんを利用したことへの後悔に、涙を滲ませていた。

悔恨

海辺大工町を引き払い、すずめ長屋へ越して十日ほどがすぎた。以前、住んでいた家は、おせんが越してすぐに借り手が見つかったらしく、今は中年の夫婦が十五、六と見える娘と三人で暮らしている。父親は魚の棒手振り、母親の方は針子をしているらしい。一見して気のよさそうな人達で、娘は回向院の境内の水茶屋で働いている。それを娘から聞いた長吉が、ぎよと眼を見開いたので、後でおせんに問い詰められたが、一年以上前、お鶴と、小梅の三人で寄ったことは、とことん隠し通した。

娘は小柄の可愛い感じのする子で、翌年にも夫婦約束をした男の元へ嫁ぐのだと、越してきた挨拶に向いた時、母親が愉しげに話してくれた。部屋の奥で聞いてた父親の寂しそうな表情は、その娘が一人っ子だからだろう。長吉もおせんも顔を見合わせて、眼だけで言葉を交わした。二人とも、一人娘の小梅のことを考えていたのだ。

つい先日のこと、引越の荷物も片付けが一段落し、冷やした麦湯を手にした二人は、暫く黙って、小梅の幼馴染みの子供達の発する黄色い喚声に耳を澄ませていた。その中に、小梅の声音を探していたが、相変わらず小梅の声は聞こえて来なかった。

小梅は四歳になるが、未だ人前で声を出すことを躊躇する節がある。だからと言って人嫌いなのではなく、率先して大きいお姉ちゃんやお兄ちゃんに交じって遊ぼうとする。しかし、小さい上に、何も言語を発しない小梅は、親が気が付いた時には、一人ぼつんとしていることが多かった。

家の中でもそう言葉数は多い方ではない。それでも豊かな表情で、感情の起伏を表現してくれた。長吉もおせんも、そんな小梅を次第に案ずるようになってきた。それこそ二歳や三歳までは、ただ言葉の遅い子で済ませていたのだが、四歳にもなると、小梅を奇怪な眼

で見る大人の視線が気になりだした。最近では、言葉だけではなく、日々の暮らして垣間見る、小梅の行動の幼稚さも目立つ。兄弟姉妹がいないので、舐めるように育てたことが原因かとも思われたが、近所の同じ歳の子に引き比べて、物覚えなども遅れているような気がしてきた。長吉たち一家が住むのは回向院裏の松坂町だが、もし小梅を連れて両国橋を渡り、西詰で置いてけぼりにでもしたら、小梅はきつと戻って来ることが出来ないだろう。その距離は、江戸に暮らす大人の歩幅で往復、小半時も掛からない。例えば、やさしい大人に声を掛けられ、家はどこ？名は？と問われても、人と話す事が苦手な小梅は、き押し黙ったまま相手を見据えているだけに違くない。小梅のような娘は、人攫いには絶好だと思われるので、小梅から一時も眼を離すことができないでいた。

「小梅はさ、あたしたちが守ってやるうね」

おせんがぼつりと言つと、お前も同じことを考えていたのかと、長吉はうなずいた。夫婦の眼に、涙が膨れ上がった。あの魚売りの夫婦の娘のように、嫁に行ってしまうのは寂しいけれど、自分たちが経験したような激しく、心が震えるような恋もさせてあげたい。小梅は、両親の良い所だけを受け継いだ、かわいい顔立ちをしている。目だつて、少し埴輪に似ているが、黒々とした、賢そうな瞳を持っている。

「小梅のことは俺たちがついている。何か悪口でも言う奴がいたら、それに負けない強さをつけてやらなくちゃな」

おせんに泣き顔を見せないように、開け放った障子の向こうを見ながら、長吉は言った。

「五体満足がいちばんだ、……小梅は躰が弱いが、三日も寝込めば、すぐに元気になるじゃないか、とにかく生きていてくれればいい」
「そつだよね」

長吉は、炎天下の引越作業で、赤く焼けた鼻の頭を擦りながら新居の中を見回した。家の裏手になる狭い道を、大小の子供達が駆け抜けて行った。長吉たちが座る茶の間のすぐ横を通つたのだ。さつ

きまで小梅と遊んでいた子供達だ。奇声と共に彼等が去ると、その後ろを追い掛ける小梅がいた。

「小梅」

両親の呼び掛けに、一度は濡れ縁に足を掛けた小梅だが、すぐにみんなの去った方に眼をやって、駆け出そうとした。それを長吉は抱き留めた。

「なあ、小梅、ちゃんと、おつかあの三人で、冷やし水を食べに行こうや、な」

「……うーん、あとで」

少しだけ悩む表情を見せて小梅は、遠くで聞こえる子供達の声の方を指さした。

「小梅、ちゃんたちと遊んだ方が楽しいぞ」

長吉は頬摺りをしながら言った。小梅は厭そうに顔を背け、まだ遠くに消える声の方を指さしている。

「お前さん」

おせんは少しだけ声を張り、長吉に向いて首を振った。長吉は悲しい笑顔を見せた。

「でもようお前、俺は小梅が不憫でならねえ」

長吉はそう言って小梅を下ろした。そこに、七歳のお姉ちゃんが駆けて来た。いちばん奥の家に住み、父親が手習所で先生をやってる浪人の娘だった。

「小梅ちゃんごめんね気づかなくて」

照れたように笑う小梅の手を取ると、おすえおばちゃんに叱られちゃいましたと、軽く一礼して、また早歩きで去って行った。

「お前さん、小梅を強くするって、たったいま言ったばかりじゃないか、もう駄目ね」

おせんが笑うと、

「仕方ねえな、どうも俺は過保護のようだと、首を傾げて反省する仕草を見せた。」

何事もなく日だけが過ぎて、暦の上では初秋を迎えていたが、未だ夏の暑さは続いている。ただ日没の時刻だけは、これから来る厳しい季節の訪れを報せた。人々が店じまいを始める前に、町は茜色に包まれる。空で遊ぶ小鳥たちの中にも、冬の到来を思わせる渡り鳥が交わっていた。

「おかめよ、ちと気になることがあるんだ」

「ん……お前さん、どうしたの？」

外で遊んでいる小梅の様子を見てきたおせんは、二階への梯子の脇で、注文の品を造る長吉の前に膝を寄せた。

「気のせいだとは思っただけどよ、長屋の連中の目が気になってな……なんかこう、二度見されるといっつか、含み笑いをしているような……気のせいかな、そうだよな？」

長吉は首をかしげながらも、手だけは動かしていた。今は黒壇の箸の磨きに取り掛かっている、一時期は消えかけていた右手中指のかななダコも、この一年半、仕事を休まず続けてきたおかげで、堅い盛り上がりを見せていた。長吉は越して来てからも唐木職の仕事を続けていた。この裏店では、前のような店舗を構える広さはないが、その都度、都度注文を取り、製作をするという遣り方でも、親子三人暮らすのに困ることはなかった。海辺大工町の表店にいた時に、多くの常連客を確保することができたことも長吉の自信に繋がっている。おせんを蔑む、前の親方の元へは死んでも戻る気はなかった。

長吉は、おせんに髪結いの仕事を辞めさせていた。彦五郎や、おれんの動向も気になり、一人で遠くに行かせることを懸念したのだ。しかしおせんにはまだ、彦五郎のことも、当然、おれんとのことも打ち明けていない。おせんもまた、彦五郎が店を訪ねて来たことを長吉に告白しないで一人で解決しようとしていた。

「そう……そう思っの？」

たすきを外し、膝の上で折り畳みながらおせんは小さくうなずいた。

「お前もそう感じるか？」

「そうね」

おせんは言うど、ふっと息を吐き出した。

「喋っちゃったのよ、あのこと」

「……」

「お前さんが、小梅を連れてここを出て行ったときね、裏店の人達が、お前さんを人でなしのような言い方をしたからさ、あたし堪らなくなつて、過去にあたしが躰を売っていたことが原因だつて、言っちゃったんだ」

おせんはチ口と舌を出して首をすばめた。微笑んでいたが、眼は涙で赤く染まつている。

「ばか野郎」

「だつてお前さん、あたし、お前さんのことを悪く言われるのが、いちばんいやなんだよ」

「俺のことなんて気にすることはなかったんだ、お前の宝物の小梅を連れ、お前を一人にして出て行った俺のことなんてよ」

長吉の声は泣いていた。肩を落とし、作業の手を止めた。

「お前さんが、親方と大喧嘩したのも、あれから働かなくなったのも、あたしがお前さんを騙していたせいだもの。お前さんを何年も悪者にして悪かったと思つてるんだよ」

「ばかな……」

背を向けて肩を震わす長吉に、おせんは躰ごとぶつかると同時に抱きついた。

「お前さん、ごめんね」

「そういうことは、もうちょっと前に言えよな、おかめ」

「……」

「だったらよ、ここに越して来るこたねえだろう。俺の腕だけで食べていけるんだ、住むところなら、どこだつて良かったじゃねえか」

「ごめん……あたし、ここがすきなんだよね、だつて、お前さんと
の想い出が詰まつてるんだもん」

「また少ししたら、何処か他の町へ、遠くの町へ越そうや。いや、俺の対面なんかじゃなねえぞ。お前のためだ」

その夜、二人は初めて全てを打ち明け合った。隠し事は一切なし。何を聞いても驚かず、責めず、大人の対応で過去を許しあおうと、都合の良いことを言ったのは長吉の方である。

まずはおせんの方から洗い浚い話した。神田の実家のこと、家族の死、身売り同然に淫売宿に奉公に出たこと、美濃屋の妾として過ごした日々、彦五郎との生活、そして彦五郎が訪ねて来たことなどが、その内容は、長吉を特段、驚かせなかった。というのもその話しの殆ど全て、長吉は承知していたからだ。

問題は長吉の告白だが、長吉は再度、許し合う約束を確認すると、小梅を連れ、おせんの過去を調べ歩いたことを告白。彦五郎を料理屋の二階から見ただけ、そして、もう一度だけ、怒らない約束を確かめると、締まりの悪い顔で、おれんとの情事を打ち明けた。

「昨夜は随分と派手にやってたね、うちまで丸聞こえたよ」

「うるせえや、おすえ」

井戸で顔を洗う長吉の背後で、里芋を盛った箸を持ったおすえが笑っている。

「あんのあまア、許してあげるからなんでも言って頂戴。なんて首をかして微笑んでたから、洗いざらいぶちまけたら、急に怒りだしやがって、話しが違うつてんだよ」

くどくど文句を吐きながら立ちあがった長吉は、昨夜の、おせんとの喧嘩を思い出して、未だ憤慨が消えないようだ。首から提げた手拭いの端を両手で持って、肩が凝ったように首を回している。

「また何かしでかしたのかい、女だろう、ふん、懲りない男だね、あんたも」

おすえは、里芋が全て半分に割れてしまつのでは思つほど、力を込めて泥を落としていた。

「女は女でも昔の話しさ、それを蒸し返しやがってよ、今、浮気し

てきたが如く剣幕で怒るんだから、ここっちは堪んねえや」

ちえつと長吉は舌打ちをして、怒らなねえって言ったくせによ、
と言いなながら、秋になり、高くなつた空を見上げた。大きな雲がひ
とつ、ぽつんとあるだけの空だった。目のすぐ脇に、おせんに引つ
搔かれた傷がある。指先でそつと傷口に触れた長吉は、イテテと顔
を歪めると、眉を寄せた情けない顔で、指についた血を見つめた。

「あれは死んだら化けて出る性質だな」

おすえの方を向くと、朝日が眩しかった。長吉は目を細めながら
話した。

「なんのことだい？」

「うちのかかあだよ」

長吉は腰を屈めておすえの隣りに寄つた。おすえは洗い終えた里
芋が入つた箆を膝の前で抱えている。

「あの女の恪気癖はどうにかならねえもんかね」

「簡単なことさ、あんたが浮気しなければいいんだよ」

「だから、もうしてねえよ」

大袈裟に首を項垂れた長吉は、子供のよつに膝を抱き込んだ。

「昔のことで怒ってんだよ、あのおかめは」

「昔っていつのことさ？」

「二月、いや、関係があつたのは、三月も前も話したよ」

「はあ？」

おすえ呆れた顔をすると立ちあがつた。

「もう三月じゃなくて、まだ三月って言うんだよ、ばかだね、あんな
た」

「うるせえ」

長吉が怒鳴つた時、おせんがやって来た。顔が怒っている。どい
てよ、と長吉に腰をぶつけて場所を取つた。

「お前ねえ、他にも空いてる場所があえるだろつ？」

長吉は、ホレ、ホレと井戸の反対側を指さした。おせんは長吉を
見よつともしない。

「余計なことばかり話してないで、とつとと仕事始めたらどうだい、注文がたくさん来てんだろつ、殆どが女の客だけどね、色魔」

最後の方は、吐き捨てるように言った。長吉は、いちいちいちち蒸し返す女だねえ、と言いなから立ちあがると、腰に手を置いて躰を反らせた。深く疲れたような溜息を漏らし、横目でおせんを一瞥すると、たらたらとした足取りで、物干しの場の向かいに移った家へ戻って行った。

「仕様のない男だね」

おすえは笑っていた。肥った腹を突き出して、長吉を見ている。

長身の長吉は、鴨居に頭をぶつけぬよう、首を曲げて敷居を跨ぐのだが、その前にちらと、おせんの方を見た。

「おせんちゃんの怒る気持ちもわかるけどさ、お宅の亭主は、ありや一生治らない病気だよ。鯔背で男つぷりがいい。女の方がほつとかないんだよ、少々のは我慢すると決めて復縁したんだろつ、赦してやんなよ、あれは相当、反省している顔だよ」

「うん……でもお灸は据えないと、ほら、いい気になっちゃうじゃない」

さつき長吉に辛くあたった人物とは思えないほどの優しい笑顔でおせんは微笑んだ。

「そりゃ、そうだ。ごめんよ余計なこと言って」

おすえ前垂れを上げて目頭を拭っている。

「どうかしましたか？」

青菜を洗う手を止めて、おせんはおすえの顔を見上げた。

「了見の狭い奴らは、あんたたちを白い眼で見るけどさ、気にしちゃいけないよ」

「ああ……」

おすえは裏店の一部の人間のことを言っている。不幸な人間は、土の中に埋まつてる人の粗を掘り起こして、地上に広めることで、自分の人生はまだましだと安堵に浸ろうとするものだ。そんなことをしたところで、己の不幸は逃げて行ってはくれないのに。おせん

はそんな人間と触れ会う時、ひどく相手を哀れむ気持が生まれる。

「誰も好きでさ、躰なんか売らないんだから……あそこに越してきた」

おすえは、店賃が六百文と安い棟割り長屋の方へ眼を投げた。そこは、長吉とおせんが所帯を持ったところに暮らしていた長屋だ。

「おゆきさんて言ったかね、まだ十六、七だと思っただが、病身の母親と二人暮らしでね。昼は蕎麦屋で働いて、夜は筵むしろを抱えて河岸に立ってるって言うじゃないか、可哀想だよ。大店の、同じ年頃の娘とはさ、大違いの生活だよ。あの娘だって、悲しい思いをして身を売ってるっていうのに、全てお袋さんの薬代で消えて、古着の一枚も買えないなんて世の中、不公平すぎると思わないかい」

元来、感激屋のおすえはとうとう泣きだした。そのおすえの大きな躰を、支える様にして家に連れて行く間、この人も、悲しい過去を背負って生きてきたのではないかと、ふと思った。おすえは涙で顔をぐしゃぐしゃにしてこう繰り返した。女の不幸は公儀のせいだ。お上がしつかりしないから、まだ尻の青い娘までもが、脂ぎった男のおもちやにされるんだよ。おせんは答えることができなかった。悪いことを全て公儀の責任にする世の中の風潮に、おせんは首をかしげる。人のしあわせの形や重さなど、人それぞれ違う。

「公儀も、お侍さんも、大店の娘も、貧乏長屋のみんなも、それぞれ違った悩みがある筈。」

悪いことが起きれば人のせい。良いことは自分の努力の賜。人を羨み、己の生活を蔑み暮らすほど、悲しい生き方はないように思えるのだ。長吉にはそういつた所がないし、小梅にも、貧しい中に見つけた小さなしあわせに手を合わせるような娘に育って欲しいと思っている。

「そりゃあ、世の中、理不尽なことだらけだけどさ、お天道は万人に平等じゃない。あたしは、うつむいて歩きたくない。」

井戸端に置き忘れてきた青菜を慌てて取りに引っ返し、家に入ると、普段より、縮こまって仕事をする長吉がいた。居間の奥を見る

と、小梅が、人形の髪を梳きながら、何やら話しかけている。
ーしあわせ。

心から思った。そう思うだけで涙が滲んで来るようだった。すると次第に言い様のない不安に苛まれる。自分を包む幸福の風が、霧のように消えてしまうのではないかと思うのだ。これは現実ではなく、暗く湿った世界に生きていた自分が描いた虚構なのだ。

そう思い始めると躰が冷え、震えが起きた。歯ががくがくと鳴るほど怖くなる。長吉は、彦五郎とおれんはまだ油断がならねえと、眼を光らせている。陽が暮れる前には、必ず家にいなくちゃならえと心配していた。特に小梅からは眼を離すなど口酸っぱく言われた。大屋と、おとき婆さんだけに告げ、殆ど夜逃げのようにして海辺大工町の表店を出て来たが、いま住んでるところだって探そうとすればすぐに見つけられる。なにせ向こうには金があるのだから。

彦五郎に長吉の店を教えたのはおれんだった。別れの日、錯乱したおれんが自ら暴露した。亭主の妾となり、息子までも奪ったおせんが赦せなかつたらしい。長吉との密会の時刻に、彦五郎をおせんの元に行ったのだが、我が子に、そんな真似をさせたおれんの心中は計れない。結句、彦五郎は顔を見せただけで去り、三月もおせんの前に姿を現さずにきた。

彦五郎よりも、気になるのはやはりおれんの動きだった。今頃、血眼になって長吉を探しているような気が、おせんにはしてならなかった。おせんは、おれんと面識がある。美濃屋甚兵衛が死んだ時に会っている。歳はおせんより遙かに上だが、美貌の人だと思った。背丈もあり、細身なのに、帯に乳房が乗るほど豊かな胸に、眼が釘付けになったのを覚えている。大きく抜いた衿と、盛り上がりが見えそうほど開いた懷は、大店のおかみにふさわしくないほど色気のある風情だった。居丈高な物言いいをする女で、畏縮するおせんを、品定めするように眺めた。一通りの話しが済んで、美濃屋との一切の関わりを絶つという証文を、言われるがままに書かれた。おせんは読み書きができないので、先に用意された証文を写したただけであ

る。実際のところ、何を書いたか分からなかった。去り際に、おれんの言った一言が耳に焼きついて残った。

「米が炊けたんじゃねえのか？」

長吉はむっとした声を出した。おせんは何かに弾かれたように、はつと我に返つて、笑顔を作ると、竈かまどに向かった。釜から湯気が上がり、米の焦げた匂いがして、おせんは急に吐き気を催した。

「あつ……」

台所の脇に、胸を押さえて蹲っていると、二月ほど、月のものが出ていないことに気が付いた。吐き気は一瞬のものだったが、おせんがそのままの体勢で暫く考え込んでいると、長吉が舌打ちしながらやってきた。おせんの肩を軽く小突き、

「飯が焦げちまうじゃねえか」

と怒った口調で言った。長吉は、小梅との二人暮らしで習得した、手慣れた手付きで釜からおひつへ米を移すと、「蠅帳ハエマドの中に、沢庵が入ってるから出せ」と、怒鳴るように言い、三人分の箱膳を畳の上に並べた。

胸のむかむかは、米が炊けるたびに起こるので、あの日の朝から、毎朝、米が炊ける時を見計らっては、理由をつけて家から出た。用もないのに物干し場へゆき、朝日を燦々と浴びていると、次第に気分も優れてきた。回向院の土塀越しに、高く聳える黄金色の銀杏が美しかった。足元に何かの気配を感じ、膝を抱いてしゃがんで見ると、茶褐色の土の中にもごもごと蠢く物体を見つけた。傍に落ちていた小枝で小突くと、土の中の生物は、「あら起きる時刻を間違えた」とでも言いたそうに（と言っても姿は見えないが）踵を返す勢いで、土の奥深くに潜って行った。

「ずっと日陰に暮らしているのね」

あたしのようだ。とは、口に出さなかった。陽の当たらない星に生まれた女が、無理にお天道様に当たろうなどと思っただけではないか。近頃おせんは、言い様のない不安に襲われる。自分の人

生にしては、全てが順調すぎる。

身籠もったことは、おすえ意外、誰にも教えていない。長吉にさえ、言えないでいるのだ。

「変な人だね、あんた。」

と、おすえは笑うが、自分のような人間は、抱えきれないほどのしあわせを手にはいけないとおせんは思う。この程度の女には、しあわせの大きさにも限度がある。それ以上を求めれば、きつとどっかで歪みがでる。せめて腹の子が安定期に入るまでは隠し通そう。そしてその前に、この一家を襲う憂いの原因に、決着をつけなければならぬとおせんは思っていた。

「どこに行くつて言っただかな？」

長吉は怪訝な顔色をしている。日が高いうちでも、おせんが外出することを、あまり良しとしないのだ。彦五郎やおれんとぼったり顔を合わせるのを気にしている。

「買い物よ」

「買い物なら棒手振りで間に合うだろう、どこに行くんだよ、まさか、お前」

長吉は飛んで来るような勢いで狭い茶の間を大股で二歩進むと、土間に下りようとすのおれんの腕を掴んだ。凄まじい力だった。おせんを自分に向かせると、更にもう片方の腕も掴み、おせんをゆすった。

「美濃屋に行こうと思ってるんだったら、とんだ勘違いだぞ。大人しくしてる奴らの眼を覚まさせるだけだ」

「違うよ、お前さん……」

おせんは臍を擦って腕を振りほどこうとしたが、抵抗すればするほど、長吉の手はおせんの前腕に食い込んできた。

「俺をばかにするなよ、お前の考えそんなことはお見通しだぜ。なぜだ、なぜ余計なことをしようとする」

おせんの顔がみるみる歪み、大粒の涙が溢れた。長吉は手を緩め、おせんを抱き寄せると、顔を鬢に深く埋めた。

「怖いんだよ、お前さん。何かも失いそうで怖いのだ。だからねあ
たし、殴られても蹴られても、頭を床に擦りつけて、美濃屋のおか
みさんや、彦五郎さんに謝ろうと思ったの。罪人のように逃げ隠れ
して暮らすのは、もういや」

おせんは、おれんに投げつけられた言葉を思い出し出していた。

「お前のような薄汚い女郎に、しあわせなど訪れない！」薄汚い女
郎がしあわせになることを、おれんや彦五郎に承知して貰わなけれ
ば、真のしあわせを迎えられない気がしていた。

「怖かったな」

堅川の河岸を、小梅を挟んだ三人で歩いていた。美濃屋へ行った
帰りである。おせんが出掛けようとしたのが昼前、いまはもう、夕
焼けが町を彩る時刻になっていた。川の流れに眼を移すと、赤く染
まった雲が川面に映り込んだことで、朱と翡翠色が交ざり合い、幻
想的に輝いていた。風はなく、空気に雨の匂いがした。

「こわいね」

両親の真ん中で手をつながれ、時折、地面から足を浮かせるよう
して歩く小梅が、長吉を真似てそう言った。ふたりは可笑しくなっ
て笑った。

美濃屋の暖簾を先に潜つたのはおせんである。突然、三人で訪れ
ては、おれんを逆撫でしかねないと考えたからだ。店の者が一斉に
発した「いらっしやいませ」の言葉尻に疑問符が付いたことで、お
せんは一層畏縮した。両手を前で揃え、肩を窄めて立ち竦んでいる
と、それまで腰を曲げていた店員が、躰をこれでもかと反らせて近
づいてきた。

「あら、珍しい」

番頭らしき男の後ろから、おれんと思われる女の声が出た。

「ご無沙汰しております」

「ご無沙汰して貰わなきゃ困るわよ」

「すみません」と、何度も頭を下げるおせんを、客の眼があるから

と、おれんは一度、表に出した。店の軒先で小梅を抱く長吉を見ると、おれんは暖簾を掻き上げ手代を呼びつけて、大切なお客様だからと、奥の座敷に通すように言った。

八畳ほどの座敷は、縁側から枯山水が望める立派なものだった。張り替えたばかりの畳が、い草の良い香りを部屋いっぱい漂わせていた。おせんは膝に座った小梅が、何度も、息を大きく吸い込んでいるのが面白かった。

茶が出され、四半刻はじっと待っていた小梅も飽きが来たよう縁側に伸びる竹の筒を覗き込んだり、耳に当てたりして、子供ながらに水琴窟を愉しんでいた。

更に待たされること四半刻。漸くおれんが現れた。彦五郎も一緒だ。おれんは、若い娘の晴れ着のように派手な柄の袷に着替えていた。頭上の装飾も増えていた。花魁を連想させるほどに豪華に、いろいろと突き刺している。顔は、花嫁も驚くほど白く、唇は、すずめの生き血を飲んだように深紅に輝いていた。その姿を見たおせんは心の奥は、懺悔の気持ちできりきりと痛んだ。

おせんも長吉も小梅も、地味な綿の小袖姿であったが、惨めな感じはしなかった。彦五郎は、相も変わらず蒼白い顔をして、白の大島紬を粹に着こなしていた。座敷の敷居を跨ぐ時から、彦五郎の視線はおせんに集中し、まるで瞬きを忘れ、おせんを射貫くように見続けた。彦五郎の存在を確認してすぐ、おせんはうつむいて、ぎゅと眼を閉じて震えを抑えた。激しい打擲の記憶が、恐怖としておせんの心理に巣くっている。隣りにいる長吉が気に入らないと、彦五郎の拳が飛んで来るような気がして怯えた。

「何しに来たんだい。まさか、親子の水入らずを見せつけに来たんじゃないでしょう」

おせんが差し出した手土産の菓子折を、縁側に放るようにしてからおれんは言った。長吉の背中に隠れるよにして座っていた小梅は、中身が餅菓子だと知っている。首を伸ばし、指をくわえ、無残に転がる菓子折に目を釘付けた。

「夫婦で、さんざんあたしと、息子、そして亡くなった亭主を弄んでおいてさ、馬鹿にして、赦せないよ」

おれんは言うど、あれこれ刺さった髪をなでつけた。袂に匂い袋を忍ばせているのか、いつか長吉の胸についた白粉と同じ匂いが香ってきた。

「長吉さんが、おれんさんから受け取った金と、海辺大工町に店を出すときにかかった一切の費用は、少しづつですが、お返ししていきたいと思ひまして」

「ふん、どうやって返すつて言うんだい。また股で稼ぐのかしら、お夕さん」

おれんが笑い、彦五郎も含み笑ひをした。膝に置いた長吉の手に力が入り、拳が硬く握られた。おせんは、長吉の憤怒を、目の脇で不安そうに見つめていた。おれんも、長吉の怒りに気付いたのか、咳払いをすると、口調を和らげた。息子の手の甲に、自分の掌を添えた。

「この彦五郎さんはね、来年の春に祝言を挙げる事が決まったんですよ、ええ。良い所のお嬢さんでしてね、彦五郎さんの過去の過ちの全てを承知の上で、喜んで嫁になると言ってくれましてね、わたしは安心していたとこなんです」

おれんの声は弾んでいた。彦五郎を、舐めるように見つめ、どこから出ているのだと思うほど、やさしい声音になったが、次の言葉を吐く時には、完璧に喉だけで声を出した。

「こんな時期に困るんですよね、薄汚い形をした親子に訪ねて来られちゃ」

「すみません……」

おせんが謝り、長吉と二人、顔を見合わせて大きくうなずいた。安堵の笑みを見せた。しかし彦五郎は不満気である。正座の足を崩して胡座を搔くと、膝頭を忙しく揺らし、口を開いた。

「この女はね、お夕はね、私が可愛がつてあげた恩も忘れ、この貧乏つたらしい男と一緒になるために、自身番に私を売った女ですよ。」

そのために私は臭い飯を食う羽目になったんだ。一生かかったって赦せるもんじゃないよ」

見た目に似合わず、割と甲高い声をしていた。込み上げてくる笑いを抑えるように長吉の口元が緩んだのをおせんは見咎めると、後ろ手で、長吉の尻をつねった。長吉は膝頭を掴んで肩を揺らしている。おれんは、夫婦の遣り取りに全く気付かない様子で彦五郎に躰を向けると、良人にするように、衿の歪みを正してやった。

「でもね、彦五郎さん、こんな女の呪縛は払わないと、あなたが合わせになれないんですよ、夢だと思って忘れちゃいなさい。どんなことがあつたつて美濃屋と繋がる女じゃないんだから、何人の男を相手にしたかわからない、酌婦上がりですよ」

「ちよいと待つてくれよおれんさん」

長吉が片膝を上げて身を乗り出した。「きゃっ」と叫んだのは彦五郎で、おれんは大店のおかみらしくどっしりと構えて長吉を見据えている。

「恨む人間が違うんじゃないあ、ありませんかえ、おれんさん……」

「……」
おれんは、ふんと、斜を向いた。長吉は小梅の頭を撫でると、おれんを、鋭いような目付きで見た。

「あんたね……」

「申し訳、ありませんでした」

おせんは突然、大きな声を出して長吉の言葉を遮った。おせんの後ろで、おせんの帯で遊んでいた小梅を隣りに引き摺りだして正座をさせると、手について、頭を深々と下げた。隣りで、いまにも爆発しそうな長吉の背を叩き、一緒に頭を下げると促した。長吉は、膝を揃えると、子供のようなふて腐れ顔で渋々と頭を下げた。

客間の座敷を出る間際、おれんが長吉の腕を取ったのを、おせんは見逃さなかった。小梅の目を手で覆い、足早に去ろうとした時、「ねえ、あなたが忘れられないんだよ、またいつでもその気になっ

たら言つてね、お金あげるから」

と、わざとらしく声を張り上げて、おれんは言った。長吉が何かを答えていたが、彦五郎の「お母さん」と嗜める声と、外から聞こえる騒ぎの音に消されて聞こえなかった。

「彦五郎さんも大変なのね」

つぶやきながら、早々と店を出ると、大八車と、人の衝突事故があったようで、往来は大混乱であった。人の方は大丈夫かと、野次馬根性も手伝つて、人垣を分けたおせんは仰天した。大八車と接触したのがおすえで、おすえは太い腕で裾の埃を払っていたが、大八車の車力は転倒して、膝を擦りむいて泣いてていた。積んでいた材木は無残に四方八方に転がっている。

「声を掛けるか？」

背後から追つて来た長吉が言ったが、おせんは小さく首を振った。かすり傷ひとつしていないおすえの怒鳴り声が、あまりにも凄まじかったからだ。人集りも一様に車力の方に同情の視線を投げていた。おせんの腕に抱かれた小梅の手にも力が入っている。

「行くか？」

「そうしましょう……」

背中を向けた時、「こらっ色魔っ」と声が掛かった。色魔に反応して振り返ろうとする長吉に、おせんは「馬鹿、なんでみんなにあんなに色魔だと知らせるのよ」と袖を引いて人垣の外へ出ようとした。

「仲良くやんなさいよ」

背中に響いたおすえの声に、おせんは振り返り、うんと深くうなずいた。おすえは太い両腕を上げて手を振っていた。まるで今生の別れのように、切なく映ったのがふしぎであった。

河岸を歩いていると、長吉が首を何度も傾けだした。

「どうした？」

「いやな……」と、長吉は腕にぶら下がる小梅を見下ろし、声を低くした。

「なんであんなに怒るんだろな、おれんさん」

「……」

「だってよう、まあいろいろ世話にはなっただけど、結構、喜んでたぜ」

「えっなんだって？」

おせんの鋭い眼差しに、長吉はぎよつと肩を竦めた。

「おれんさんを喜ばしたの？手を変え、品を変え、ねえお前さん…

…」

「いやいや、そんな、……とんでもない。おつ夕日がきれいだな、なあ小梅」

「どうなの、質問に答えなさいよ」

「いやいや、お前、手は変えても品は返られねえよ、なあ、小梅、腹が減った気がするなあ」

「そんなこと、わかっているわよっこの色魔」

おせんは長吉の腕にぶら下がる小梅を引つたみると、先立って歩き出した。小梅は何度も長吉を振り返っている。

「会うんでしょうまた、金貰えるし」

背中を向けたままおせんが言った。

「会わないで欲しいの……」

「馬鹿、会わねえよ」と長吉は返して、すぐに大笑いをした。

「なに、変な人」

振り向いたおせんに、長吉はにやにやと薄ら笑いを浮かべている。

「何よ気持悪い、ねえ小梅？」

「うん……」

小梅は仕方がないといった表情で、おせんに同意した。

「おかめ、お前よ、あれはないんじゃないか、ハハハハ」

今度、長吉は豪快に笑い出した。おせんはいよいよ首を捻り、立ち止まって。見慣れた亭主の顔をじろじろと眺めた。

「いままではよ、彦五郎に何かこう、嫉妬のようなものが胸に渦巻いてなかったわけでもないのよ、でも、さっき会ってハハハハ」

長吉は話しが続けられないほど笑い出した。無然と見つめるおせんに気遣わず腹を抱え、涙を流して笑った。そして一通り笑い終えると、怪訝そうに父親を見上げる小梅の頭を撫でた。小梅がにこりと微笑んだ。

「もう、嫉妬なんか消えて、いまはな、なんか情けなしい気分なのよ、おかめ、お前、あれのどこが良かったんだ？変な声だったな」

「さあね……」

下らないと言い捨て、前を向いて歩き出したおせんも、にこにこ笑っている。

「なあ、お前ももの好きな女だね、おかめ」

「そうね、お前さんに惚れたんだからもの好きかもね」

「僕は違うよ、めっけもんだよ、感謝しろよ」

「そうかい」

おせんがいきなり立ち止まったので、長吉は危つくぶつかりそうになった。小梅が振り向いて「ちゃん、だいじょうぶ？」と聞いた。母親似の潤んだ黒目が父親を心配していた。長吉はうなずいて、また小梅の頭を撫でた。

「彦五郎さんはね、あれで結構……」

おせんは振り向かずになんか言った。

「なんだよ？」

長吉が先回りして顔を覗き込もうとするので、おせんは小梅の手を強く引いて、小走りになった。小梅はきゃっきゃと愉しげな声をあげている。

「お前さんが気にするといけないから、言えない……」

「なっ、なんだよ気にするって……お、お前何か？そんなことを言うのか？」

「……」

長吉の苛立ちの声を背後に聞きながら、おせんは然り顔で微笑んでいる。

「そうかい、そうかい、ああわかったよ、俺はな、自慢じゃないが」

長吉はここで声音を変えた。「長吉さんて意外とたいしたことないのね」元の声に戻し、「と言われる男だ。そんなにあいつが良ければな、いつでも離縁してやらあ」

「……胸を張って言うことかしら」

頭に血の昇った長吉は、おせんの忍び笑いも聞こえないようだ。

足元の砂を蹴りながら続けた。

「俺は決めたぞ、おかめ！今晚から毎晩、修業に出る」

「馬鹿なことを」

おせんは笑顔で振り向くと、前帯の中からスルメを取り出して小梅に与えた。

「お前、そんなところにスルメを入れてるのか、どつりで何か匂うと思ったんだよ」

長吉は驚いているが、おせんはお構いなしだ。指先をちろちろと舐めて嬉しそうな顔をしている。

「ごめんよ、変な言い方して」

「……」

「彦五郎さんと一緒にいたのはね、あの人が寂しそうだったからなんだよ。金に不自由はしてなくても、貧乏なあたしよりも、あの人の心は荒んでいたから、傍で助けになってあげたいなって思ったんだね、きつと」

「ふーん……暴力を振るわれてもか？」

「お前さんも会ってわかったと思うけど、弱虫だからね彦五郎さん。あたしのような弱い女にしか手をあげれなかつたんだよ、他にさ、不満をぶつける相手がいないんだよ」

「お前、まさか」

「なんだい？」

長吉は、小梅を見た。小梅は眉を寄せたしかめっ面でスルメと格闘している。

「叩かれるのが好きな性質なんじゃねえのか？」

「いやだよ、子供の前で、もう」

おせんは長吉の背中をぶつと、笑い声を立てながら歩き出した。急に手を引つ張られたので、小梅が一瞬よろけたが、おせんが手を大きく引き揚げたので、少しぶら下がりはしたが体勢を整えた。小梅はそんな状況下でもスルメを口から外さなかった。

「でもね、お前さんに出会ってからと言うもの、彦五郎さんに抱いていた、そんな感情も一気に冷めちまつたけどね」

「えっ……そうかい」

長吉は照れたように首をたたいた。

「そうだよ。お前さんて、いつでもお天道様を向いて歩いているじゃないか、そんなところに惹かれちゃったんだねきつと」

「おいおい」

「彦五郎さんは、日陰で、お前さんは日向のような存在なのさ。長吉は貧乏だけどね、感謝を忘れない」

「これ以上、惚れるなよ」

「あと、お前さんの眼もすぎ」

「俺は男前で有名だからな」

「勘違いしないでね、お前さんの容姿がすきなわけじゃないんだよ」

「言っじゃねえか」

「容姿なんてさ、皮一枚の差だけじゃない。そんなものどうだっていいもん」

「ふーん。お前がおかめだからな」

「……」

「悪い、悪い、続ける」

ようやっとスルメを飲み込んだ小梅が、喉が渴いたと、長吉の下げている竹の水筒を指さした。

「今度から、お水ちょうだいって言うんだよ、小梅」

おせんはしゃがみ、小梅の腰に腕を廻すようにして、水を与えた。喉を鳴らして飲む小梅を見つめ、飲み終わると、袂で口を拭いてやった。水を飲みすぎ、今度はおしっこをしたそうに、小梅はじたばたと地を踏みつけた。

「およよ、小梅はおしっこかい。どれ、ちゃんがさせてやる」

長吉は、小陰を探して小梅を連れて行くと、そこで用を足させた。「良かったね、小梅、さ、帰ろう」おせんは、満足そうに微笑む小梅の手を引いて歩き出した。

「それで、なんだっけ？」

「何が？」

「俺に惚れた理由」

「ああ、お前さんすきだよ、褒められるの」

「……うん」

「お前さんの目ってね、きらきらでもなく、しぼんでもなく、きらきらしてるんだよ、目ん玉の白い部分がきれいでさ、この人、純粹なんだなと思ったの」

「ふん、下らねえ」

顔を赤くしておせんを覗き込んだ長吉は、おせんの額に口吻した。おせんはしあわせを噛みしめるように、ゆっくり瞼を閉じた。おせんの頬に伝った涙を指先で拭いてやった長吉は、口笛を吹くようにして小梅の手を引いて先に歩いた。おせんの手から、小梅の小さな手が離れた。

「あたしね、いまがいちばんしあわせだよ」

長吉の手を払い、駆け出した小梅の小さな背中を眼で追いながらおせんはつぶやいた。

「お前はずっと苦労してきたんだ、いまだけじゃなく、これから先もずっとしあわせにならなきゃいけない」

「うん」

おせんはうなずくと、遠くではしゃぐ小梅を確かめ、

「お前さん、あたしの名を知ってる？おかめじゃなくて」

長吉に指を絡めて聞いた。

「さあね、知らないね」

「もっ」

おせんは娘のように腰をくねらせ、また小梅の方へ眼をやった。

小梅はススキの枝を振り回して遊んでいる。水滴が頬に落ちた気がして、おせんは掌を出した。ぼつぼつと水が掌を濡らした。空を仰ぐと小雨が目や口に入った。先程まで晴れていたのに、いつの間にか、空合いが変わり、いまは灰色の雲に覆われていた。
「雨はきらい。」

おせんは長吉の袖を掴んでささやくように言った。

「実はね、お前さんに、大切な話があるんだよ、とても良いこと」「うん？聞きたいねえ」

おせんはうつむいて腹の辺りを擦った。

「お前、えっ？」

長吉は、驚きと、喜びを含んだ眼でおせんを覗き込んだ。続きを言おうとしたが、さっきまで黄色い声を出して遊んでいた小梅の声が静まったのが気になった。それまで止まっていた空気が動き、河岸のすすきを静かに揺らし、おせんの頬も冷たく撫でた。

「小梅……？」

殆ど無意識に小梅を探した。男が一人、こちらに向かって歩いて来るほか、小梅の姿は見当たらない。おせんは背伸びをして見た。

「あーっ」

深い溜息を漏らして、おせんは長吉を見上げた。ふふつと笑うと「もう小梅ったら、寝転んで」

「仕様がねえな」

長吉は言つと、おーい小梅と、呼び掛けながら駆け出した。途中、長吉の脇を過ぎる男がいたが、長吉はその男に目を向けることはなかった。男は、むさ苦しいまでに長い髭を蓄え、垢まみれの衣を何重にも纏っていた。おせんは突然、歩みを止めた。真夏の炎天下の下、日差しを浴びて蹲っていた、あの男だと気付いた。客に貰った赤飯と、竹筒を与え、日陰に連れてってやったあの男である。

男がおせんの横を過ぎようとしたとき、長吉が、がくりと膝を落としたのが見えた。寝転ぶ小梅の脇で、頭を垂れ、小梅の躰を抱え込んだ。異常な事態を察したおせんが駆け寄ろうとしたとき、例の

男に腕を掴まれた。

「何をするのっ」おせんは酷く抗う口振りと言った。男の口元が笑った。

「おせんちゃん。俺ですよ、気付かないんですね」

おせんの背筋に、冷たい汗が流れた。髭の下の頬がそげ落ちて、眼だけが大きく光っている男の肌は、垢や埃で黒かったが、その声は紛れもなく宗治であった。

小梅の名を呼ぶ、長吉の悲痛な声が、おせんの耳に届き、怖ろしさに胸が潰れそうになった。

「これ」

宗治は右手を挙げて見せた。綺麗な色の血に塗られた匕首が握られていた。

「三人で暮らそうと約束した」

「……宗治、さん」

おせんの視界はぼやけ、雨の雫に打たれる小梅の赤い頬が、ぼんやりと頭に浮かんだ。

「この人を忘れていた。いちばん頭を下げなければならぬ人は、おれんさんでも、彦五郎さんでもなかった。」

宗治が、小梅の血のついた匕首の先をおせんに向けた。

「赤ちゃんがいるのよ、宗治さん……」

「ふうん、誰の子だい？」

おせんの悲痛の訴えは、生気を失った宗治には伝わらなかつた。

おせんの臆気な視界に、小梅を抱えた躰を前後に揺らし、嘔び泣く長吉が映ったが、それも次第に霞んで行った。

小梅が濡れる。おせんはなぜか、そんなことを考えた。

雨足が激しくなると、ふと我に返ったように長吉が振り返り、「おせん」と、泣き声で叫んだが、そこにいる筈のおせんの姿を認めることはできなかつた。

雨は無情にも、江戸の町を差別なく、汚し続けた。

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0771s/>

謝罪

2011年5月11日12時25分発行